適。哀二我人一斯。亦孔之休。

伐レ柯如何。匪レ斧不レ克。取レ妻如何。匪レ媒不レ得。

伐レ柯伐レ柯。其則不レ遠。我遵二之子一。籩豆有レ踐。

伐柯

是れ周公東に居るとき東人の歌へる者也。或は云ふ、是れ周公の德を美めたる詩也

〔一〕柯を伐ること如何、斧に匪ざれば克はず。妻を取ること如何、〔二〕媒に匪ざれば得ず。

〔一〕斧の柄也 〔二〕媒は嚮導を用ふる所以也、媒なければ嚮導なし何を以て妻を得んや

○柯を伐り柯を伐る、其則〔一〕遠からず。我、〔二〕之子に遵ふ、〔三〕籩豆〔四〕踐〔五〕たるあり。

〔一〕柯を伐るに柯を用ふるは其大小長短近く法を取らん爲め也 〔二〕東人自ら我とする也 〔三〕其妻をさして言ふ

〔四〕祭の供物を盛る器也、木を豆といひ竹を籩といふ 〔五〕行列の狀をいふ

九罭

是れ亦前篇と同じ

九罭之魚。鱒魴。我觀二之子一。袞衣繡裳。

鴻飛遵レ渚。公歸無レ所。於レ女信處。

鴻飛遵レ陸。公歸不レ復。於レ女信宿。

是以有二袞衣一兮。無下以二我公一歸上兮。無レ使二我心悲一兮。

〔一〕九罭の魚は、〔二〕鱒魴なり。我、〔三〕之子を觀ば、〔四〕袞衣〔五〕繡裳せん。

〔一〕九つの袋ある魚網なり 〔二〕鱒は和名ますと訓じ、魴は和名まながつをと訓ず 〔三〕東人自ら我とする也 〔四〕周公を指す 〔五〕公侯の禮服には其文九章あり一つには龍、二つには山、三つには華蟲（雉）四つには火、五つには宗彝（梟）これには虎と蜼（獸）との文あり以上五章は衣に繪く、六つには藻、七つには粉米（白米）、八つには黼（斧の刃）、九つには黻（兩己相そむきたるもの）

○鴻飛んで渚に遵ふ、公歸る所無からんや、女に於て〔一〕信處す。

〔一〕再宿を信といふ

○鴻飛んで陸に遵ふ、公歸らば復らざらん。女に於て信宿す。

○是れ以て〔一〕袞衣あるも、〔二〕我公を以て歸る無かれ、我心をして悲しむる無かれ。

〔一〕東方に袞衣を服する人あるをいふ 〔二〕公を迎へ歸る者のなかちんを歎ぜる

狼跋其胡。載疐其尾。公孫碩膚。赤舄几几。

狼疐其尾。載跋其胡。公孫碩膚。德音不瑕。

狼跋

是れ周公が謙讓に過ふと雖も、其の之に處して常を失はざるを美めて作れる詩也

狼、其胡を跋み、載ち其尾に疐く。公、碩膚を孫り、赤舄几几たり。

㊀ おとがひの下に垂れさがれる肉也 ㊁ 前者と共に進退両難而も其猛を失はざるを云ふ ㊂ 大美の意、周公、其德の大美を謂りて自ら居らざること、一說に公孫とよみて成王を指すといへり ㊃ 禮服のくつ也 ㊄ おちつきて重々しきをいふ

○狼、其尾に疐き、載ち其胡を跋む。公、碩膚を孫り、德音瑕けず。

㊀ 合聞といふが如し、よき評判也 ㊁ 何の傷づく所なく其の聖人の聖人たる所を失はざるをいふ

豳國七篇二十七章

呦呦鹿鳴。食二野之苹。我有二嘉賓。鼓レ瑟吹レ笙。吹レ笙鼓レ簧。承レ筐是將。人之好レ我。示二我周行。

呦呦鹿鳴。食二野之蒿。我有二

小雅 二

雅の義は正也卽ち正樂の歌をいふ、其篇本と大小の殊なるありとゝ雖も其小に屬するもの也

鹿鳴之什二之一

鹿鳴

是れ賓客を酒饗するの詩也

呦呦たる鹿鳴、野の苹を食む。我に嘉賓あり、瑟を鼓し笙を吹く。笙を吹き簧を鼓し、筐を承けて是れ將ふ。人の我を好する、我に周行を示す。

㊀ 聲のやはらげるをいふ ㊁ しろよもぎの事 ㊂ 亦笙也、舌ある笛也 ㊃ 幣帛をのする器也 ㊄ 禮筐を行ふをいふ ㊅ 賓客を指す ㊆ 大道也先王の大道を示し教ふと也

○呦呦たる鹿鳴、野の蒿を食む。我に嘉賓あり、德音孔だ昭に、民に視すこ

嘉賓。德音孔昭。視民不恌。君子是則是傚。我有旨酒。嘉賓式燕以敖。

呦呦鹿鳴。食野之苹。我有嘉賓。鼓瑟鼓琴。鼓瑟鼓琴。和樂且湛。我有旨酒。以燕樂嘉賓之心。

四牡騑騑。周道倭遲。豈不懷歸。王事靡盬。我心傷悲。

と恌からず、君子是れ則り是れ傚ふ。我に旨酒あり、嘉賓以て燕し以て敖ばん。

㊀ かちよもぎの事 ㊁ 先王道德の教を指す、又令聞と說くも可也 ㊂ 天下の民に示し之をして體傚にうすかちざらしむるに足るをいふ ㊃ うまきさけの事 ㊄ 宴飲すること ㊅ 遊樂すること

○呦呦たる鹿鳴、野の苹を食む。我に嘉賓あり、瑟を鼓し琴を鼓す。瑟を鼓し琴を鼓し、和樂して且つ湛しむ。我に旨酒あり、以て嘉賓の心を燕樂す。

㊀ 草の名、和名ずしばりと訓ず ㊁ 安らかに樂ましむること

四牡

是れ使臣を經勞する詩也

四牡騑騑たり、周道倭遲たり、豈に歸を懷はざらんや。王事盬きこと靡し、我心傷悲す。

㊀ 四頭の牡馬をいふ ㊁ 行いて止まざる說 ㊂ 大道を指す ㊃ まはりどほき說 ㊄ 豈に歸懷の感なからんやの意 ㊅ 公事は怨にすべからざるをいふ

○四牡騑騑たり、嘽嘽たる駱馬あり、豈に歸を懷はざらんや。王事盬きこと靡し、啓處に遑あらず。

㊀ いきづく說、或は樂盛の說とあり ㊁ 白馬の黑き鬣を有するもの卽ちかはちげ馬也 ㊂ ずつと腰まづきて居ろ暇なきをいふ

○翩翩たる者は鵻、載ち飛び載ち下り、苞栩に集まる。王事盬きこと靡し、父を將ふに遑あらず。

㊀ 飛ぶ說 ㊁ 鶉鳩也はちまんばとの事をいふ ㊂ むちがり立てるとちの木を指す ㊃ とまること ㊄ 歸つて父を養ふに暇なきをいふ

○翩翩たる者は鵻、載ち飛び載ち止まり、苞杞に集まる。王事盬きこと靡し、母を將ふに遑あらず。

㊀ しげれる枸杞（くこ）の木をいふ

四牡騑騑。嘽嘽駱馬。豈不懷歸。王事靡盬。啓處。不遑啓處。

翩翩者鵻。載飛載下。集于苞栩。王事靡盬。父。不遑將父。

翩翩者鵻。載飛載止。集于苞杞。王事靡盬。母。不遑將母。

駕二彼四駱一。載驟駸駸。豈不レ懷レ歸。是用作レ歌。將レ母來諗。

皇皇者華。于二彼原隰一。駪駪征夫。每懷靡レ及。

我馬維駒。六

○彼の四駱を駕す、載ち驟すること駸駸たり。豈に歸を懷はざらんや。是を用つて歌を作り、母を將ふことを來り諗ぐ。

(一) 車を馬につくるをいふ　(二) はする貌かけてゆくこと　(三) 自ら歌を作る意味を示す　(四) 母をあげて父を含む、卽ち父母を養ふこと能はざる憾を以て君に告ぐと也

皇皇者華

是れ人君が使者を遣る時之を寤むる詩也

○皇皇たる者は華、彼の原隰に于いてす。駪駪たる征夫、每に懷うて及ぶこと靡し。

(一) 煌煌の如し、ごりかがやける貌　(二) 高くして平なる處を原と爲し下くして濕りたる處を隰と爲す、是れ使者が遠となく近となく君命をかゝやかすをいふ也　(三) 隨行するもの、多き貌　(四) 念頭常に使者の事を思うて汲汲として及ばざるが如くするをいふ

○我馬維れ駒、六轡濡ふが如し。載ち馳せ載ち驅せて、周く爰に咨諏す。

(一) 馬の二歲なるをいふ　(二) 其の色つやのうつくしきをいふ　(三) とひはかること、使臣の大務につきて人の意をうくるをいふ

轡如レ濡。載馳載驅。周爰咨諏。

我馬維騏。六轡如レ絲。載馳載驅。周爰咨謀。

我馬維駱。六轡沃若。載馳載驅。周爰咨度。

我馬維駰。六轡既均。載馳載驅。周爰咨詢。

常棣之華。鄂不二韡韡一。凡今

○我馬維れ騏、六轡絲の如し、載ち馳せ載ち驅せて、周く爰に咨謀す。

(一) あしげ馬の事　(二) 使ひなれて直なるをいふ　(三) 咨諏と同じ、とひはかること

○我馬維れ駱、六轡沃若たり。載ち馳せ載ち驅せて、周く爰に咨度す。

(一) かはちば馬の事　(二) 濡ふが如しと同義　(三) とひはかること

○我馬維れ駰、六轡既に均へり。載ち馳せ載ち驅せて、周く爰に咨詢す。

(一) かすげ馬の事　(二) よくねれたるをいふ　(三) とひはかること

常棣

是れ兄弟を戒するの樂歌也

○常棣の華、鄂として韡韡たらざらんや。凡そ今の人、兄弟に如くは莫し。

之人。莫レ如二兄弟一。
死喪之威。兄弟孔懷。原隰裒矣。兄弟求矣。
脊令在レ原。兄弟急難。每レ有二良朋一。況也永歎。
兄弟鬩二于牆一。外禦二其務一。每レ有二良朋一。烝也無レ戎。
喪亂既平。既安且寧。雖レ有二兄弟一。不レ如二友生一。

㊀ さいふり又にはうめと訓ず ㊁ 物の色の外にあらはるゝ貌 ㊂ 光明なる貌

○死喪の威、兄弟孔だ懷ふ、原隰裒まり、兄弟求む。

㊀ 人の死亡すること ㊁ 其畏るべきをいふ ㊂ 兄弟互に慕うて忘れざるをいふ ㊃ 尸を積んで原野の間に聚まるをいふ ㊄ 兄弟相もとむるをいふ

○脊令原に在り、兄弟急難なり。良朋ありと毎も、況に永歎するのみ。

㊀ 鶺鴒とも書す、いしたゝきの事也、此鳥飛べば鳴き行けば搖く、急難の意なり、水鳥にして原にあるは其常態を失ふの義と見るべし ㊁ 一にこゝにとよむ ㊂ 永く歎息すること

○兄弟牆に鬩ぐとも、外、其務を禦ぐ。良朋ありと毎も、烝戎なし。

㊀ かきのうち卽ち家庭の内を指す ㊁ 他人の輕侮を防ぐこと ㊂ 一にそれと訓じ又ひさしく訓とす

○喪亂既に平ぎ、既に安んじ且つ寧し。兄弟ありと雖も、友生に如かず。

㊀ 上章には患難の時は兄弟より善きものなしといひ、こゝには患難の後には友人より善きものとなしといふ、是れ理に悖るの甚だしきもの也

儐二爾籩豆一。飲レ酒之飫。兄弟既具。和樂且孺。
妻子好合。如レ鼓二瑟琴一。兄弟既翕。和樂且湛。
宜二爾室家一。樂二爾妻帑一。是究是圖。亶二其然乎一。

伐レ木丁丁。鳥鳴嚶嚶。出レ自二幽谷一。遷二于喬木一。

○爾の籩豆を儐ね、酒を飲みて之れ飫く。兄弟既に具り、和樂して且つ孺す。

㊀ 祭器竹を籩と爲し木を豆となす ㊁ 小兒の父母を慕ふが如くなるをいふ

○妻子好く合ひ、瑟琴を鼓するが如し。兄弟既に翕ひ、和樂して且つ湛む。

㊀ 意思の一致するをいふ

○爾の室家に宜しく、爾の妻帑を樂む。是れ究め是れ圖り、亶に其れ然る乎。

㊀ 妻子を指す ㊁ 兄弟の人に於ける其重きこと以上のべる所の如し、試みにこれを以てきはめ圖らば ㊂ 誠に其れ然ちざらんやの意

伐木

是れ朋友故舊を務する樂歌也

木を伐ること丁丁たり、鳥の鳴くこと嚶嚶たり。幽谷より出でて、喬木に遷る。嚶として其れ鳴く、其友を求むる聲なり。彼の鳥を相るに、猶ほ友を求むる聲あ

木。嚶其鳴矣。求二其友一聲。相二彼鳥一矣。猶求二友聲。矧伊人矣。不求二友生一。神之聽之。終和且平。

伐木許許。釃酒有藇。既有肥羜。以速諸父。寧適不來。微我弗顧。於粲洒掃。陳饋八簋。既有肥牡。以速諸舅。寧適不來。微我有咎。

伐二木于阪一。釃酒有衍。籩豆有踐。兄弟無遠。民之失德。乾餱以愆。有酒湑我。無酒酤我。坎坎鼓我。蹲蹲舞我。迨二我暇一矣。飲二此湑一矣。

り、矧んや伊れ人なり友生を求めざらんや。神の之を聽かば、終に和ぎて且つ平ならん。

一 木を伐る聲也 二 鳥の和鳴する聲也 三 深谷なり 四 高木なり 五 人亦友を呼びて相切磋して布衣より高位高官に遷るべきをいふ 六 神の感應あるべきをいふ

○木を伐ること許許たり、釃める酒藇たるあり。既に肥羜有りて、以て諸父を速く、寧ろ適く來らずとも、我をして顧みざらしむること微けん。於粲として洒掃し、饋を陳すること八簋。既に肥牡ありて、以て諸舅を速く。寧ろ適く來らずとも、我をして咎めしむること有ること微けん。

一 えいやえいやの聲也 二 漉したる酒のうまく見ゆる貌 三 こえたる子羊をいふ 四 朋友の同姓にして尊き者をいふ 五 水を打ち掃き清めること 七 すべて食物をいふ、所謂みけ也 八 飯を盛る器、八つといふは其盛なるをいふ 九 こえたる美の牡を指す 一〇 朋友の異姓にして尊き者をいふ

○木を阪に伐る、釃める酒衍たるあり。籩豆踐たるあり、兄弟遠ざかると無し、民の德を失ふ、乾餱以て愆つ。酒有れば我に湑し、酒無ければ我に酤ふ。坎坎として我に鼓うち、蹲蹲として我に舞ふ。我暇あるに迨んで、此湑を飲ましむ。

一 多き貌或は美しき貌とあり 二 陳列の貌 三 朋友の年相しける者を稱す 四 遠遠しき者なきをいふ 五 恩義を失ふこと 六 乾飯(ほしひ)也食の薄きものをいふ 七 こして我に飲ましむをいふ 八 買つて我にのましむをいふ 九 鼓をうつ聲也 一〇 舞ふ貌 一一 こし酒をいふ

天保

是れ人臣、君の賜を受くる者之を歌うて以て答ふる時の歌也

天、爾を保定し、亦孔だ之れ固し。爾をして單く厚から俾めば、何の福か除かざらん。爾をして多く益さしめて、以て庶からざること莫けん。

一 君を指す 二 安定すること 三 多く益す意 四 舊を除いて新を生ずる意

○天、爾を保定し、爾をして戩く穀から俾めて、罄く宜しからざること無

天保二定爾一。亦孔之固。俾二爾單厚一。何福不レ除。俾二爾多益一。以莫レ不レ庶。

天保二定爾一。俾二

爾戩穀。罄無不宜。受天百祿。降爾遐福。維日不足。

天保定爾。以莫不興。如山如阜。如岡如陵。如川之方至。以莫不增。

吉蠲爲饎。是用孝享。禴祠烝嘗。于公先王。君曰卜爾。萬壽無疆。

く、天の百祿を受く。爾に遐福を降して、維れ日も足らず。

一 歌を福、穀を祿と說く者あり 二 百福といふが如し 三 子孫長久の福をいふ 四 追つかけ追つかけ殆んど間に合はぬこと

○天、爾を保定し、以て興らざること莫し。山の如く阜の如く、岡の如く陵の如く、川の方に至るが如く、以て增さざること莫し。

一 岡の大なるものをいふ 二 阜の更に大なるものをいふ、以上は高大の意 三 其發長の量るべからざるをいふ

○吉蠲、饎を爲り、是を用つて孝享す。禴祠烝嘗、公の先王に于いてす。君曰く爾に卜す。萬壽無疆と。

一 よき日を定め、よき士を吉といひ、祭の前に齋戒して身を潔むるを蠲といふ 二 供物なり 三 孝心を以て祭祀すること 四 宗廟の四時の祭、夏を禴といひて春を祠といひ冬を烝といひ秋を嘗といふ 五 先公を指す 六 周の太王より以下を指す 七 是れ尸（かたしろ）が神意を傳ふる辭、卽ち託宣也 八 爾の爲に心に期するをいふ 九 かぎりなきこと

神之弔矣。詒爾多福。民之質矣。日用飲食。羣黎百姓。徧爲爾德。

如月之恒。如日之升。如南山之壽。不騫不崩。如松柏之茂。無不爾或承。

○神の弔る、爾に多福を詒る。民の質なる、日に用つて飲食す。羣黎百姓、徧く爾の德を爲す。

一 質實にして偽なきこと、或は以て成となし民事の平ちぐをいふ 二 多くの黑頭卽ち人民を指す 三 庶民を いふ 四 則りて之に象ること猶爾を助けて德を成さしむるが如しの意

○月の恒はるが如く、日の升るが如く、南山の壽の如く、騫けず崩れず、松柏の茂るが如く、爾に承ぐこと或らざること無し。

一 陵をいふ 二 虧けて壞るゝこと 三 猶葉落ちんとして新葉生じつゝ絶え間なきことをいふ

采薇

是れ戍役を送遣する詩也

采薇、采薇。薇亦作止。曰歸歸。歲亦莫止。靡室靡家。

薇を采り薇を采る、薇も亦作ひたり。歸らんと曰ひ歸らんと曰ひ、歲も亦莫れたり。室靡く家靡きは、玁狁の故なり。

啓居に遑あらざるは、玁狁の故なり。

玁狁之故。不レ遑二啓居一。玁狁之故。

采レ薇。采レ薇。薇亦柔止。曰レ歸曰レ歸。心亦憂止。憂心烈烈。載飢載渴。我戍未レ定。靡レ使二歸聘一。

采レ薇。采レ薇。薇亦剛止。曰レ歸曰レ歸。歲亦陽止。王事靡レ盬。不レ遑二啓處一。憂心孔疚。我行不レ來。

彼爾維何。維常之華。彼路斯何。君子之車。戎車既駕。四牡業業。豈敢定居。一月三捷。

駕二彼四牡一。四牡騤騤。君子所レ依。小人所レ腓。四牡翼翼。象弭魚服。豈不二日戒一。玁狁孔棘。

昔我往矣。楊柳依依。今我來思。雨雪霏霏。行レ道遲遲。載渴載飢。我心傷悲。莫レ知二我哀一。

(一) ぜんまいの事 (二) 發生の意 (三) 北狄なり (四) 啓處と同じ耐に在り、ずつと踏き居ること也

○薇を采り薇を采る、薇も亦柔なり。歸らんと曰ひ歸らんと曰ひ、心も亦憂ふ、憂心烈烈として、載ち飢ゑ載ち渴く。我戍未だ定まらず、歸り聘はしむることを靡し。

(一) 憂ふる貌 (二) 其苦を言へる也 (三) 戍事未だ已まざるをいふ (四) 歸りて家室の安否を問はしむる人なきをいふ

○薇を采り薇を采る、薇も亦剛し。歸らんと曰ひ歸らんと曰ひ、歲も亦陽なり。王事盬きこと靡し、啓處に遑あらず。憂心孔だ疚めり、我行かば來らじ。

(一) 太陰時の十月也 (二) 力を竭し死を致して士に還る心なきをいふ

○彼の爾たるは維れ何ぞ、維れ常の華なり。彼の路は斯れ何ぞ、君子の車なり。戎車既に駕し、四牡業業たり。豈に敢へて定り居らんや、一月三たび捷たん。

(一) 華の盛に開く貌 (二) 常棣と同じ辰韓の事 (三) 戎車を言ふ (四) 將帥を言ふ (五) たくましき貌 (六) 故へで止りて自ら安んぜざるをいふ

○彼の四牡を駕す、四牡騤騤たり。君子の依る所、小人の腓はるゝ所。四牡翼として、象弭魚服す。豈に日に戒めざらんや。玁狁孔だ棘なり。

(一) 馬のつよき貌なり (二) 將帥をさす (三) より頼む所をいふ (四) 士卒自ら稱す (五) そのかげをたのむ (六) 行列のとゝのへる形容 (七) 象骨にて弭(ゆはず)を飾りたる弓なり (八) 鮫(さめ)の皮にて箙(えびら)をはりたるものなるべし (九) 勢の甚だ急なること

○昔我往けるとき、楊柳依依たり。今我來るとき、雨雪霏霏たり。道を行くこと遲遲として、載ち渴き載ち飢う。我心傷悲すれども、我哀を知ること莫し。

(一) 柳の枝の長く垂れて物によりつく貌 (二) 雪のふりしける貌 (三) 長く遲きをいふ

出車

是れ戍役より還り來れる兵卒を勞する歌謠也

我出二我車一。于二彼牧一矣。自二大子所一。謂二我來一矣。召二彼僕夫一。謂二之載一矣。王事多レ難。維其棘矣。

我出二我車一。于二彼郊一矣。設二此旐一矣。建二彼旄一矣。彼旟旐斯。胡不二旆旆一。憂心悄悄。僕夫況瘁。

王命二南仲一。往城二于方一。出レ車彭彭。旂旐央央。天子命レ我。城二彼朔方一。赫赫南仲。玁狁

我、我車を出す、彼の牧に于いてす、天子の所より、我に來れと謂ふ。彼の僕夫を召して、之に載せよと謂ふ。王事難多し、維れ其れ棘なり。

一 牧場のある郊外を指す 二 周王を指す 三 御夫なり 四 艱難の事多きをいふ 五 是行の緩にすべからざるをいふ

○我、我車を出す、彼の郊に于いてす。此の旐を設け、彼の旄を建つ。彼の旟旐、胡ぞ旆旆たらざらん。憂心悄悄として、僕夫況に瘁みぬ。

一 龜と蛇とを畫ける旗の名、所謂玄武の旗也 二 旄牛の尾を旗竿のかしらにつけたるもの之を車上に建つる也 三 鳥隼を畫ける旗を旟といふ、即ち朱雀の旗也 四 旗のひらめく形容 五 憂ふる貌 六 一にこれと讀む、瘁むとはかじける事也

○王、南仲に命じて、往いて方に城かしむ。車を出すこと彭彭として、旂旐央央たり。天子我に命じ、彼の朔方に城かしむ。赫赫たる南仲、玁狁を襄ふ。

一 周王なり 二 當時の大將 三 朔方の事 四 盛に多きをいふ 五 旂に畫ける旗也 六 あざやかに明なる貌 七 威勢のかがやける貌 八 追ひ退くること

于襄。昔我往矣。黍稷方華。今我來思。雨雪載塗。王事多レ難。不レ遑二啓居一。豈不レ懷レ歸。畏二此簡書一。

喓喓草蟲。趯趯阜螽。未レ見二君子一。憂心忡忡。既見二君子一。我心則降。赫赫南仲。薄伐二西戎一。

春日遲遲。卉木萋萋。倉庚喈喈。采レ蘩祁祁。執レ訊獲レ醜。薄言還歸。赫

○昔我往けるとき、黍稷方に華さけり。今我來るとき、雨雪載ち塗なり。王事難多し、啓居に遑あらず。豈に歸を懷はざらんや、此の簡書を畏る。

一 ぬかるみ、泥まみれとなること 二 簡は札也、古の書は竹簡にしるせり これは出征の時の宣旨の書也、師ち勅命かしこむべきをいふ也

○喓喓たる草蟲、趯趯たる阜螽。未だ君子を見ざれば、憂心忡忡たり。既に君子を見れば、我心則ち降る。赫赫たる南仲、薄か西戎を伐つ。

一 涼しい聲にて鳴き出す貌 二 馬追蟲の事 三 ぱたぱたと跳び出す貌 四 ばったの事 五 南仲を指す 六 憂ふる貌 七 胸がさがること、安心する樣也 八 餘力を勞せざる意

○春日遲遲たり、卉木萋萋たり。倉庚喈喈たり。蘩を采ること祁祁たり。訊を執へ醜を獲て、薄か言に還り歸る。赫赫たる南仲、玁狁を夷ぐ。

一 日の長き貌 二 卉は草也 三 盛なる貌 四 うぐひす也 五 つれなしに鳴くこと 六 白よもぎの事 七 采る人の衆多なるをいふ 八 惡首の當に訊問すべき者をいふ 九 其黨類を指す 一〇 京師に歸著すること

赫南仲。玁狁于夷。

と 平定すること

杕杜

是れ亦役に從へる徒卒等の歸來を迎勞する樂歌也

杕たる之杜あり、睆たる其實あり。王事盬きこと靡し、我日を繼ぎ嗣ぐ。日月陽なり、女の心傷む、征夫も遑あらん。

一 特立の貌 二 赤なしの樹、林檎の類 三 實のれる貌 四 日を以て日に繼ぐこと 五 十月の月日を指す 六 出征の人も暇あるべし何の爲に歸り來らざるかと心中にくりかへす言葉也

○杕たる之杜あり、其葉萋萋たり。王事盬きこと無し、我心傷悲す。卉木萋たり、女の心悲む、征夫も歸らん。

一 盛なる貌、葉の大にしげること

○彼の北山に陟りて、言に其杞を采る。王事盬きこと靡し、我父母を憂ふ。檀車

有二杕之杜一。有二睆其實一。王事靡レ盬。繼二嗣我日一。日月陽止。女心傷止。征夫遑止。

有二杕之杜一。其葉萋萋。王事無レ盬。我心傷悲。卉木萋止。女心悲止。征夫歸止。

陟二彼北山一。言采二其杞一。王事靡レ盬。憂二我父母一。檀車幝幝。四牡痯痯。征夫不レ遠。

匪レ載匪レ來。憂心孔疚。期逝不レ至。而多爲レ恤。卜筮偕止。會言近止。征夫邇止。

幝幝たり、四牡痯痯たり、征夫も遠からず。

一 疲れたるいふ

○載するに匪ず來るに匪ず、憂心孔だ疚む。期逝いて至らず、而して多く恤を爲す。卜筮偕にす、會せ言ふ近しと、征夫邇からん。

一 裝載して歸來せざること 二 歸期已に過ぎて猶は至らざるをいふ 三 心に憂ふることの少なからざるをいふ 四 龜甲にてトひたり筮竹にてトひたり、兩方共に用ふること 五 うちかたに合せて歸期の近きをいふ

南陔

是れ笙の詩なり、辭ありて詞なし

鹿鳴之什十篇（一篇は辭なし）四十六章

白華之什二之二

魚麗二于罶一鱨鯊。君子有レ酒。旨且多。

魚麗二于罶一魴鱧。君子有レ酒。多且旨。

白華

是れ笙の詩なり、南陔と同じく、聲ありて詞なし

華黍

是れ亦笙の詩にして、蕭韶用の樂歌也。聲ありて詞なし

魚麗

是れ萬物盛多、能く禮を備ふるを美するの詩なり

魚、罶を麗、鱨鯊(一)なり。君子酒あり、旨くして且つ多し。

(一) 一本に罶に麗(かゝ)ると讀めり、漁具又筍(うけ)といふ (二) 鱨はなまづに似て刺あり俗にぎぎと稱ふ、鯊は沙中の小魚、俗にごりと稱す

○魚、罶を麗、魴鱧(一)なり。君子酒あり、多くして且つ旨し。

(一) 魴はまたおつを、鱧はうなぎの類、あるひは鮎(あめのうを)ともいふ

魚麗二于罶一鱧。君子有レ酒。旨且有。

物其多矣。維其嘉矣。

物其旨矣。維其偕矣。

物其有矣。維其時矣。

○魚、罶を麗、鰋鯉(一)あり。君子酒あり、旨くして且つ有り(二)。

(一) 鰋一名鮎といふなまづ也鯉は即ちこひ也 (二) 備ること

○物(一)其れ多し、維れ其れ嘉し(二)。

(一) 魚を指す以下皆同じ (二) 善なり

○物其れ旨し、維れ其れ偕(一)し。

(一) 均なり

○物其れ有り、維れ其れ時なり(一)。」

(一) 時を得るをいふ

由庚

是れ亦笙の詩なり、聲ありて詞なし

南有嘉魚

南有嘉魚。烝然罩罩。君子有酒。嘉賓式燕以樂。

南有嘉魚。烝然汕汕。君子有酒。嘉賓式燕以衎。

南有樛木。甘瓠纍之。君子有酒。嘉賓式燕綏之。

翩翩者鵻。烝然來思。君子有酒。嘉賓式又思。

是れ亦酒宴通用の樂歌也

南に嘉魚あり、烝然として罩罩たり。君子酒あり、嘉賓式て燕し以て樂む。

㊀ 鮮魚をいふ ㊁ 或は久如と做して說く久しく行つて罩、或は發語の辭と做して說くこゝにといふ程の意 ㊂ 篊の事也、魚をとる笊(ざる)をいふ ㊃ 宴飲すること

○南に嘉魚あり、烝然として汕汕す。君子酒あり、嘉賓式て燕し以て衎む。

㊀ 魚をすくふ網

○南に樛木あり、甘瓠之に纍る。君子酒あり、嘉賓式て燕し之を綏んず。

㊀ 枝の垂れ下れる木をいふ ㊁ 氣に苦きあり甘きあり、甘きものは食ふべしひさごと訓ず、干瓢の類なり ㊂ 心を安んずること

○翩翩たる者は鵻、烝然として來る。君子酒あり、嘉賓式て燕し又思ふ。

㊀ ひら〳〵飛ぶ樣をいふ ㊁ はちまんぼとの事 ㊂ 忘れざる樣に取る

南山有臺。北山有萊。樂只君子。邦家之基。樂只君子。萬年無期。

南山有桑。北山有楊。樂君子。邦家之光。樂只君子。萬壽無疆。

崇丘

是れ空の詩なり、賢ありて詞なし

南山有臺

是れ亦酒宴通用の樂歌也

南山に臺あり、北山に萊あり。樂しき君子は、邦家の基なり。樂しき君子は、萬壽期無けん。

㊀ 草の名すげと訓ず笠を製すべし故に毛傳には雨を防ぐ所以なりとあり ㊁ 和名あかざと訓ず杖と爲すべし ㊂ 限りなきをいふ

○南山に桑あり、北山に楊あり、樂しき君子は、邦家の光なり。樂しき君子は萬壽疆り無けん。

南山有レ杞。北山有レ李。樂只君子。民之父母。樂只君子。德音不レ已。

南山有レ杞。北山有レ李。樂只君子。民之父母。樂只君子。德音不レ已。

○南山に杞あり、北山に李あり。樂しき君子は、民の父母なり。樂しき君子は、德音已まず。

一 枸杞(くこ)なり　二 すもゝなり　三 含聞長く絶えざるをいふ

南山有レ栲。北山有レ杻。樂只君子。遐不二眉壽一。樂只君子。德音是茂。

○南山に栲あり、北山に杻あり、樂しき君子は、遐ぞ眉壽ならざらん。樂しき君子は、德音是れ茂なり。

一 ぬるでの類、或は狐の茶袋といふ　二 和名あはきと訓ず或はもちの木といふ　三 眉の長きは長壽の相なりといふ

南山有レ枸。北山有レ楰。樂只君子。遐不二黃耇一。樂只君子。保二艾爾後一。

○南山に枸あり、北山に楰あり。樂しき君子は遐ぞ黃耇ならざらん。樂しき君子は、爾の後を保艾す。

一 けんぼ梨の事なりといふ　二 あづさの類　三 老齡のこと、年老いぬれば白髮黃に變じ顏色淺黑くなるを以て也　四 子子孫孫を指す　五 安養するをいふ

由儀

是れ酒宴の詩なり、舞ありて調なし

蓼蕭

是れ諸侯天子に朝するとき、天子之に蕭蓼を賜ふ所の樂歌也

蓼彼蕭斯。零露湑兮。既見二君子一。我心寫兮。燕笑語兮。是以有レ譽處兮。

蓼彼蕭斯。零露瀼瀼。既見二君子一。爲レ龍爲レ光。其德不レ爽。壽考不レ忘。

○蓼たる彼の蕭、零露湑たり。既に君子を見て、我心寫す。燕して笑語す、是を以て譽ありて處んず。

一 長大なる貌　二 蒿の下に爾の字あり、是語助のみ　三 露にぬれたるさまをいふ　四 心がさつぱりと打ちとけたるをいふ　五 宴飲のこと　六 名譽ありて常に其位に安處するをいふ

○蓼たる彼の蕭、零露瀼瀼たり。既に君子を見て、龍と爲し光と爲す。其德爽はず、壽考忘れず。

一 露の多き貌　二 龍の義とす卽ち恩寵也　三 榮光をいふ　四 正しきを失はざること　五 生命の長久なること

蓼彼蕭斯。零露泥泥。既見二君子一。孔燕豈弟。宜レ兄宜レ弟。令德壽豈。

蓼彼蕭斯。零露濃濃。既見二君子一。鞗革沖沖。和鸞雝雝。萬福攸レ同。

湛湛露斯。匪レ陽不レ晞。厭厭夜飲。不レ醉無レ歸。

○蓼たる彼の蕭、零露泥泥たり。既に君子を見て、孔だ燕して豈弟なり。兄に宜しく弟に宜しく、令德壽豈なり。

一 うるはへる貌　二 豈は愷と同じ樂しき義也、弟は悌と同じやすらかにしてもよろこばしき義也　三 いのちながくして且つ樂しむをいふ

○蓼たる彼の蕭、零露濃濃たり。既に君子を見て、鞗革沖沖たり。和鸞雝雝として、萬福の同る攸。

一 厚き貌とあり、たつぷりとかゝること　二 手綱の餘りたる革をいふ　三 たれ下りたる形容　四 共に鈴の名、車の軾にあるを和といひ、馬のくつわにあるを鸞といふ　五 鈴の聲のやはらかなるをいふ

湛露

是れ天子、諸侯を燕する詩也

○湛湛たる露、陽に匪ざれば晞かず。厭厭たる夜飲、醉はざれば歸ることなし。

一 露の盛なる形容　二 天日を指す　三 安らけく、久しく、あきたれる貌　四 私宴をいふ

湛湛露斯。在二彼豐草一。厭厭夜飲。在レ宗載考。

湛湛露斯。在二彼杞棘一。顯允君子。莫レ不二令德一。

其桐其椅。其實離離。豈弟君子。莫レ不二令儀一。

○湛湛たる露、彼の豐草に在り。厭厭たる夜飲、宗に在りて載ち考す。

一 茂れるくさをいふ　二 宗室のこと即ち同姓の諸侯を指す　三 其宴を終りまで成し遂ぐるをいふ

○湛湛たる露、彼の杞棘に在り。顯に允なる君子は、令德ならざること莫し。

一 杞はひひらぎ、棘はばらと說くものあり　二 才德あらはれかゞやき信實にしていつはらざるをいふ

○其桐其椅、其實離離たり。豈弟の君子、令儀ならざるは莫し。

一 きりの木なり　二 しまぎり也　三 その實の重く垂れたる樣をいふ　四 儀儀作法の正しきこと

白華之什十篇（五篇は辭なし）二十三章

彤弓之什二之三

彤弓

是れ天子、有功の諸侯を燕して弓矢を錫ふ時の樂歌也

彤弓弨兮。受言藏之。我有嘉賓。中心貺之。鐘鼓既設。一朝饗之。

彤弓弨兮。受言載之。我有嘉賓。中心喜之。鐘鼓既設。一朝右之。

彤弓弨兮。受言櫜之。我有嘉賓。中心好之。鐘鼓既設。一朝醻之。

經

彤弓弨たり、受けて言に之を藏む。我に嘉賓あり、中心之を貺ふ。鐘鼓既に設けて、一朝之を饗す。

㊀ 朱ぬりの弓をいふ ㊁ ゆるめる貌とあり、弓をはづせる樣をいふ ㊂ 弓人の手より受けて之を王府に藏すること ㊃ 天子を指す ㊄ 誠心を以て之を與ふること ㊅ 其速なる敢て踰閾せざるを意味す ㊆ もてなす

○彤弓弨たり、受けて言に之を載ぐ。我に嘉賓あり、中心之を喜ぶ。鐘鼓既に設けて、一朝之を右む。

㊀ 樂(ゆだめ)にかけておくこと ㊁ 其功を勸むるをいふ

○彤弓弨たり、受けて言に之を櫜に す。我に嘉賓あり、中心之を好す。鐘鼓既に設けて、一朝之に醻ゆ。

㊀ ふくろに入れておくをいふ ㊁ 凡そ飲酒の禮、はじめに主人、賓に酌むを獻といひ、賓、主人に答ふるを酢といひ、主人又自ら飲みて賓に酌むを醻といふ、醻の意は酬也、こゝにては厚き意と勸むる意とを含む

菁菁者莪。在彼中阿。既見君子。樂且有儀。

菁菁者莪。在彼中沚。既見君子。我心則喜。

菁菁者莪。在彼中陵。既見君子。錫我百朋。

汎汎楊舟。載沈載浮。既見君子。我心則

菁菁者莪

是れ賓客を燕飲するの詩なり。或は云ふ、此れ人材を育成することを樂みて歌へる者なりと

菁菁たる者は莪、彼の中阿に在り。既に君子を見る、樂んで且つ儀あり。

㊀ 盛なる貌 ㊁ 和名をけぎと訓ず、よきぎの類、或はいふ狐あざみの事なりと ㊂ 阿中と同じ、大陵を阿といふ ㊃ 酒宴の儀式を取り行ふをいふ

○菁菁たる者は莪、彼の中沚に在り。既に君子を見る、我心則ち喜ぶ。

㊀ 沚中と同じ、沚は水中の洲なり

○菁菁たる者は莪、彼の中陵に在り。既に君子を見る、我に百朋を錫ふ。

㊀ 陵中と同じ ㊁ 二貝を朋といふ、古は貝を以て貨とし爲す後世に錢を用ふるが如し、この句の意は我に百朋の重貨を賜はるが如しと也

○汎汎たる楊舟、載ち沈み載ち浮ぶ。既に君子を見る、我心則ち休んず。

㊀ 水にたゞよふ樣をいふ ㊁ やなぎにて作れる舟なり ㊂ 未だ君子を見ざる前の心の狀態の定まらざるをた

休。

六月棲棲。戎車既飭。四牡騤騤。載是常服。玁狁孔熾。我是用急。王于出征。以匡王國。

比物四驪。閑之維則。維此六月。既成我服。我服既成。于三十里。王于出征。以佐天子。

四牡修廣。其大有顒。薄伐玁狁。以奏膚公。有嚴有翼。共武之服。共武之服。以定王國。

玁狁匪茹。整居焦穫。侵鎬及方至于涇陽。織文鳥章。白旆央央。元戎十乘。以先啓行。

戎車既安。如輊如軒。四牡既信。既佶且閑。薄伐玁狁。

とへていへる也 ㊃ 安心しておちつくをいふ

六月

是れ宣王の北伐を詠ぜる詩也

六月棲棲として、戎車既に飭ふ。四牡騤騤として、是の常服を載す。玁狁孔だ熾なり、我是を用つて急なり。王于に出征せしめ、以て王國を匡しうせしむ。

㊀ 夏の六月、周の八月に當る ㊁ 不安の貌とあり、いそがはしく氣ぜはしきをいふ ㊂ 兵車なり、皮を以てかためたるもの也 ㊃ 强き貌偉强なる樣をいふ ㊄ 兵時規定の服なり ㊅ 北狄なり ㊆ 尹吉甫自ら稱する辭

○物を比して四驪あり、之を閑はして維れ則あり。維れ此の六月、既に我服を成す。我服既に成る、于くこと三十里。王于に出征せしめ、以て天子を佐けしむ。

㊀ 物を比較すること、こゝにては馬の力をそろふるをいふ ㊁ 四頭の黑馬なり ㊂ 馬を乘り閑しゝ遲速共則

○四牡修廣に、其大、顒たることあり。薄か玁狁を伐つて、以て膚公を奏す。嚴たるあり翼たるあり、武の服に共す。武の服に共して、以て王國を定む。

㊀ 長大に同じ ㊁ 大なる貌 ㊂ 大功をいふ ㊃ 言上すること、毛傳には爲すとあり ㊄ おごそかなる態度をいふ ㊅ つゝましやかなる態度をいふ ㊆ 軍事上の務なり ㊇ 供と同じ、間に合せて取り行ふこと

○玁狁茹らず、焦穫に整居す。鎬と方とを侵して、涇陽に至る。織文鳥章、白旆央央たり。元戎十乘、以て先んじて行を啓く。

㊀ 自ら量らざるをいふ ㊁ 周に近き北方の地名、穫音護とす ㊂ 人寇を立てとゝのへること ㊃ 皆北方の地名 ㊄ 同上 ㊅ 地名、涇水の北に在り ㊆ 織は幟と同じ小旗なり、その文章に鳥をえがきたるをいふ ㊇ 旗の旗の末につぎたるもの ㊈ 鮮明なる貌 ㊉ 大なる戎車をいふ ㊊ 軍の前鋒となりて發程するをいふ

○戎車既に安んじ、輊の如く、軒の如し。四牡既に信なり、既に佶にして且つ閑へり。薄か玁狁を伐ちて、大原に至る。文武なる吉甫、萬邦憲を爲す。

至二于大原一。文武吉甫。萬邦爲レ憲。

吉甫燕喜。既多受レ祉。來二歸自レ鎬。我行永久。飲御二諸友一。炰レ鼈膾レ鯉。侯誰在矣。張仲孝友。

薄言采レ芑。于二彼新田一。于二此菑畝一。方叔涖止。其車三千。師干之試。方叔率止。乘二其四騏一。四騏翼翼。路車有レ奭。簟茀魚服。鉤膺鞗革。

薄言采レ芑。于二彼新田一。于二此中鄉一。方叔涖止。其車三千。旂旐央央。方叔率止。約軝錯衡。八鸞瑲瑲。服二其命服一。朱芾斯皇。有二葱珩一。

(一) 俯也さがること (二) 仰也あがること 前者と共に車の動搖せざるを形容するなり (三) 壯健なる貌 (四) 北方の地名 (五) 文武備ね備りたること (六) 當時の大將尹吉甫其人なり (七) 萬邦の手本といふこと

○吉甫燕喜し、既に多く祉を受く。鎬より來歸す、我行永く久し。飲みて諸友に御め、鼈を炰き鯉を膾にす。侯れ誰か在る。張仲が孝友。

(一) 凱旋の宴に與かりて喜ぶこと (二) 多くの褒美を受くること (三) 征行に從ふ月日の少かざるをいふ (四) 食物を進むること (五) すつぽんなり (六) 尹吉甫の友人なり、其人孝友なるを以て、しかいふ

采芑

是れ宣王の開征を詠ぜる詩也

薄か言に芑を采る、彼の新田に于いてし、此の菑畝に于いてす。方叔涖め其車三千、師干之れ試ふ。方叔率る、其四騏に乘り、四騏翼翼たり。路車奭たることあり。簟茀魚服し、鉤膺鞗革す。

(一) 薄は語勢を助ぐる詞也 (二) 新に開きたる田の一歲なるを菑といひ、二歲なるを新田といひ、三歲なるを畬といふ、畝はうね也 (三) 宣王の卿士、命を受けて將と爲る者也 (四) 三千乘なり、兵車一乘には甲士三人、步卒七十二人あり、外に二十五人ありて車を將く、是れ其の兵衆の盛んなるを形容する也 (五) 師は人衆也、干は扞也ふせぐ意、蓋し軍隊防戰の演習を爲すこと也 (六) 四頭の黑馬也 (七) 次第の亂れざる形容或は以て壯健の貌となす (八) 大車なり天子の賜ふ所 (九) 色の赤きを形容する辭 (一〇) 竹の網代を車のかこひにしたるもの (一一) 獸の皮を以てかざりたるもの (一二) 馬のむながいの前にあたる飾りにて、金にて之を作る (一三) 手綱の革をいふ

○薄か言に芑を采る、彼の新田に于いてし、此の中鄉に于いてす。方叔涖めり、其車三千、旂旐央央たり。方叔率る、約軝錯衡八鸞瑲瑲たり。其命服を服し、朱芾斯れ皇として、瑲たる葱珩あり。

(一) 其田能く治りて民の居る所となれる地をいふ (二) 旂は交龍のはた、旐は錦蛇のはた (三) ひらめく形容 (四) 約は束也 (五) 軝飾をつけたる馬の衡(くびき)をいふ (六) 馬のくつわの兩方につくる鈴、四匹なるを以て八鸞といふ (七) 鈴のかち〳〵と鳴る聲をいふ (八) 天子命ずる所の服なり (九) 朱色の膝蔽(ひざおほひ)なり (一〇) 旂と同じ、てりかゞやくをいふ (一一) 佩玉のかしらに横へたる玉の葱(ねぎ)の如く青色なるもの

鴥彼飛隼。其飛戾ㇾ天。亦集二爰止一。方叔涖止。其車三千。師干之試。方叔率止。鉦人伐ㇾ鼓。陳ㇾ師鞠ㇾ旅。顯允方叔。伐ㇾ鼓淵淵。振ㇾ旅闐闐。

蠢爾蠻荊。大邦爲ㇾ讎。方叔元老。克壯二其猶一。方叔率止。執ㇾ訊獲ㇾ醜。戎車嘽嘽。嘽嘽焞焞。如ㇾ霆如ㇾ雷。顯允方叔。征二伐玁狁一。蠻荊來威。

○鴥たる彼の飛隼、其れ飛んで天に戻り、亦爰の止に集る。方叔涖めり、其車三千、師干之れ試ふ。方叔率ゐ、鉦人鼓を伐ち、師を陳ね旅に鞠ぐ。顯に允ある方叔、鼓を伐つこと淵淵たり、旅を振むること闐闐たり。

一 勢盛に飛ぶ貌　二 はやぶさ、鷹の一種也　三 其の當に止まるべき所に止まるをいふ　四 鉦(かね)を打つ役人也、征には鐃と鐲との總名、其形皆鈴の如し、人衆を動かすには鼓を用ふ　五 二千五百人を師といふ、陳とは列を作ること　六 五百人を旅といふ、鞠とは鬪戰の事を告げて警戒すること　七 才德あきらかに中心實あるもの　八 鼓聲の遠くどよめくをいふ　九 引き揚ぐること　十 鼓聲のどんと響くこと振旅の時には最初には鼓を打つ也

○蠢爾たる蠻荊、大邦を讎と爲す。方叔は元老なれども、克く其猶を壯にす。方叔率ゐ、訊を執へ醜を獲。戎車嘽嘽たり、嘽嘽焞焞たり、霆の如く雷の如し。顯に允ある方叔、玁狁を征伐して、蠻荊來り威る。

一 うごめくと訓す、蟲などの無知にして動く樣をいふ　二 荊州のえびすなり　三 中國を指す　四 大老をいふ　五 其輩の當に訓問すべきもの　六 其篇類をいふ說　七 衆さ　八 盛なる說　九 疾雷なり　十 長嘯すること

荊來威。

我車既攻。我馬既同。四牡龐龐。駕言徂ㇾ東。田車既好。四牡孔阜。東有二甫草一。駕言行狩。之子于苗。選ㇾ徒囂囂。建ㇾ旐設ㇾ旄。搏二獸于敖一。駕二彼四牡一。四

車攻

是れ宣王が、內、政事を修め、外、男狄を攘ひて文武の古に復せしを美めたる詩也

我車既に攻く、我馬既に同じ。四牡龐龐たり、駕して言に東に徂かん。

一 堅固なること　二 馬の力のそろへること　三 充實する形容　四 洛邑を指す

○田車既に好く、四牡孔だ阜なり。東に甫草あり、駕して言に行きて狩せん。

一 田獵に用ふる所の車也　二 盛大なること　三 大なる草と說くあり之に從へば是れ獵法の草を刈りて隄防をきづき獸を逐うて之に入れ獲いて之を射るをいふ也、甫田の草と說くあり朱子は直に甫田の事とし之を地名と爲す

○之子于に苗す、徒を選へて囂囂たり。旐を建て旄を設け、獸を敖に搏つ。

一 有司を指す　二 狩獵の通名なり　三 聲のかまびすしきをいふ　四 旗の事、前の出車の詩に出づ　五 同上　六 地名

○彼の四牡に駕す、四牡奕奕たり。赤芾金舄、會同繹たることあり。

牡奕奕。赤芾金舄。會同有繹。

決拾既佽。弓矢既調。射夫既同。助我舉柴。

四黃既駕。兩驂不猗。不失其馳。舍矢如破。

蕭蕭馬鳴。悠悠旆旌。徒御不驚。大庖不盈。

之子于征。有聞無聲。允矣君子。展也大成。

吉日維戊。既伯既禱。田車既好。四牡孔阜。升彼大阜。從其羣醜。

吉日庚午。既差我馬。獸之所同。麀鹿麌麌。漆沮之從。

○決拾既に枚び、弓矢既に調ふ。射夫既に同じ、我を助けて柴を舉ぐ。

一 決はゆがけ也象牙の環を右の大指につけて弦をかけて引く者をいふ、拾はゆごて也なめし革を左の臂につけ油をしぼりて弦ず、水を防ぐ者をいふ 二 ゆがけ、ゆごてを左右の手にはめそなへること 三 釣合のよく整ふこと 四 射手なり 五 獵ひ居るをいふ 六 積倉をいふ、穫物の多きことを意味す

○四黃既に駕し、兩驂猗よらず。其馳を失はず、矢を舍ちて破るが如し。

一 四頭の黃馬をいふ 二 兩方の副馬をいふ 三 正しくゆがまざるをいふ 四 馳驅の法を誤らざること 五 巧にして力のある射ぶりをいふ

○蕭蕭たる馬鳴、悠悠たる旆旌。徒御驚かず、大庖盈たず。

一 ゆつたりとさわがしからぬ樣をいふ 二 のどかにゆつたりと見ゆること、前者と共にしづまりかへつて居る光景 三 いろ〳〵の旗指物をいふ 四 步卒と車御となり 五 喧噪せざるをいふ 六 君の庖(くりや)なり 七 之を取るに度ありて欲を逞めざるをいふ

○之子于に征く、聞くこと有りて聲なし。允なるかな君子、展に大成す。

一 有司を指す 二 征くうはさは聞きたれども實際何等の聲を聞かざりき是れ其の至りて嚴肅なることをいへる也 三 宣王を指す 四 其德業の大成を讚美する也

吉日

是れ宣王の田獵を美めて歌へる者也

吉日維れ戊、既に伯し既に禱す。田車既に好し、四牡孔だ阜なり。彼の大阜に升つて、其羣醜を從ふ。

一 良日をいふ 二 十干の戊(つちのえ)に當る日也 三 馬祖の祭也 四 穫物の多きを祈ること 五 をかの大なるもの 六 禽獸の羣衆を謂ふ

○吉日庚午、既に我馬を差ぶ。獸の同まる所、麀鹿麌麌たり。漆沮より之れ從ふ、天子の所なり。

奚。漆沮之從。天子之所。

瞻彼中原。其祁孔有。儦儦俟俟。或羣或友。悉率左右。以燕天子。

既張我弓。既挾我矢。發彼小豝。殪此大兕。以御賓客。且以酌醴。

㊀かのえ、うまの日　㊁其足をそろふること　㊂鹿の牝を麀といふ　㊃鹿群の衆多なる形容　㊄川の名　㊅天子の御獵場に適當なるをいふ

○彼の中原を瞻れば、其れ祁に孔だ有り。儦儦俟俟として、或は羣或は友。悉く左右を率ゐて、以て天子を燕んず。

㊀原中と同じ　㊁禽獸の肥大にして且つ衆多なるをいふ　㊂はしる貌　㊃あゆむ貌　㊄三四づれを羣と いふ　㊅二四づれを友といふ　㊆事を共にする人を指す　㊇天子を安らかに樂しましむるをいふ

○既に我弓を張り、既に我矢を挾み、彼の小豝に發ちて、此の大兕を殪し、以て賓客に御めて、且つ以て醴を酌む。

㊀豕の牝を豝といふ　㊁矢を射ること　㊂野牛なり　㊃一矢にて射ころすをいふ　㊄甘酒のこと

鴻雁

是れ宣王が離散せる萬民を安集したる德を美めて作れる詩也

鴻雁于飛。肅肅其羽。之子于征。劬勞于野。爰及矜人。哀此鰥寡。

鴻雁于飛。集于中澤。之子于垣。百堵皆作。雖則劬勞。其究安宅。

鴻雁于飛。哀鳴嗷嗷。維此哲人。謂我劬勞。維彼愚人。謂我宜驕。

鴻雁于飛、肅肅たる其羽あり。之子于に征いて、野に劬勞す。爰に矜人に及ぼし、此の鰥寡を哀む。

㊀鴻も雁の一種也、大を鴻といひ小を雁といふ　㊁羽音なり　㊂流民自ら相謂ふ也　㊃野といひて其處る所なきを示す　㊄病みつかるゝをいふ　㊅あはれむべき人を指す　㊆老いて妻なきを鰥といひ老いて夫なきを寡といふ

○鴻雁于に飛んで、中澤に集まる。之子于に垣し、百堵皆作す。則ち劬勞すと雖も、其れ究に安宅あり。

㊀深中に同じ　㊁家を建て垣を造ること　㊂一丈を板となす五板を堵と爲す、一堵は即ち五丈也　㊃同時に建築すること　㊄安定を得ること

○鴻雁于に飛んで、哀鳴嗷嗷たり。維れ此の哲人、我を劬勞すと謂ふ。維れ彼の愚人、我を驕を宣すと謂ふ。

㊀かなしむ聲をいふ　㊁物知りの人を指す即ち歸來して其堵に安んじたる人民を指す　㊂使臣自ら謂ふ　㊃前の哲人の反對也　㊄驕奢を人に宣傳すと批評するをいふ

夜如何其。夜未央。庭燎之光。君子至止。鸞聲將將。

夜如何其。夜未艾。庭燎晰晰。君子至止。鸞聲噦噦。

夜如何其。夜郷晨。庭燎有輝。君子至止。言觀其旂。

庭燎

是れ宣王の朝を觀るを美めたる詩也

夜何如ん。夜未だ央ならず。庭燎の光あり。君子至る、鸞聲將將たり。

㊀ 夜の時刻の早晩を問へる也 ㊁ 未だ夜半に至らずと答へる也 ㊂ 所謂篝火(かがり火)也、庭上に設くる大燭也 ㊃ 諸侯を指す ㊄ 鈴の聲がりん〳〵と鳴る也

○夜何如ん。夜未だ艾きず。庭燎晰晰たり。君子至る、鸞聲噦噦たり。

㊀ 夜の未だ明けざるをいふ ㊁ 燎火の餘とろ〳〵と燃ゆるをいふ ㊂ 車の近づきて鈴聲の高かちず低かちず微かに聞きとちゝるをいふ

○夜何如ん。夜晨に郷ふ。庭燎煇たるあり。君子至る、言に其旂を觀る。

㊀ いよ〳〵天明になりしをいふ ㊁ 火の氣のぼんやりとなること ㊂ はたの色の分明に見ゆるをいふ

沔水

是れ亂を憂ふるの詩也。或は云ふ、此れ宣王を戒めて作れる者なりと

沔彼流水。朝宗于海。鴥彼飛隼。載飛載止。嗟我兄弟。邦人諸友。莫肯念亂。誰無父母。

沔彼流水。其流湯湯。鴥彼飛隼。載飛載揚。念彼不蹟。載起載行。心之憂矣。不可弭忘。

鴥彼飛隼。率彼中陵。民之訛言。寧莫之懲。我友敬矣。

沔たる彼の流水、海に朝宗す。鴥たる彼の飛隼、載ち飛び載ち止まる。嗟我が兄弟、邦人諸友。肯へて亂を念ふこと莫かれ、誰か父母なからん。

㊀ 水の流の一杯となるをいふ ㊁ 諸侯天子に春見ゆるを朝といひ夏見るを宗といふ、流水の海に赴くは諸諸侯の天子に朝するが如し ㊂ 勢盛に飛ぶ貌 ㊃ はやぶさ也、鷹の一種也 ㊄ 諸侯の或は朝し或は朝せざるに喩ふ ㊅ 爭亂を起さんと思ひ立つをいふ ㊆ 人たれか父母なからん、子の父母に於けるは臣の君に於けるが如しの意

○沔たる彼の流水、其流湯湯たり。鴥たる彼の飛隼、載ち飛び載ち揚る。彼の蹟せざるを念うて、載ち起ち載ち行く。心の憂あり、弭忘すべからず。

㊀ 水の波だちて盛に流るゝ形容 ㊁ 道に循はざるをいふ ㊂ 躓つたりあるいたり落ちつきの出來ざる樣をいふ ㊃ 心配をやめて之を忘るゝをいふ

○鴥たる彼の飛隼、後の中陵に率ふ。民の訛言、寧ろ之を懲らすこと莫し。我友敬せば、讒言其れ興らんや。

㊀ 陵中と同じ、岡の中をいふ ㊁ 民間に流行する種々の間ちがへる言語を指す ㊂ 上に在る者は義として之

讒言其興。

鶴鳴二于九皐一。聲聞二于野一。魚潛二在レ淵一。或在二于渚一。樂二彼之園一。爰有二樹檀一。其下維蘀。他山之石。可二以攻レ玉。

鶴鳴二于九皐一。聲聞二于天一。魚在二于渚一。或潛在レ淵。樂二彼之園一。爰有二樹檀一。其下維蘀。他山之石。可二以錯レ玉。

を懲し止むべきに感嚴地に落ちて之を放任するをいふ ㊃ 我兄弟邦人諸友を包括して說くべし ㊄ 讒心 意を以て事に當るをいふ ㊅ さかしらごと也

鶴鳴

是れ善を陳べ誨を納るゝ詩也、毛詩の小序には宣公を誨ふとあり

鶴、九皐に鳴く、聲、野に聞ゆ。魚潛んで淵に在り、或は渚に在り。彼の園を樂む、爰に樹檀あり。其下に維れ蘀あり、他山の石、以て錯と爲す可し。

㊀ 皐は澤也、澤の水あふれて穴となりてたまれる處九つあり以て深く遠き意を含む ㊁ 鶴の形は見るべからざれども其聲はがらかに野外にきこゆるをいふ、以て至誠の掩ふべからざるに喩ふる也 ㊂ 魚の或は潛み或は出づるをいふ以て君子の治れば進み亂るれば退くに喩ふ ㊃ 朝廷なり ㊄ うえられたるまゆのみ木をいふ是れ賢臣の朝に在るに比する也 ㊅ 落葉を以て小人に喩ふ ㊆ 砥石のこと、玉を研くには他山の石にても可なり、賢人君子をあぐるに何ぞ遠近親疎を問はんやの意

○鶴、九皐に鳴く、聲、天に聞ゆ。魚、渚に在り、或は潛んで淵に在り。彼の園を樂む、爰に樹檀あり。其下に維れ穀あり、他山の石、以て玉を攻む可し。

在レ淵。樂二彼之園一。爰有二樹檀一。其下維穀。他山之石。可二以攻レ玉。

祈父。予王之爪牙。胡轉二予于恤一。靡レ所二止居一。

㊀ かぢと訓ず今のかうぞ也、製紙發明以前には一種の潤木なりしならん ㊁ 玉をみがくこと、以て君の下人と共に勵りて修省強防して其の德器を成就するに喩ふ

形弓之什十篇四十章

祈父之什二之四

祈父

是れ軍士、久役を怨みて詠ぜし者也

祈父よ、予は王の爪牙なり。胡ぞ予を恤に轉じて、止まり居る所靡からしむる。

㊀ 司馬なり祈の字を本とす祈は畿内の畿と同じ、天子の畿内の軍事を司る役也 ㊁ 六軍の士也、卽ち近衛兵をいふ ㊂ つめときばとなり、王の左右にありて非常を保護すること ㊃ 憂愼の地に移轉せしむるを云ふ、北狄征戎の人となること

祈父。予王之爪士。胡轉二予于恤一。靡レ所二底止一。

祈父。亶不レ聰。胡轉二予于恤一。有二母之尸饔一。

○祈父よ、予は王の爪士なり。胡ぞ予を恤に轉じて、底り止まる所靡からしむる。

一 爪牙の士といふに同じ

○祈父よ、亶に聰ならず。胡ぞ予を恤に轉じて、母をして饔を尸ること有らしむる。

一 聰明なるをいふ　二 熟食をいふ、之をつかさるはと炊事を爲すをいふ、子として父母の養に事かくことを歎じたる也

白駒

是れ賢者去りて留むべからざるを以て宣王を刺れる詩也

皎皎白駒。食二我場苗一。縶レ之維レ之。以永二今朝一。所レ謂伊人。於レ焉逍遙。

皎皎白駒。食二我場藿一。縶レ之維レ之。以永二今夕一。所レ謂伊人。於レ焉嘉客。

皎皎白駒。賁然來思。爾公爾侯。逸豫無レ期。慎二爾優游一。勉二爾遁思一。

皎皎白駒。在二彼空谷一。生芻一束。其人如レ玉。毋下金二玉爾

○皎皎たる白駒、我場の苗を食む、之を縶ぎ之を維ぎ、以て今朝を永うせん。所謂伊の人、焉に逍遙せよ。

一 是れ賢者去りて留むべからざるを以て宣王を刺れる詩也　二 皎皎たる白駒、我場の苗を食む、之を縶ぎ之を維ぎ、以て今朝を永うせん。所謂伊の人、焉に逍遙せよ。

一 潔白なる駒　二 はたけの草のわかばえなり　三 其の足をつなぐこと　四 其手綱をつなぐこと　五 今朝一日だけ長く引き延ばすこと　六 賢者を指す　七 遊びやすらふこと、焉にをいてくに於いてよむ人もあり

○皎皎たる白駒、我場の藿を食む。之を縶ぎ之を維ぎ、以て今夕を永うせん。

一 豆の葉なり　二 よき客人なり

○皎皎たる白駒、賁然として來る。爾を公とし爾を侯とし、逸豫期なけん。爾が優游を慎み、爾が遁思を勉めよ。

一 光采ある貌或は黄白の色と說く　二 遊び樂むこと　三 ぶらぶらと遊びくらすこと　四 去らんとする意思をいふ　五 決すること勿れとの意也、無理につとめよと同義

○皎皎たる白駒、彼の空谷に在り。生芻一束、其人玉の如し。爾が音を金玉にして、遐心有ること毋かれ。

一 生のまじさのひとたばね、以て駒の薄きに喩ふ　二 其の人の德の美しきこと殆んど玉のきずなきが如くなる

音。而 有中退 心。

黄鳥 黄鳥。無レ集二于 穀。無レ啄二我 粟。此 邦之人。不二我 肯 穀。言 旋 言 歸。復二我 邦 族。

黄鳥 黄鳥。無レ集二于 桑。無レ啄二我 粱。此 邦之人。不レ可二與 明。言 旋 言 歸。復二我 諸 兄。

黄鳥 黄鳥。無レ

をいふ　㊃ 明玉の如く愛惜すること　㊄ 我をうとんずる心を有つこと勿れと也、音信の絶えざるを誡め意あり

黄鳥

是れ民、異國に遷きて、其所を得ず、以て之を作れる也

黄鳥黄鳥、穀に集まること無かれ、我粟を啄むこと無かれ。此邦の人、我に肯へて穀からず。言に旋り言に歸りて、我邦族に復らん。

㊀ 木の名、かぢ也　㊁ もみ也　㊂ 善道を以て我と居ちざるをいふ　㊃ 我が本國の家族に立ち戻らんの意

○黄鳥黄鳥、桑に集まること無かれ、我粱を啄むこと無かれ。此邦の人、與に明にすべからず。言に旋り言に歸りて、我諸兄に復らん。

㊀ 苦樂の情を互に明に知らしめがたきをいふ　㊁ 多くの兄弟の許に歸るをいふ

○黄鳥黄鳥、栩に集まること無かれ、我黍を啄むこと無かれ。此邦の人、與に

集二于 栩。無レ啄二我 黍。此 邦之人。不レ可二與 處。言 旋 言 歸。復二我 諸 父。

我 行二其 野。蔽 芾其 樗。昏 姻之 故。言 就レ爾 居。爾 不二我 畜。復二我 邦 家。

我 行二其 野。言 采二其 蕨。昏 姻之 故。言 就レ爾 宿。爾 不二我 畜。言 歸 思レ復。

處る可からず、言に旋り言に歸りて、我諸父に復らん。

㊀ とちの木也

我行其野

是れ民、異國に適きて、其婚姻に依りて、收恤せられざるを以て之を詠ずる者也

我、其野に行く、蔽芾たる其樗あり。昏姻の故に、言に爾に就いて居る。爾、我を畜はず、我邦家に復らん。

㊀ 枝葉の廣がり蔽ふ貌　㊁ 樗木の名、ぬるでと訓ず或はきつねの茶ぶくろともいふ　㊂ 壻の父と婦の父と兩家相調つて昏姻の家といふ

○我、其野に行き、言に其蕨を采る、我を畜はず、昏姻の故に、言に爾に就いて宿る。言に歸り斯に復らん。

㊀ 惡菜の名、しを訓ず俗に云ふぎしぎし也　㊁ 毛傳「斯復」を作るに從ふ

我行二其野一。言采二其蓄一。不レ思二舊姻一。求二爾新特一。成不レ以レ富。亦秖以レ異。

秩秩斯干。幽幽南山。如二竹苞一矣。如二松茂一矣。兄及弟矣。式相好矣。無二相猶一矣。

似二續妣祖一。築レ室百堵。西南其戸一。爰居爰處。爰笑爰語。

約レ之閣閣。椓レ之橐橐。風雨攸レ除。鳥鼠攸去。君子攸レ芋。

如二跂斯翼一。如二矢斯棘一。如二鳥斯革一。如二翬斯飛一。君子攸レ躋。

殖殖其庭。有二

○我、其野に行き、言に其蓄を采る。舊姻を思はず、爾が新特を求む。成に富を以てせざれども、亦秖に異なるを以てす。

一 經萊の名、或はいふ山牛蒡なりと　二 もとの妻をいふ　三 新らしき匹偶となるべき婦人をいふ、時は西なり　四 彼の富を以て我の貧を厭はざるをいふ　五 其新しくして故きに異なるを以てなりの意

斯干

是れ室を築いて既に成り、落成して以て之を落すが爲に作れる者也

○秩秩たる斯の干、幽幽たる南山。竹の苞きが如く、松の茂るが如し。兄及び弟、式つて相好し、相猶ることなかれ。

一 流れ行くことの次第あるをいふ　二 水涯のこと　三 整還なる貌　四 終南山の事也　五 其下の固きに喩ふ　六 其上の密なるに喩ふ　七 これとよむもよし　八 仲の善きこと　九 相傾けんとはかることなかれと也

一說に爭ふなかれと解き又一說に他の惡しき仕業に似せて恩愛をすつるなかれと解く

○妣祖に似ぎ續ぎて、室を築くこと百堵、其戸を西南にし、爰に居り爰に處り、爰笑ひ爰に語る。

一 先祖に繼ぎて子に傳ふること　二 一丈を板と爲し五板を堵と爲す

○之を約することを閣閣、之を椓することを橐橐。風雨の除る攸、鳥鼠の去る攸、君子の芋き攸。

一 板を束ぬること　二 上下のりかさなる形容　三 地を打ち固むること卽ち地ぎやう也　四 地形のひゞきをいふ　五 風雨鳥鼠の害なきをいふ　六 或はゐはいなりと訓む

○跂ちて斯に翼めるが如く、矢の斯に棘なるが如く、鳥の斯に革るが如く、翬の斯に飛ぶが如く、君子の躋る攸なり。

一 屋作りの殿正なるに喩ふ　二 室の四角の直なるに喩ふ　三 革とは鷲きゞ鋭の翼するをいふ、卽ち屋のむねのそりたる鳥のゐどろきそびえて飛び立たんとするが如きをいふ　四 簷の高くそりて采色の美なるに喩ふ、翬は雉の事也　五 天子の升りいまして政をきく所なりの意

○殖たる其庭、覺たる其楹あり。噲噲たる其正、曦曦たる其冥、君子の寧ず

覺其極。噲噲其正。噳噳其冥。君子攸寧。

下莞上簟。乃安斯寢。乃寢乃興。乃占我夢。吉夢維何。維熊維羆。維虺維蛇。

大人占之。維熊維羆。男子之祥。維虺維蛇。女子之祥。

乃生男子。載寢之牀。載衣之裳。載弄之璋。其泣喤喤。朱芾斯皇。室家君王。

乃生女子。載寢之地。載衣之裼。載弄之瓦。無非無儀。唯酒食是議。無父母詒罹。

誰謂爾無羊。

る攸なり。

一 平に正しき義也 二 高く大くしてすぐなる貌也 三 寢の下にたてる柱のこと 四 氣持好きこと 五 明るい處 六 深く廣き說 七 奥まりたる處 八 休息して身を安んずる所なりの意

○莞を下にし簟を上にして、乃ち斯の寢に安んじ、乃ち寢ね乃ち興き、乃ち我夢を占ふ。吉夢維れ何ぞ、維れ熊維れ羆、維れ虺維れ蛇。

一 蒲のむしろ 二 竹むしろ、以上共に牀の上にかくるもの也 三 寢室のこと 四 獸の名、しぐまと訓ず 五 羆の名、まむしと訓ず

○大人之を占ふ。維れ熊維れ羆は、男子の祥。維れ虺維れ蛇は、女子の祥。

一 大卜の屬、占夢の官也 二 熊羆は陽物にして山に在り力極めて強し故に男子の祥といふ、祥は兆也 三 虺蛇陰物にして穴に處り力極めて弱し故に女子の祥といふ

○乃ち男子を生めば、載ち之を牀に寢ねしめ、載ち之に裳を衣せ、載ち之に璋を弄せしむ。其の泣くこと喤喤たり。朱芾斯に皇として、室家より君王たらん。

一 半圭を璋といふ玉器也 二 泣く聲の大なる形容 三 朱色のひざかけ 四 煌と同じ、てりかゞやくこと 五 室を有ち家を有ちやがて君と為り王となるべきをいふ

○乃ち女子を生めば、載ち之を地に寢ねしめ、載ち之に裼を衣せ、載ち之に瓦を弄せしむ。非も無く儀も無く、唯酒食是れ議り、父母に罹を貽すこと無かれ。

一 むつきの事、別に加ふることを爲さず男子に比して取り扱ひの劣れる也 二 女工の事に早くかちはせん爲と 三 儀は宜也、是也之を要するに是もなければ非もなしと也 四 酒食は家政の大本なり、故に家事を整理することにしか云ふ 五 心配をかくること

無羊

是れ牧事成ることありて牛羊衆多なるを美めたる詩也

誰か爾を羊無しと謂ふ、三百維れ羣あり。誰か爾を牛無しと謂ふ、九十其

三百維羣。誰謂爾無牛。九十其犉。爾羊來思。其角濈濈。爾牛來思。其耳濕濕。
或降于阿。或寢或訛。爾牧來思。何蓑何笠。或負其餱。三十維物。爾牲則具。
爾牧來思。以薪以蒸。以雌以雄。爾羊來思。矜矜兢兢。不騫不崩。麀鹿
之以肱。畢來既升。

れ犉なり。爾が羊來るとき、其角濈濈たり。爾が牛來るとき、其耳濕濕たり。

一 三百頭一羣と爲るをいふ　二 黃色にして脣の黑き牛をいふ。一說には牛の七尺以上を犉といへり、此の種の牛のみにて九十頭を算す其他推して知るべし　三 角をあつめてやすみ、よくやはらげること　四 牛病むときは耳の色かわく今にれかみて耳動かすを見れば其色うるみてうるはしきをいふ

○或は阿に降り、或は池に飲み、或は寢ね或は訛く。爾が牧來るとき、蓑を何ひ笠を何ひ、或は其餱を負ふ。三十維れ物、爾の牲則ち具はれり。

一 谷間をいふ　二 牧人をいふ　三 乾飯(はしいひ)をいふ　四 毛色をいふ、毛色のかはれるもの三十頭あり皆純色也　五 犧牲には純を用ひて駁を用ひず其用の廣多きをいへる也

○爾が牧來るとき、以て薪とり以て蒸り、以て雌とり以て雄とる。爾の羊來る、矜矜兢兢として、騫けず崩れず、之を麀くに肱を以てし、畢く來り既く升る。

一 薪も蒸も薪材也、粗を薪といひ細を蒸といふ　二 禽獸をつかまへること　三 堅强なる貌　四 同上　五 かちだのそこなはれざるをいふ　六 麀鹿(めじか)を用ひざるをいふ　七 來らしむれば來り、升らしむれば升ること

牧人乃夢。衆維魚矣。旐維旟矣。大人占之。衆維魚矣。實維豐年。旐維旟矣。室家溱溱。

節彼南山。維石巖巖。赫赫師尹。民具爾瞻。憂心如惔。不敢戲談。國既卒斬。何用不監。

節彼南山。有

○牧人乃ち夢む。衆維れ魚すと、旐と維れ旟と。大人之を占ふ。衆維れ魚すとは、實に維れ豐年ならん。旐と維れ旟とは、室家溱溱たらんとす。

一 人衆の魚を捕るを夢むること　二 鵰蛇をえがけるはたと鳥をえがけるはたを夢みること　三 五穀收穫の多きこと魚を捕るが如くなるをいふ　四 子孫の衆多なるをいふ、旐と旟とは衆を聚むる所以なれば也

節南山

是れ周の幽王の大夫家父が尹氏を用ひて亂を致しゝを刺りて作れる詩也

○節たる彼の南山、維れ石巖巖たり。赫赫たる師尹、民具に爾を瞻る。憂心惔くが如く、敢へて戲談せず。國既に卒に斬えんとす、何を用つて監みざる。

一 高峻なる貌　二 終南山を指す　三 石の積みかさなれる貌　四 あきらかに盛なる貌　五 大師の尹氏也　六 人民が皆羣をかけ目をつくること　七 やけこがるゝ如くなるを云ふ　八 戲れごとにも其類を語らずとなり　九 何を以て察せざるとなり

○節たる彼の南山、實の其れ猗たるあり。赫赫たる師尹、不平何と謂はん。天方

實其猶。赫赫師尹。不平謂何。天方薦瘥。喪亂弘多。民言無嘉。憯莫懲嗟。

尹氏大師。維周之氐。秉國之均。四方是維。天子是毗。俾民不迷。不弔昊天。不宜空我師。弗躬弗親。庶民弗信。弗問弗仕。勿罔君子。式夷式已。無小人殆。瑣瑣姻亞。則無膴仕。

に薦に瘥み、喪亂弘に多し。民言嘉すること無けれども、憯て懲り嗟くこと莫し。

㊀ 木の實のりて美はしく猶なるをいふ ㊁ 其心を公平にせざること ㊂ 之を何とかいはんの意 ㊃ 天心しきりに怒を發して災禍を下すこと ㊄ 國家のはゞびみだれんとする事體の極めて多きこと ㊅ 人民懲罰多きをいふ ㊆ 尹氏は未だかつて之に懲り嗟きて改めざると也

○尹氏は大師、維れ周の氐なり。國の均を秉つて、四方是れ維ち。天子是れ毗け、民をして迷はざらしむ。昊天に弔まれず、宜しく我師を空むべからず。

㊀ 氐と同じ、担抵の義 ㊁ 國の政權を掌ること ㊂ 人心をして歸嚮を失はざらしむるを本職とすべしとの意 ㊃ 師は人衆也、久しく位に在りて人衆を困窮せしむるは不可なりの意

○躬らせず親らせざれば、庶民信ぜず。問はず仕へざれば、君子を罔くこと勿かれ。式つて夷にし式つて已め、小人に殆ぶめらるゝこと無かれ。瑣瑣たる姻亞は、則ち膴仕せしむること無かれ。

○昊天嘯しからず、此鞠訩を降す。昊天惠まず。此大戾を降す。君子如し屆らば、民心をして闋ましめん。君子如し夷ならば、惡怒是れ違からん。

㊀ 諸邪人まかせなること ㊁ 問ひ試みて人物を知ることをほさざるをいふ ㊂ 心を平にして其已むべきは速に已めしむべきをいふ ㊃ 小人の爲に國家を危殆ならしむることなかれと也 ㊄ こざ〳〵したる貌 ㊅ 斯の父を姻といひ、あひむことを亞といふ ㊆ 膴は厚也、厚き祿を與へて仕へしむるをいふ

○昊天に弔まれず、亂、定まること有ること靡し。式つて月に斯れ生じて、民をして寧んぜざらしむ。憂心酲の如く、誰か國の成を秉るものぞ。自ら政を爲さず、卒に百姓を勞す。

㊀ 不公平なること ㊁ 鞠は窮也訩は亂也卽ち困窮と憂亂とをいふ ㊂ 大なることが ㊃ 至誠の道を行ふこと ㊄ 爭亂を止むること ㊅ 公平なるをいふ ㊆ 人民の上を惡み上を怒る心の自然に除き去るをいふ

○彼の四牡を駕して、四牡項領なり。我、四方を瞻るに、蹙蹙として聘する所靡

牡項領。我瞻二四方一蹙蹙靡レ所レ騁。

方茂二爾惡一。相二爾矛一矣。既夷既懌。如二相醫一矣。

昊天不レ平。我王不レ寧。不レ懲二其心一。覆怨二其正一。

家父作レ誦。以究二王訩一。式訛二爾心一。以畜二萬邦一。

し。

㊀ 大なる頸をいふ、車のくびきは馬のひたくびにかく頸大なれば馬強し以て大臣の威を振にするをいふ　㊁ 蹙蹙小の縮ちゞこまること土地の漸次に侵さるゝをいふ

○方に爾が惡を茂にせば、爾が矛を相ん。既に夷ぎ既に懌べば、相醫ゆるが如し。

㊀ 惡を積むの甚しきこと　㊁ 其戈さきの將に闘はんとするを見んとなり　㊂ 一旦既に平和愉悦の時に及べば　㊃ 其憎の相親むこと賓主獻酬するが如くなるをいふ

○昊天平ならず、我王寧からず。其心を懲りず、覆つて其正を怨む。

㊀ 尹氏の心に徴りて其過を改めざるをいふ　㊁ 反つて人の己を正さんとするものを怨むと也

○家父誦を作りて、以て王訩を究む。式つて爾が心を訛して、以て萬邦を畜はん。

㊀ 家は氏、父は字、周の大夫也　㊁ 詩を作ること、詩は論すべきもの也　㊂ 王政昏亂の由る所を究むること　㊃ 化と同じ、心を改め風を易ふること

正月

是れ亦大夫の作る所の詩也

○正月繁霜あり、我心憂傷す。民の訛言、亦孔だ之れ將なり。念ふは我獨りのみ、憂心京京たり。哀しいかな我小心、瘨憂以て痒めり。

㊀ 夏正の四月也、四月は即ち建巳の月にして純陽の月也、以て霜あるべからざる也　㊁ 憂傷の音を指す　㊂ 大なる貌　㊃ うれひふさぐこと　㊄ 病人の如くなるをいふ

○父母我を生む、胡ぞ我をして瘉ましむる。我より先ならず、我より後ならず。好言口よりし、莠言口よりす。憂心愈愈たり、是を以て侮らるゝことあり。

㊀ やみわづらふこと　㊁ 此の亂の起る前世ならず又後世ならずして現在なるを歎ずる也　㊂ 莠言も惡言も同じ口より出づるを賤しめる也　㊃ いよ〳〵甚しき貌

○憂心惸惸として、我が祿無きを念ふ。民の享なきも、幷せて其れ臣僕とす。哀

我無レ祿。民之
無レ辜。并其臣
僕。哀我人斯。
于レ何從レ祿。瞻二
烏爰止一于二誰
之屋一。

瞻二彼中林一。侯
薪侯蒸。民今
方殆。視レ天夢
夢。既克有レ定。
靡二人弗一レ勝。有二
皇上帝一。伊誰
云憎。

謂二山蓋卑一。爲レ
岡爲レ陵。民之
訛言。寧莫二之
懲一。召二彼故老一。
訊二之占夢一。具

しいかな我れ人、何れに于いて祿に從はん。烏の爰に止まるを瞻るに、誰の尾に于いてせん。

一 憂ふる意 二 不安なるをいふ 三 無辜の民人も囚へられて臣僕となるをいふ 四 知らず何の處に於て天祿を得んと也 五 烏の飛んで誰の屋に止るを知らざるが如しといふ意

○彼の中林を瞻れば、侯れ薪あり侯れ蒸あり。民今方に殆く、天を視るに夢夢たり。既に克く定まること有らば、人に勝たざること靡し。皇たる上帝あり、伊れ誰をか云に憎まん。

一 林中と同じ 二 不明なる貌 三 所謂天定りて人に勝つの義 四 大なる貌 五 善を憎まずして惡を憎むやゝ必せり

○山を蓋し卑しと謂ふ、岡たり陵たり。民の訛言、寧ろ之を懲すこと莫し。彼の故老を召し、之を占夢に訊ふ。具に予を聖なりと曰ふ、誰か烏の雌雄を知らん。

一 山の本をいへば岡たり又陵たりとの意 二 民の故ちに蕪偽の言を爲すも亦上に在るものの之を懲らしめざるによると也 三 元老なり世故に經過せる人を指す 四 夢の吉凶を占ふ官人也 五 皆かゝから以て聖人となもへり 六 誰かよく其言の是非を別たんや

曰二予聖一。誰知二
烏之雌雄一。
謂二天蓋高一。不二
敢不レ局。謂二地二
蓋厚一。不二敢不レ
蹐。維號二斯言一。
有レ倫有レ脊。哀
今之人。胡爲二
虺蜴一。

○天を蓋し高しと謂ふ、敢へて局まずんばあらず。地を蓋し厚しと謂ふ、敢へて蹐せずんばあらず。維れ斯言を號ぶ、倫あり脊あり。哀しいかな今の人、胡ぞ虺蜴を爲す。

一 身を屈し行く、頭を天に觸れんことを恐れて也 二 ぬき足して行く、身の地に浸せんことを憂ひて也、前者と共に法律嚴厳にして歩行すら安全なちざるをいふ 三 號呼して斯言を爲すこと 四 倫は道也、脊は理也、言論の道理あるをいふ 五 きむしととかげと也、共に人を螫して害を與ふ

瞻二彼阪田一。有二
菀其特一。天之
扰レ我。如レ不二我
克一。彼求二我則一。
如レ不二我得一。執レ
我仇仇。亦不二
我力一。

○彼の阪田を瞻れば、菀たる其特あり。天の我を扰かす、我に克たざるが如し。彼、我則を求むる、我を得ざるが如し。我を執へて仇仇とし、亦我を力めしめず。

一 地のさかしく土やせたる田をいふ 二 茂り盛なる貌 三 苗のぬきんでて生へたるをいふ 四 うごかし惱ますこと 五 我に勝たざるを恐るゝものの如きをいふ 六 王を指す 七 之を離んじて我を得ざるときかと思へるが如きをいふ 八 其堅固にすること仇讐に對するが如くなるをいふ 九 我を用ひざること

心之憂矣。如レ
○心の憂あり、之を結ぶこと或るが如し。今茲の正、胡ぞ然く厲なる。燎の

或結之。今茲之正。胡爲厲矣。燎之方揚。寧或灭之。赫赫宗周。褒姒滅之。

方に揚がる、寧ぞ之を滅するものの或らん。赫赫たる宗周、褒姒之を滅す。

(一) 憂の固く結ぼれて解けざるを云ふ (二) 火の手の盛んなること (三) 古は正と政と相通ず (四) はげしきをいふ (五) 火田の事草木を燒きて殺するをいふ (六) 滅いはゆる亡ぼすこと (七) あきらかに盛なる貌 (八) 鎬京卽ち周を指す (九) 幽王の后也、褒は國名也

終其永懷。又窘陰雨。其車既載。乃棄爾輔。載輸爾載。將伯助予。

○終に其れ永く懷ふ、又陰雨に窘められん。其車既に載せ、乃ち爾が輔を棄つ。載ち爾の載を輸し、伯に予を助けよと將ふ。

(一) 大雨あるをいふ (二) 車の輻(や)に木を結びて輪の力を助くるもの也、之を棄つと賢臣を遠くるに比する也 (三) 積みたる荷物をおとすこと (四) 人の字にて某といふが如し (五) 物を落して後に人の助を乞ふも時既に遲しの意

無棄爾輔。員于爾輻。屢顧爾僕。不輸爾載。終踰絕險。曾是不意。

○爾が輔を棄つること無く、爾が輻を員し、屢〻、爾が僕を顧みば、爾が載を輸さじ。終に絕險を踰えん、曾て是れ意とせずや。

(一) 極めて困難なる場處をいふ

魚在于沼。亦匪克樂。潛雖伏矣。亦孔之炤。憂心慘慘。念國之爲虐。

○魚、沼に在り、亦克く樂むに匪ず。潛んで伏すと雖も、亦孔だ之れ炤なり。憂心慘慘として、國の虐を爲すを念ふ。

(一) 外より見易きをいふ (二) いたゞきしき貌 (三) 國政の苛酷なるを念うて忘れられざるをいふ

彼有旨酒。又有嘉殽。洽比其鄰。昏姻孔云。念我獨兮。憂心慇慇。

○彼、旨酒あり、又、嘉殽あり。其鄰に洽比し、昏姻孔だ云す。念ふは我獨りのみ、憂心慇慇たり。

(一) 小人を指す (二) うまき酒 (三) よきさかな (四) よび合せてもてなすこと (五) 姻類の人とも周旋して相友愛するをいふ (六) ねんごろなる貌憂心のいたましきをいふ

佌佌彼有屋。蔌蔌方有穀。民今之無祿。天夭是椓。哿矣富人。哀此惸獨。

○佌佌として彼、屋あり、蔌蔌として方に穀あり。民今の祿なき、天夭し是れ椓ふ。哿いかな富める人、哀しいかな此の惸獨。

(一) 小なる貌 (二) まづしくいやしき貌 (三) 蔌のこと (四) 穀のこと (五) 害なり、そこなふこと (六) 亂此に至るとも、富人は猶賑ふべきをいふ (七) あはれにかなしむべきはこの獨苦の窮民なるぞよの意、惸獨とはひとりものをいふ

十月之交

十月之交。朔日辛卯。日有食之。亦孔之醜。彼月而微。今此下民。亦孔之哀。

日月告凶。不用其行。四國無政。不用其良。彼月而食。則維其常。此日而食。于何不臧。

是れ亦大夫、幽王を刺れる詩也

十月の交、朔日辛卯。日、之を食するあり、亦孔だ之れ醜し。彼月にして微け、此日にして微く。今此の下民、亦孔だ之れ哀し。

一 夏正の八月也　二 日月の交會するところ、晦朔の間即九月と十月のあはひをいふ　三 かのとうの日をいふ　四 日蝕ありしをいふ　五 十月は純陽の月也、此月に日蝕あるは甚だ凶しきをいふ　六 月は臣の象也　七 日は君の象也、古人は日蝕を以て月の日を食すと爲す故に今之を借りて臣の君を犯す義に對ふ　八 日蝕あるは政治のあしき結果也如何にも下民等はあはれむべきものかなしや

○日月にして凶を告ぐるは、其行を用ひざればなり。四國にして政無きは、其良を用ひざればなり。彼月にして食するは、則ち維れ其の常なり。此日にして食するに、于に何ぞ臧からざる。

一 天下の人に凶を知らすること即ち日蝕、月蝕の事を指す　二 行くべき道を行かざるをいふ　三 暗人君子を指す　四 月の滿つるは十五夜の故にかくるを以て常といふ　五 何としてこのよからざる事を行ふぞと嚴しく之を問ひ詰むる也

爗爗震電。不寧不令。百川沸騰。山冢崒崩。高岸爲谷。深谷爲陵。哀今之人。胡憯莫懲。

皇父卿士。番維司徒。家伯冢宰。仲允膳夫。聚子內史。蹶維趣馬。楀維師氏。豔妻煽方處。

抑此皇父。豈曰不時。胡爲我作。不卹我

○爗爗たる震電、寧からず令からず。百川沸騰し、山冢崒崩し、高岸谷と爲り、深谷陵と爲る、哀しいかな今の人、胡ぞ憯て懲ること莫き。

一 いなびかりの貌　二 天下安からず政教善からざること　三 沸は水の出づること、騰は水の山坂に上ることのけはしき處をいふ　四 山の頂上をいふ　五 山の岩石のけはしき處をいふ、されど之にては前句と調合はず故に之を碎の字として山岳の崩れ碎くる義とすれば始めて明了なるを覺ゆ　六 今人の天變地異を畏れざるを戒むる意

○皇父は卿士、番は維れ司徒。家伯は冢宰、仲允は膳夫。聚子は內史、蹶は維れ趣馬。楀は維れ師氏、豔妻煽に方に處る。

一 字也　二 卿の士をいふ　三 氏なり　四 官名卿也、邦教を掌る　五 字なり　六 官名邦治を掌る　七 字なり　八 官名、上士也、王の大膳を掌る　九 氏なり　一〇 官名、中大夫也、醫藥膳羞等の事を掌る　一一 氏なり　一二 官名、中士也、馬政を掌る　一三 氏なり　一四 官名、中大夫也、司朝失の事を掌る　一五 美色を豔といふ即ち褒姒を指す、以上小人事を外に用ひ、壁妾を內に寵はすことをいへる也

○抑々、此の皇父、豈に時ならずと曰はんや。胡爲れぞ我を作かし、我に卽いて謀らず。我牆屋を徹し、田卒く汙萊す。曰く予戕はず、禮則ち然りと。

謀徹我牆屋。田卒汙萊。曰予不戕。禮則然矣。

皇父孔聖。作二都于向一。擇二三有事一。亶侯多藏。不下慭遺二一老一。俾守二我王一。擇有二車馬一。以居徂向。

黽勉從事。不二敢告勞一。無罪無辜。讒口囂囂。下民之孽。匪降自天。噂沓背憎。職競由人。

○皇父孔聖とし、都を向に作る。三有事を擇ぶ、亶に侯れ多藏なり。慭ひに一老を遺して、我王を守ら俾めず。車馬有るを擇んで、以て居らしめんとして向に徂く。

㊀ 自ら聖人と爲すをいふ　㊁ 地名　㊂ 三卿を指す　㊃ 多く蓄ふること卽ち富人を指す、卿をあぐるに賢を以てせずして富を以てするをいふ　㊄ 無理につとむること　㊅ 一人の老成の者を指す　㊆ 車馬を有する富者

○黽勉事に從つて、敢へて勞を告げず。罪なく辜なき、讒口囂囂たり。下民の孽、天より降るに匪ず。噂沓して背けば憎み、職として競むるは人に由る。

㊀ 勉强して皇父の役に從ふをいふ　㊁ 讒口の人のかまびすしきをいふ　㊂ あつめかさねること人の面目にへつらひ語るをいふ　㊃ 背面にて之をにくむこと　㊄ 力を專にして之を爲すは、皆この讒口の人によるをいふ

悠悠我里。亦孔之痗。四方有レ羨。我獨居レ憂。民莫レ不レ逸。我獨不二敢休一。天命不レ徹。我不三敢傚二我友自逸一。

浩浩昊天。不レ駿二其德一。降レ喪饑饉。斬二伐四國一。靡二爲疾威一。彼虛弗レ圖。舍三彼有罪一。既伏二其辜一。若二此無

○悠悠たる我里、亦孔だ之れ痗む。四方羨ありて、我獨り憂に居る。民、逸せざること莫く、我獨り敢へて休せず。天命徹しからず、我敢へて我友の自逸に傚はず。

㊀ 憂ふること　㊁ 居る所をいふ　㊂ 疲弊すること　㊃ 餘裕あるをいふ　㊄ 逸樂なり　㊅ 休養なり　㊆ 不公平なり　㊇ 獨り自身のみ逸樂に耽ること

雨無正

是れ饑饉の後に羣臣離散せるとき、其の去らざる者この詩を作りて去る者を責めたる詩也。或は云ふ、亦幽王を刺りて作れる者なりと

浩浩たる昊天、其德を駿にせず。喪を降して饑饉し、四國を斬伐す。昊天疾威にして、虛からず圖らず。彼の有罪の、既に其辜に服せるを舍し、此の無罪の若き、淪胥して以て鋪し。

㊀ 廣大なる貌　㊁ 廣大なる天といふ意　㊂ 思慮なり　㊃ 大也、高也　㊄ はるべき災難をいふ　㊅ 憂

罪。淪胥以鋪。

周宗既滅。靡所止戾。正大夫離居。莫知我勤。三事大夫。莫肯夙夜。邦君諸侯。莫肯朝夕。庶曰式臧。覆出爲惡。

如何昊天。辟言不信。如彼行邁。則靡所臻。凡百君子。各敬爾身。胡不相畏。不畏于天。

戎成不退。飢成不遂。曾我暬御。憯憯日瘁。凡百君子。莫肯用訊。聽言則答。譖言則退。

哀哉不能言。匪舌是出。維躬是瘁。哿矣能言。巧言如流。俾躬處休。

維曰于仕。孔棘且殆。云不可使。得罪于天子。亦云可使。怨及朋友。

の蹙せざるを饑といひ、蔬の蹙せざるを饉といふ　(七)侵伐すること　(八)「昊」の字一説「昊」に作る、疾威は暴虐と同じ　(九)論はしづむと訓じ又ひきゐると訓ず、胥は相也相率ゐて淪没して皆く死亡に至るをいふ

○周宗既に滅び、止戾する所靡し。正大夫離居し、我勤を知ること莫し。三事大夫、肯へて夙夜すること莫し。邦君諸侯、肯へて朝夕すること莫し。庶はくは臧を式つてせよと曰ふ、覆つて出でて惡を爲す。

(一)鎬京卽ち西周なり　(二)戾は定也、戾は定也、安定する所なきをいふ　(三)六官の長を正といふ　(四)饑饉を以て分散すること　(五)三公を指す　(六)改めて辞を爲せといふ

○如何ぞ昊天、辟言信ぜざる。彼の行き邁きて、則ち臻る所靡きが如し。凡百の君子、各〻爾の身を敬み、胡ぞ相畏れざる、天を畏れざるなり。

(一)法度ある言語をいふ　(二)居處を得ざること　(三)當時在廷の官人を指す　(四)其の相畏れざるは眼覓天を畏れざる故なりとぞ

○戎成つて退かず、飢成つて遂げず。曾て我が暬御だに、憯憯として、日に瘁みぬ。凡百の君子、肯へて用つて訊ぐること莫し。言を聽けば則ち答ふれども、譖言すれば則ち退く。

(一)兵燹既に成りて王の惡の退かざるをいふ　(二)饑饉既に成りて王の善の遂げざるをいふ　(三)近習の臣を指す　(四)憂ふる貌　(五)世の有樣を王に告ぐるものなきをいふ　(六)讒言と同じ　(七)退きて外に居り朝廷に出仕せざるをいふ

○哀しい哉言ふこと能はず、舌より是れ出すのみに匪ず、維れ躬是れ瘁みぬ。哿るゝが如く、能く言ふもの、巧言流るゝが如く、躬をして休きに處らしめず。

(一)今の言ふこと能はざるもの卽ち言の忠なる者を指す　(二)今の能く言ふもの卽ち言の忠ならざる者を指す　(三)舌のうまきこと　(四)身をして安樂の地に居らしむること

○維れ于いて仕へんと曰ふ、孔だ棘にして且つ殆し。使ふ可からずと云はば、罪を天子に得、亦使ふ可しと云はば、怨、朋友に及ばん。

(一)緊迫にして危險なるをいふ　(二)所謂諫直の臣也　(三)所謂阿諛の臣也　(四)朋友より怨まるゝをいふ

謂三爾遷二于王都一。曰二予未レ有二室家一。鼠思泣血。無二言不レ疾。昔爾出居。誰從作二爾室一。

○爾に王都に遷れと謂へば、予未だ室家あらずと曰ふ。鼠思して泣血す。言として疾まざるは無し。昔爾の出で居りしとき、誰か從つて爾の室を作れる。

一 雜居する者を指す　二 憂と同じ前に出づ、思ひなやみをいふ　三 血の涙を流すこと　四 一言一句悲痛なちざるはなしと也

新父之什十篇六十四章

小旻之什二之五

小旻

是れ周の大夫が幽王の邪謀に從ふを刺れる詩也

旻天疾威にして、下土に敷けり。謀猶回遹にして、何の日か斯に沮まん。謀の臧きには從はず、臧からざるをば覆つて用ふ。我、謀猶を視るに、亦孔だ之れ卬めり。

旻天疾威。敷二于下土一。謀猶回遹。何日斯沮。謀臧不レ從。不レ臧覆用。我視二謀猶一。亦孔之卬。

滄滄訿訿。亦孔之哀。謀之其臧。則具是違。謀之不レ臧。則具是依。我視二謀猶一。伊于胡底。

我龜既厭。不二我告レ猶。謀夫孔多。是用不レ集。發レ言盈レ庭。誰敢執二其咎一。如下匪二行邁一謀上。是用不レ得二于道一。

一 暴虐の意　二 暴威を地にふるふをいふ　三 罪も罰も惜しからぬ也　四 うれひて苦痛とすること　五 幽王の謀る所邪僻にしていつ止まるべしとも見えざるをいふ

○滄滄訿訿として、亦孔だ之れ哀し。謀の其の臧きには、則ち具に是れ違ひ、謀の臧からざるには、則ち具に是れ依る。我、謀猶を視るに、伊れ于に胡ぞ底らん。

一 相和する義也　二 相そしる義也　三 如何なる虐政に立ち至ちんか知るべからざるをいふ

○我龜既に厭ひ、我に猶を告げず。謀夫孔だ多く、是を用つて集らず。言を發して庭に盈つ、誰か敢へて其咎を執らん。行き邁かずして謀るが如く、是を用つて道に得ず。

一 龜を灼きてトすること、之を謀々して既に厭きたる也　二 周の幽王を指す　三 相談する人の餘りに多きを いふ　四 不決斷に終ること　五 おの〳〵自己の意見を陳述すること　六 庭一杯になること言ふ言の多きをいふ　七 咎を我身に引き受くること　八 外をあるかずして中に坐りて遠く所を相談するが如しとの意　九 道路を游見せざること、いひかふれば道に合はざること也

哀哉爲ㇾ猶。匪二先民是程一。匪二大猶是經一。維邇言是聽。維邇言是爭。如下彼築二室于道一謀上。是用不ㇾ潰二于成一。

國雖ㇾ靡ㇾ止。或聖或否。民雖ㇾ靡ㇾ膴。或哲或謀。或肅或艾。如二彼流泉一。無二淪胥以敗一。

不二敢暴虎一。不二敢馮河一。人知二其一。莫ㇾ知二其他一。戰戰兢兢。如ㇾ臨二深淵一。如ㇾ履二薄冰一。

宛彼鳴鳩。翰飛戾ㇾ天。我心憂傷。念二昔先人一。明發不ㇾ寐。有ㇾ懷二二人一。

人之齊聖。飲ㇾ酒溫克。彼昏不ㇾ知。壹醉日富。各敬爾儀一。天命不ㇾ又。

經

○哀しい哉猶を爲すや、先民是れ程るに匪ず。大猶是れ經とするに匪ず。維れ邇言是れ聽き、維れ邇言是れ爭ふ。彼の室を道に築いて謀るが如く、是を用つて成るに潰けず。

㊀ 先民を以て法と爲さざるをいふ　㊁ 大道を以て常と爲さざるをいふ　㊂ 卑近にして淺薄なる言をいふ　㊃ 室をきづかんとして道行く人にはかるをいふ

○國、止まること靡しと雖も、或は聖或は否。民、膴なること靡しと雖も、或は哲或は謀。或は肅或は艾、彼の泉流の如し。淪胥して以て敗るゝこと無からんや。

㊀ 國猶定まらざるをいふ　㊁ 與ならざるもの亞聖又は賢人を指す　㊂ 人民多からざるをいふ　㊃ 智者の事　㊄ 容貌嚴肅なる者　㊅ 政治の才あるもの　㊆ 彼の泉の流れて返らざるが如きをいふ　㊇ 相共に淪沒して又敗壞すること

○敢へて暴虎せず。敢へて馮河せず。人、其一を知りて、其他を知ること莫し。

戰戰兢兢として、深淵に臨むが如く、薄冰を履むが如し。

㊀ 虎を手打ちにすること　㊁ 河をかち渉りすること　㊂ おそるゝ說　㊃ いましむる說　㊄ 履ちんとを恐るゝ也　㊅ 隔ちんことを恐るゝ也

小宛

是れ大夫時亂にあひ兄弟相戒むる詩也

宛たる彼の鳴鳩、翰飛して天に戻る。我心憂へ傷み、昔の先人を念ふ。明發寐ねず、二人を懷ふことあり。

㊀ 小なる說　㊁ 羽うちて飛ぶこと　㊂ 父母の事　㊃ 通夜と同じよもすがら也　㊄ 父母なり

○人の齊聖なる、酒を飲んで溫克す。彼昏うして知らず。壹に醉うて日に富だし。各〻爾の儀を敬め、天命又せず。

㊀ 慎み深く物事に明るき事　㊁ 溫順にして又深に打ち跨つこと　㊂ 暗愚なるをいふ　㊃ ひたすら酒に耽ひたりて日毎に甚しくなること　㊄ 威儀作法をいふ　㊅ 天の運命は一たび去りて復た來たらざるの意

中原有菽。庶民采之。螟蛉有子。蜾蠃負之。教誨爾子。式穀似之。

題彼脊令。載飛載鳴。我日斯邁。而月斯征。夙興夜寐。無忝爾所生。

交交桑扈。率場啄粟。哀我塡寡。宜岸宜獄。握粟出卜。自何能穀。

○中原(一)菽あり、庶民之を采る。螟蛉(二)子あり、蜾蠃(三)之を負ふ。爾の子を教誨し、穀(四)を式つて之に似せよ。

一 豆なり　二 一般人民をいふ　三 桑の木に居る青き小蟲、あをむしと訓ず　四 土にて巣づくる蜂、すがると訓ず　五 よき事を見習はせよと也

○彼の脊令を題れば、載ち飛び載ち鳴く。我日に斯れ邁き、而(一)月に斯れ征く。夙(二)に寐ね、爾の所生(三)を忝しむること無かれ。

一 川原に居る鳥いしたゝきと訓ず　二 日に月に勉めて各努力して暇を惜すべからざるをいふ　三 父母の事也

○交交たる桑扈(一)、場(二)に率ひ粟を啄(三)む。哀しいかな我塡寡(四)、岸(五)に宜しく獄(六)に宜し。粟を握つて出でトふ、何(七)に自て能く穀からん。

一 小なる鳥、又飛んで往來する鳥　二 青き小鳥の名、いかるがと訓ず　三 もみ也　四 やもめ寡婦をいふ　五 狩と同じく牢屋のこと、罪せられて牢に入れられるがふさはしと也　六 もみを持ち出して卜筮にゆきうらなはしむるをいふ　七 何によりて能く評道にそを保たんかと問ふたゞす也

溫溫恭人。如集于木。惴惴小心。如臨于谷。戰戰兢兢。如履薄冰。

弁彼鸒斯。歸飛提提。民莫不穀。我獨于罹。何辜于天。我罪伊何。心之憂矣。云如之何。

踧踧周道。鞫爲茂草。我心憂傷。惄焉如擣。假寐永嘆。維憂用老。心憂矧。首疾。

○溫溫たる恭人、木に集まるが如し。惴惴たる小心、谷に臨むが如し。戰戰兢兢として、薄冰を履むが如し。

一 おだやかにやはらかなる貌　二 丁寧なる人をいふ　三 木の上にとまりて落ちんことを恐るゝが如きをいふ　四 おそるゝ貌　五 谷にのぞみて陷ちんことを恐るゝが如きをいふ　六 既に前に出づ

小弁

是れ幽王の太子宜臼廢せられしを以て、其傅の作れる詩也

○弁たる彼の鸒、歸り飛んで提提たり。民穀からざること莫く、我獨り于に罹ふ。何ぞ天に辜ある、我罪伊れ何ぞ。心の憂へあり。云に之を如何にせん。

一 樂しき貌又は鳥の飛んで羽をうつ形容　二 鳥の一種、腹白くして群り飛ぶもの也　三 やすらかにしづかなる貌　四 都合宜しきをいふ或は養ふと說く　五 天に對して罪あるをいふ

○踧踧たる周道、鞫まりて茂草と爲る。我心憂へ傷み、惄焉として擣つが如し。假寐して永嘆し、維れ憂へて用つて老ゆ。心の憂へあり。疾しきこと首を疾むが

擣。假寐永嘆。維憂用老。心之憂矣。疢如疾首。

維桑與梓。必恭敬止。靡瞻匪父。靡依匪母。不屬于毛。不離于裏。天之生我。我辰安在。

菀彼柳斯。鳴蜩嘒嘒。有漼者淵。萑葦淠淠。譬彼舟流。不知所屆。心之憂矣。不遑假寐。

如し。

㊀ 平れして行き易き貌 ㊁ 大道なり ㊂ 行人少く路荒りて深山草を生ずるをいふ ㊃ 傷み思ふさま ㊄ むねをうちて痛むが如きをいふ ㊅ うたゝねする事 ㊆ 頭痛のこと

○維れ桑と梓と、必ず恭敬す。瞻るとして父に匪ざるは靡く、依るとして母に匪ざるは靡し。毛に屬ならざらんや、裏に離かざらんや。天の我を生ずる、我辰安にか在る。

㊀ 二樹共に父の植うる所なるをいふ ㊁ 外その毛につゞかずや ㊂ 内その心腹につゞかずや、五と六とを合はせて父母の血脈を受けつゞをいふ ㊃ 我が誕生の時の如何に恩日なりしぞと歎息するをいふ

○菀たる彼の柳、鳴蜩嘒嘒たり。漼たる者淵あり。萑葦淠淠たり。彼の舟の流るゝに譬ふ。屆る所を知らず。心の憂あり、假寐に遑あらず。

㊀ 蟬のなく聲なり ㊁ 深き貌 ㊂ あしの事 ㊃ 深山生ずる貌 ㊄ 行きつく所を知らずの意

鹿斯之奔。維足伎伎。雉之朝雊。尚求其雌。譬彼壞木。疾用無枝。心之憂矣。寧莫之知。

相彼投兔。尚或先之。行有死人。尚或墐之。君子秉心。維其忍之。心之憂矣。涕既隕之。

君子信讒。如或醻之。君子不惠。不舒究之。伐木掎矣。析薪杝矣。舍彼有罪。予之

○鹿の奔る、維れ足伎伎たり。雉の朝に雊く、尚ほ其雌を求む。彼の壞木に譬ふ。疾んで用つて枝無し。心の憂あり、寧ぞ之を知ること莫き。

㊀ ゆるやかなる貌 ㊁ 朽ちたる木なり ㊂ 枯れて枝葉のなきをいふ

○彼の投兔を相るに、尚ほ或は之に先だつ。行に死人あれば、尚ほ或は之を墐む。君子心を秉ること、維れ其れ之を忍ぶ。心の憂あり、涕既に之に隕つ。

㊀ 追はれて死ぬるうさぎをいふ ㊁ 追ひ來る人に先だちて之をにがしやるをいふ ㊂ 心をとり守ること ㊃ つれなくたゝ忍ぶこと

○君子讒を信ず、之を醻ゆること或るが如し。君子惠ならず、舒に之を究めず。木を伐るに掎し、薪を析くに杝す。彼の有罪を舍いて、予に之れ佗ふ。

㊀ 主人のくみたる杯を、客のくみかへすこと ㊁ 仁惠の心なく、つれなくあつかふをいふ ㊂ ゆる〻〻と之をしらべざるをいふ ㊃ すけぎをよせかくること或は繩をつけてそろ〻とたふすこと ㊄ 木の目のまゝに割るをいふ ㊅ つみある人即ち褒姒を指す ㊆ 却つて罪を我に加ふること

佗矣。莫高匪山。莫浚匪泉。君子無易由言。耳屬于垣。無逝我梁。無發我笱。我躬不閱。遑恤我後。

悠悠昊天。曰父母且。無罪無辜。亂如此憮。昊天已威。予慎無罪。昊天泰憮。予慎無辜。亂之初生。僭始既涵。亂之又生。君子信讒。君子如怒。亂庶遄沮。君子如祉。亂庶遄已。君子屢盟。亂是用長。君子信盜。亂是用暴。盜言孔甘。亂是用餤。匪其止共。維王之邛。

奕奕寢廟。君子作之。秩秩大猷。聖人莫之。他人有心。予忖度之。躍躍毚兎。遇犬獲之。

○高しとして山に匪ざると莫く、浚しとして泉に匪ざるは莫し。君子は易く言を由ふること莫かれ。耳は垣に屬く。我梁に逝くこと無かれ。我笱を發くこと無かれ。我躬すら閱られず、我後を恤ふるに遑あらんや。

一 輕々に物を言ふこと　二 人あり耳をかきにつけてきゝとること　三 東宮を以て梁に比す　四 國家の事業を以て笱に比す　五 我が一身さへ世に容れられざるをいふ　六 子孫の事を心配するをいふ

巧言

是れ大夫讒に傷らるゝを怨みて作れる詩也

○悠悠たる昊天、曰く父母と。罪無く辜無し、亂此の如く憮なり。昊天已だ威あり、予慎に罪なし、昊天泰だ憮なり。予慎に辜無し。

一 遠く大なる貌、又思ふ貌とあり　二 此の如き大禍にあふをいふ

○亂の初めて生ずる、僭始めて既く涵る。亂の又生ずる、君子讒を信ず。君子如し怒らば、亂庶はくは遄に沮まん。君子如し祉せば、亂庶はくは遄に已まん。

一 讒言のとく始めに入るをいふ　二 喜ぶこと

○君子屢盟ふ、亂是を用つて長ず。君子盜を信ず、亂是を用つて暴なり。盜言孔だ甘し、亂是を用つて餤む。其の共を止むるのみに匪ず、維れ王の邛なり。

一 疑のいよ〳〵多きをいふ　二 卽ち讒言を指す　三 勢の進むをいふ　四 其職事に供することを止めざるのみならずと也　五 王をして大にうれひやましむる也

○奕奕たる寢廟は、君子之を作る。秩秩たる大猷は、聖人之を莫む。他人心あり予之を忖度す。躍躍たる毚兎は、犬に遇うて之に獲らる。

一 大なる貌　二 館に廟あり後に寢あり　三 次第ある形容　四 大道なり　五 はかりて定むるをいふ　六 捷疾すること　七 せはしく跳びはねる形容　八 獲は獲也とざかしきうさぎをいふ

往染柔木。君子樹之。往來行言。心焉數之。蛇蛇碩言。出自口矣。巧言如簧。顏之厚矣。

彼何人斯。居河之麋。無拳無勇。職爲亂階。既微且尰。爾勇伊何。爲猶將多。爾居徒幾何。

彼何人斯。其心孔艱。胡逝我梁。不入我門。伊誰云從。維暴之云。

二人從行。誰爲此禍。胡逝我梁。不入唁我。始者不如今。云不我可。

彼何人斯。胡逝我陳。我聞其聲。不見其身。不愧于人。不畏于天。

彼何人斯。其爲飄風。胡不自北。胡不自南。胡逝我梁。祇攪我心。

○往染たる柔木は、君子之を樹う。往来の行言は、心に之を数ふ。蛇蛇たる碩言口より出づ。巧言簧の如く、顏之れ厚し。

一 やはからなる貌　二 道行く人の往来にいふ言をいふ　三 心中に其讒言を一々區別すること　四 やすちかにもちつきある形容　五 大言なり卽ち讒言をいふ　六 言辭の巧みなること笙を吹きならすが如く能く人の耳を悅ばしむるをいふ　七 面皮の厚き恥知らぬ人なりの意

○彼れ何人ぞ、河の麋に居る。拳なく勇なく、職として亂階を爲す。既に微に且つ尰に、爾の勇伊れ何ぞ。猶を爲すこと將に多し、爾の居徒幾何ぞ。

一 讒人を指す　二 水と草との交(あはひ)をいふ　三 ちからをいふ　四 主となりて亂の手始をすること　五 足の腫物をいふ　六 足のはれふくるゝ疾也　七 徒寓といふが如し

何人斯

是れ暴公、王の卿士と爲り蘇公を譖したるを以て蘇公之を厲して以て絕てる詩也

彼れ何人ぞ、其心孔だ艱めり。胡ぞ我梁に逝きて、我門に入らざる。伊れ誰にか云に從ふ、維れ暴と之れ云ふ。

一 心さがしくして平ならざる形容　二 暴公の事

○二人從ひ行く、誰か此禍を爲す。胡ぞ我梁に逝いて、入つて我を唁はざる。始めは今の如くならず、我を可ならずと云ふや。

一 暴公と其徒とをいふ　二 生者を弔すること

○彼れ何人ぞ、胡ぞ我陳に逝く。我、其聲を聞きて、其身を見ず。人に愧ぢざらんや。天を畏れざらんや。

一 門の内階までの道をいふ

○彼れ何人ぞ、其れ飄風たり。胡ぞ北よりせざる。胡ぞ南よりせざる。胡ぞ我梁に逝きて、祇に我心を攪る。

一 暴風の如き去來の疾なるをいふ

爾之安行。亦不レ遑レ舍。爾之亟行。遑。脂二爾車一。壹者之來。云何其盱。

爾還而入。我心易也。還而不レ入。否難レ知也。壹者之來。俾二我祗一也。

伯氏吹レ壎。仲氏吹レ篪。及レ爾如レ貫。諒不二我知一。出二此三物一。以詛爾斯。

爲レ鬼爲レ蜮。則不レ可レ得。有二覯面目一。視レ人罔レ極。作二此好歌一。以極二反側一。

○爾の安行する、亦舍するに遑あらず。爾の亟行する、爾の車に脂さすに遑あらんや。壹者之れ來れ、云何ぞ其れ盱ふしむる。

㊀ 平時徐行する場合をいふ ㊁ 休息すること ㊂ 急ぎ行くをいふ ㊃ 我をして汝を憂むの切ならしむるをいふ、一說に其れ盱ふんと讀み汝に於いて何ぞ心をなやまさんの意

○爾還りて入らば、我心易ばん。還りて入らずんば、否や知り難からん。壹者之れ來れ、我をして祗からしめよ。

㊀ 我を詞したりや否やをいふ ㊁ 安心せしむるをいふ

○伯氏壎を吹き、仲氏篪を吹く。爾と貫けるが如し。諒に我を知らざらんや。此三物を出して、以て爾に詛はん。

㊀ 兄なり ㊁ 土製の笛なり ㊂ 弟なり ㊃ 竹製の笛なり ㊄ 終始同一なるをいふ ㊅ 牛羊家の三牲なり ㊆ 之の牲血をすゝりて我が二心なきを誓はんの意

○鬼たり蜮たらば、則ち得べからず。覯たる面目あり、人を視ること極まり罔し。此好歌を作りて、以て反側を極む。

㊀ 鬼神の鬼なり ㊁ 水中の小蟲一名短狐といふ。繁に似て口に角あり弩の如し、沙をふくみて人を射るをいふ、共に人目にて容易に見ゝを得ざるもの也 ㊂ 見ることを得ざるをいふ ㊃ 面と向ふべき目鼻あるをいふ ㊄ 人人相親ゝに極まりつくゝることなきをいふ ㊅ よしみを結ばん爲の歌をいふ ㊆ 爾の反覆常なき心をきはめて其實を得たしと也

巷伯

是れ讒人が讒を信じて無道なゝを刺れて詩也

萋たり斐たり。是の貝錦を成す。彼の人を譖する者、亦已に大甚し。

㊀ 萋も斐も小しく文ゝある形容 ㊁ 是の貝の如く五采の錦を織り成すと也 ㊂ 讒言すること

○哆たり侈たり、是の南箕を成す。彼の人を譖する者、誰を適として與に謀る。

㊀ 少し張りひろがる貌一說に大なる貌とあり ㊁ 同上 ㊂ 是の名南方にあるを以て南箕といふ ㊃ 主人公なり

○緝緝翩翩として、謀りて人を譖せんと欲す。爾の言を愼め、爾を信あらずと謂し。

斐兮斐兮。成二是貝錦一。彼譖レ人者。亦已大甚。

哆兮侈兮。成二是南箕一。彼譖レ人者。誰適與謀。

緝緝翩翩。謀

欲レ譖レ人。慎二爾言一也。謂二爾不レ信。

捷捷幡幡。謀欲二譖言一。豈不二爾受一。既其女遷。

驕人好好。勞人草草。蒼天蒼天。視二彼驕人一。矜二此勞人一。

彼譖レ人者。誰適與謀。取二彼譖人一。投二畀豺虎一。豺虎不レ食。投二畀有北一。有北不レ受。投二畀有昊一。

楊園之道。猗二于畝丘一。寺人孟子。作二爲此詩一。凡百君子。敬而聽レ之。

習習谷風。維風及雨。將恐將懼。維予與レ女。將安將樂。女轉棄レ予。

習習谷風。維風及頹。將恐將懼。寘二予于

はん。

㊀ 物いふ聲なり或はすぢめだつやうにいふ事 ㊁ 往來の說

○捷捷幡幡として、謀りて譖言せんと欲す。豈に爾に受けざらんや、既に其れ女に遷らん。

㊀ 口輕くはやき說 ㊁ 反覆常なき樣をいふ ㊂ 汝の讒言を受けざらんやと也 ㊃ 汝の身にも亦やがて讒言うつり來らんと也

○驕人は好好、勞人は草草。蒼天蒼天、彼の驕人を視て、此の勞人を矜め。

㊀ おごりたかぶる人卽ち讒者を指す ㊁ よろこび樂むこと ㊂ 心を勞する人、卽ち讒せらるゝ人を指す ㊃ 憂ふる說

○彼の人を譖する者、誰を適として與に謀る。彼の譖人を取りて、豺虎に投げ畀へん。豺虎食はずんば有北に投げ畀へん。有北受けずんば、有昊に投げ畀へん。

㊀ 山犬ととらと也 ㊁ 北のえびすを指す ㊂ 天なり、有の字は語脈なし

○楊園の道、畝丘に猗ふ。寺人孟子、此詩を作爲す。凡百の君子、敬んで之を聽け。

㊀ ひくき地なり、或はいふ國の名なりと ㊁ 高き地なり、或はいふ丘の名なりと ㊂ 低地より高地へ道が次第に上ること、讒言の漸を以て入るに喩ふ ㊃ 近習の臣、所謂宦臣也 ㊄ 寺人の字也

谷風

是れ朋友相戒むの詩也

習習たる谷風、維れ風及び雨。將に恐れんとし將に懼れんとす。維れ予と女と。將に安んぜんとし將に樂まんとす。女轉つて予を棄つ。

㊀ やはらぎとゝのへる說 ㊁ 東風なり

○習習たる谷風。維れ風及び頹。將に恐れんとし將に懼れんとす。予を懷に寘く。將に安ぜんとし、將に樂まんとす。予を棄てて遺るゝが如し。

恤。將安將樂。棄予如遺。習習谷風。維山崔嵬。無草不死。無木不萎。忘我大德。思我小怨。

蓼蓼者莪。匪莪伊蒿。哀哀父母。生我劬勞。蓼蓼者莪。匪莪伊蔚。哀哀父母。生我勞瘁。餅之罄矣。維罍之恥。鮮民之生。不如死之久矣。無父何怙。無母何恃。出則銜恤。入則靡至。父兮生我。母兮鞠我。拊我畜我。長我育我。顧我復我。出入腹我。欲報之德。昊天罔極。南山烈烈。飄風發發。民莫不穀。我獨何害。

(一) 旋風(つじかぜ)の皃 (二) 之を親むこと (三) 之を顧みざること

○習習たる谷風、維れ山の崔嵬。草として死せざる無く、木として萎まざる無し。我大德を忘れ、我小怨を思ふ。

(一) 山のいただきをいふ

蓼莪

是れ民人勞苦し、孝子養を終ふることを得ざるを怨みて作れる詩也

○蓼蓼たる者は莪、我に匪ず維れ蒿。哀哀たる父母、我を生んで劬勞す。

(一) 長大なる貌 (二) 和名きつねあざみと訓ず (三) 和名しろよもぎと訓ず (四) かぼそいさうなる樣をいふ

○蓼蓼たる者は莪、我に匪ず伊れ蔚。哀哀たる父母、我を生んで勞瘁す。

(一) 和は、げぐさと訓ず (二) つかれて疲みつくをいふ

○餅の罄くるは、維れ罍の恥なり。鮮民の生ける、死に如かざること之れ久し。

(一) 酒を容るゝもの也 (二) 無くなること (三) 是も酒を入るゝもの也、餅よりも大なり之れ要するに小瓶のから になるは大瓶の恥といふに同じ、以て父子の間に比する也 (四) 餅はすくなしと訓ず、貧しくひとり身なるをいふ (五) 憂を抱くこと (六) 歸する所なきをいふ

父無くんば何をか怙まん、母なくんば何をか恃まん。出でては則ち恤を銜み、入りては則ち至ること靡し。

(一) 父母の恩の大なること、天のきはまりなきが如きをいふ

○父や我を生み、母や我を鞠ふ。我を拊で我を畜ひ、我を長となし我を育み、我を顧み我を復し、出入我を腹にす。之が德を報いんと欲すれども、昊天極まり罔し。

○南山烈烈たり、飄風發發たり。民、穀からざること莫し、我獨り何ぞ害ある。

(一) 高く大なる貌、又一說に峯氣の烈しき貌と爲す (二) 疾風也 (三) 風の勢のすさまじくはやきをいふ (四) 都合の宜しからざること (五) 不善なること

南山律律。飄風弗弗。民莫不穀。我獨不卒。

有餲簋飧。有捄棘匕。周道如砥。其直如矢。君子所履。小人所視。睠言顧之。潸焉出涕。

小東大東。杼柚其空。糾糾葛屨。可以履霜。佻佻公子。行彼周行。既往既來。使我心疚。

有冽氿泉。無浸穫薪。契契寤歎。哀我憚人。薪是穫薪。尚可載也。哀我憚人。亦可息也。

東人之子。職勞不來。西人之子。粲粲衣服。舟人之子。熊羆是裘。私人之子。百僚是試。或以其酒。不

經

○南山律律たり、飄風弗弗たり。民、穀からざること莫し、我獨り卒へず。

一 烈烈と同じ　二 發發と同じ　三 父母を養ひ終へざること

大東

是れ東國役に困み財を傷るを以て、課の大夫此を作りて以て病を告ぐる詩也

○餲たる簋飧あり、捄たる棘匕あり。周道砥の如く、其直きこと矢の如し。君子の履む所。小人の視る所。睠みて言に之を顧み、潸焉として涕を出す。

一 一杯盛り上げたる形容　二 食器の上に盛りたる黍粱を云ふ、飧は飯食の事也　三 長く曲れるさゞの事、棘の木にて作りたるもの也　四 といしの事其平なるをいふ、古注には貢賦の平均をいふとあり　五 古注には貢賦の公平をいふとあり　六 之を手本としてふみ行ふこと　七 之を見て行ふこと　八 さめざめと涕を流すさまをいふ、是れ東方の賦役これによりて西の方周におくりてのころものなきを以て也

○小東大東、杼柚其れ空く。糾糾たる葛屨、以て霜を履むべし。佻佻たる公子、彼の周行を行く。既に往き既に來りて、我心をして疚ましむ。

一 東方の大小の國をいふ、古註には賦役の多少となく皆東國に課せらるゝ、義と爲す　二 緯(ぬき)を織ず經(ひ)を杼といひ經(たて)をまくをまきを軸といふ、布織の貢物周におくりてのころものなしと也　三 葛布にて織ひたるくつをいふ　四 輕薄なる說　五 時候の責任を指す　六 大路也

○冽たる氿泉あり、穫薪を浸すこと無かれ。契契として寤歎し、我憚人を哀む。是の穫薪を薪とする、尚はくは載す可き也。我憚人を哀む、亦息ふ可き也。

一 ひやゝかなる說　二 よこにわき出るいづみをいふ　三 かりとりたる薪のこと　四 うれひ苦しむ說　五 いねてさむれば打ちなげくをいふ　六 苦勞人を指す　七 載せて以て歸ること　八 いきやすむること

○東人の子、職ら勞すれども來せず、西人の子、粲粲たる衣服あり。舟人の子、熊羆是れ裘にす。私人の子、百僚是れ試ふ。

一 諸侯の人を指す　二 經營すること　三 京師の人を指す　四 非常に立派なる樣なり　五 舟楫の人を指す　六 其の富めるを言ふ　七 私家の家來なり　八 百官をいふ

○或は其酒を以てして、其漿を以てせず。鞙鞙たる佩璲、其長きを以てせず。

以二其漿一。輯輯佩璲。不レ以二其長一。維天有レ漢。監亦有レ光。跂彼織女。終日七襄。

雖二則七襄一。不レ成二報章一。睆彼牽牛。不二以服レ箱。東有二啓明一。西有二長庚一。有二捄天畢一。載施二之行一。

維南有レ箕。不レ可二以簸揚一。維北有レ斗。不レ可二以挹二酒漿一。維南有レ箕。載翕二其舌一。維北有レ斗。西レ柄之揭。

維れ天に漢あり、監れば亦光あり。跂たる彼の織女、終日七襄す。

一 西人は之を疑ともせざるをいふ、漿は酒のうすき者也 二 長長しき貌 三 瓠瓜の事 四 西人は之を長しとせざるをいふ 五 天の河をいふ 六 隅ある貌、織女星は三星三隅を成すを以て也 七 七たび星のやどりをうつすこと、蓋し天衣を織るに勞するをいふ也

○則ち七襄すと雖も、報章を成さず。睆たる彼の牽牛、以て箱を服せず。東に啓明あり、西に長庚あり。捄たる天畢あり、載ち之を行に施す。

一 我邦に報ゆるがけのあやぎぬを織り成さざること 二 星のかがやく樣をいふ 三 星の名、ひこぼしと訓ず、織女星と合せて七夕の二星と爲す 四 車の物を載する所をいふ、畢は網也、車を牛か馬かにかくること也、織女とは名のみ其實は織らざる也、牽牛とは名のみ其實は牽かざる也 五 金星の事也、晨に東にあらはるゝときはあかぼし又は夜明の明星と呼ぶ、又は宵の明星と呼び夕に西にあらはるゝ時はゆふづゝ又は宵の明星と呼ぶ、太陽の代理になりさうにしてならざるをいふ 六 二十八宿の一、あぢくぼしといふ星はうさぎをゐはひとろ訓の事也、星の形之に似たるを以て名づく、網の名ありて其用をなさざるをいふ 七 唯之を天上の行列に施すのみの意

○維れ南に箕あり、以て簸揚す可からず。維れ北に斗あり、以て酒漿を挹む可からず。維れ南に箕あり、載ち其舌を翕く。維れ北に斗あり、柄を西にして之れ揭ぐ。

一 箕に口あり、之を物にすればぬかを簸(ひ)るに用ふべきもの也、されど唯星の名のみに過ぎず 二 斗に柄あり之を物にすればさけを酌むに用ふべきもの也、されど星にすれば亦唯名のみに過ぎず 三 其舌をひきて、飲み食はんとするが如きをいふ 四 反つて西人をたすけて我を苦しむるが如きをいふ

四月

是れ亂に遭うて自ら傷む詩也

四月維れ夏、六月徂く暑あり。先祖は人に匪ずや、胡寧ぞ予に忍べる。

一 暑氣の去ることをいふ 二 不人情なるをいふ

○秋日淒淒として、百卉具に腓む。亂離して瘼む、奚に其れ適歸せん。

一 風の物すごきをいふ 二 百草なり 三 世の亂にあうて人民の苦勞するをいふ 四 何處をあてにたよりて行かんやと也

○冬日烈烈たり、飄風發發たり。民、穀からざること莫し。我獨り何ぞ害ある。

不レ穀。我獨何害。

山有二嘉卉一。侯栗侯梅。廢爲二殘賊一。莫レ知二其尤一。

相二彼泉水一。載清載濁。我日構レ禍。曷云能穀。

滔滔江漢。南國之紀。盡瘁以仕。寧莫二我有一。

匪レ鶉匪レ鳶。翰飛戾レ天。匪レ鱣匪レ鮪。潛逃二于淵一。

㊀ 塞さのはげしきをいふ ㊁ すなどく吹くをいふ

○山に嘉卉あり、侯れ栗侯れ梅。廢りて殘賊と爲る、其尤を知るもの莫し。

㊀ よき木也、卉は草木に通用す ㊁ 人をそこなふこと ㊂ 誰の過なるかを知らざるをいふ

○彼の泉水を相れば、載ち清み載ち濁る。我日に禍に構ふ、曷ぞ云に能く穀からん。

㊀ 且つ清み且つ濁る

○滔滔たる江漢、南國の紀なり。盡瘁して以て仕ふ、寧ぞ我を有すること莫き。

㊀ 水の大なる貌 ㊁ 楊子江と漢江とをいふ ㊂ 南國に於ける川といふ川の總取締なり ㊃ 有ちん限りの努力をいふ ㊄ 王は何故我を所有と爲さざるかとなり

○鶉に匪ず鳶に匪ず、翰飛して天に戻る。鱣に匪ず鮪に匪ず、潛んで淵に逃る。

㊀ 鳥の名、わし也 ㊁ 鳥名、とび也、共に食を貪る鳥也 ㊂ 羽うちて高く飛ぶこと ㊃ 魚名、ふか也 ㊄ 魚名、しび也、古來注家和別を附すれども草木鳥獸の名彼我天に異なるものあるを知らざるべからず、注意の爲に特に此に記す

山有二蕨薇一。隰有二杞棣一。君子作レ歌。維以告レ哀。

陟二彼北山一。言采二其杞一。偕偕士子。朝夕從レ事。王事靡レ盬。憂二我父母一。

溥天之下。莫レ

○山に蕨薇あり、隰に杞棣あり。君子歌を作つて、維れ以て哀を告ぐ。

㊀ わらびとぜんまいとなり ㊁ 枸杞(くこ)と赤棣となり、赤棣は不明是等の植物各其所を得るをいふ

小旻之什十篇六十五章

北山之什二之六

北山

是れ大夫役に行きて作れる詩也

彼の北山に陟つて、言に其杞を采る。偕偕たる士子、朝夕事に從ふ。王事盬きことなし、我父母を憂へしむ。

㊀ 强壯なる貌 ㊁ 詩人自ら謂ふ ㊂ 王事疎略にすべからざるをいふ

○溥天の下、王土に非ざるは莫し。率土の濱、王臣に非ざるは莫し。大夫均しか

非二王土一。率土之濱。莫レ非二王臣一。大夫不レ均。我從レ事獨賢。

四牡彭彭。王事傍傍。嘉二我未レ老。鮮二我方將一。旅力方剛。經二營四方一。

或燕燕居息。或盡瘁事レ國。或息偃在レ牀。或不レ已二于行一。

或不レ知二叫號一。

らず。我事に從ひて獨り賢とす。

㊀ 廣く大なる天のしたといふこと、猶一天といふが如し ㊁ 海に沿ひたる陸地のきしといふこと、猶四海といふが如し ㊂ 大夫といつて其實は王を指す、王の人を使ふことの均一ならざるを云ふ ㊃ 勤り賢者として取扱はれ苦勞するをいふ

○四牡彭彭たり、王事傍傍たり。我が未だ老いざるを嘉し、我が方に將なるを鮮とし、旅力方に剛なりとし、四方を經營せしむ。

㊀ やすむことを得ざる義也 ㊁ 已むことを得ざる義なり ㊂ 血氣の壯なるをいふ ㊃ 鮮は少也、少くして得難しとす ㊄ 膂と同じ、うでの力也 ㊅ はかりいとなみて治むるをいふ

○或は燕燕として居息し、或は盡瘁して國に事へ、或は息偃して牀に在り、或は行に已まず。

㊀ 安息するさま ㊁ 十分努力すること ㊂ 休息して牀の上にあふむき臥すこと ㊃ 道路を奔走して暫くも止まざること

○或は叫號を知らず、或は慘慘として劬勞し、或は栖遲として偃仰し、或は王事に鞅掌す。

㊀ 難義のあるを人を呼びて叫ぶものあるを知らざること ㊁ いたましく憂ふるさま ㊂ 安閑とやすみをうさま ㊃ あふむけに臥すこと ㊄ いそがはしく容儀をつくろふ暇なきさまをいふ

○或は湛樂して酒を飲み、或は慘慘として咎を畏る。或は出入風議し、或は事として爲さざるは靡し。

㊀ たのしむこと ㊁ いたましく憂ふるさま ㊂ 罪過なり ㊃ 得手勝手の議論をすること ㊄ 苦勞ばかりすること

無將大車

是れ役に行きて勞苦せし者の作也

大車を將くること無かれ、祇に自ら塵す。百憂を思ふこと無かれ、祇に自ら疧む。

㊀ 牛にかくる荷車なり ㊁ たすけて進むること ㊂ 苦痛すること

或慘慘劬勞。或栖遲偃仰。或王事鞅掌。

或湛樂飲レ酒。或慘慘畏レ咎。或出入風議。或靡二事不レ爲。

無レ將二大車一。祇自塵兮。無レ思二百憂一。祇自疧兮。

無レ將二大車一。維塵冥冥。無レ思二百憂一。不レ出二于頻一。

無レ將二大車一。維塵雝兮。無レ思二百憂一。祇自重兮。

○大車を將くること無かれ、維れ塵冥冥たり。百憂を思ふこと無かれ、頻に出でず。

㊀ほこりの深暗くたつこと　㊁耿と同じ小明なり、てりもせずきえもせず只とろ〳〵中にあるをいふ

○大車を將くること無かれ、維れ塵雝ふ。百憂を思ふこと無かれ、祇に自ら重はす。

㊀ほこりをかちだにかぶること　㊁心にまとうてとげざること

小明

是れ大夫亂世に仕へたるを怨いて作れる詩也

明明上天。照二臨下土一。我征徂レ西。至二于艽野一。二月初吉。載離二寒暑一。心之憂矣。其毒

明明たる上天、下土を照臨す。我征いて西に徂き、艽野に至る。二月初吉、載ち寒暑を離る。心の憂あり、其毒大だ苦し。彼の共人を念ひ、涕零ちて雨の如し。豈に歸るを懷はざらんや、此罪罟を畏る。

大苦。念二彼共人一。涕零如レ雨。豈不レ懷レ歸。畏二此罪罟一。

昔我往矣。日月方除。曷云其還。歲聿云莫。念我獨兮。我事孔庶。心之憂矣。憚我不レ暇。念二彼共人一。睠睠懷顧。豈不レ懷レ歸。畏二此譴怒一。

昔我往矣。日月方奧。曷云其還。政事愈蹙。歲聿云莫。采レ蕭穫レ菽。心之憂矣。自詒二

㊀地名なり　㊁朔日のこと　㊂冬と夏とを越すこと　㊃苦痛なり　㊄同僚の引き込み居るもの　㊅罪人を捕ふるあみ即ち刑罰をいふ

○昔我が往けるとき、日月方に除けり。曷か云に其れ還らん、歲聿に云に莫れぬ。念ふ我獨りにして、我事孔だ庶し。心の憂ある、憚みて我暇あらず。彼の共人を念ひ、睠睠として懷ひ顧ふ。豈に歸るを懷はざらんや、此の譴怒を畏る。

㊀昔年去りて新年の春となりしをいふ　㊁僚友のこと　㊂ねんごろなる義　㊃罪を蒙りて咎めらるゝをいふ

○昔我が往けるとき、日月方に奧なりき。曷ぞ云に其れ還らん。政事愈〻蹙れり。歲聿に云に莫れぬ、蕭を采り菽を穫る。心の憂あり、自ら伊の戚を詒す。彼の共人を念ひ、興きて言に出で宿る。豈に歸を懷はざらんや、此反覆を畏る。

伊威。念二彼共人一。興言出宿。豈不レ懷レ歸。畏二此反覆一。

嗟爾君子。無レ恆二安處一。靖共二爾位一。正直是與。神之聽レ之。式レ穀以レ女。

嗟爾君子。無レ恆二安息一。靖共二爾位一。好二是正直一。神之聽レ之。爾二介景福一。

鼓レ鐘將將。淮水湯湯。憂心且傷。淑人君子。懷允不レ忘。

鼓レ鐘喈喈。淮水湝湝。憂心且悲。淑人君子。其德不レ回。

鼓レ鐘伐レ鼛。淮有二三洲一。憂心且妯。淑人君子。其德不レ猶。

鼓レ鑑欽欽。鼓レ瑟鼓レ琴。笙磬同レ音。以雅以南。以籥不レ僭。

㊀ 想と同じ、煩也 ㊁ 政事がいよ〳〵急なるを以てなりの意 ㊂ 夜安ちかに眠むるを得ずして外に出でて宿ること ㊃ 反覆顚倒してあてにならざるをいふ

○嗟爾君子、安處を恆とする無かれ。靖に爾の位を共み、正直是れ與せば、神の之を聽く、穀を式つて女に以へん。

㊀ 其僚友を指す ㊁ 現在の地位をじっとつゝしみて守るをいふ ㊂ 祿也、福と同じ

○嗟爾君子、安息を恆とすること無かれ。靖に爾の位を共み、是の正直を好みせば、神の之を聽く、爾が景福を介にせん。

㊀ 大福なり ㊁ たすくと訓ずるも亦可なり

鼓鐘

是れ幽王が流連の樂を爲して反るを忘れたるを刺れる詩也

鐘を鼓すること將將たり、淮水湯湯たり。憂心且つ傷む。淑人君子、懷う

て允に忘れず。

㊀ 鐘の聲の盛なる貌 ㊁ 川の名 ㊂ 水のわきあがる貌 ㊃ 古の賢人をいふ

○鐘を鼓すること喈喈たり、淮水湝湝たり。憂心且つ悲む。淑人君子、其德回ならず。

㊀ 將將と同じ ㊁ 喈喈と同じ ㊂ 其心得の邪曲なちざるをいふ

○鐘を鼓し鼛を伐つ、淮に三洲あり。憂心且つ妯く。淑人君子、其德猶しからず。

㊀ 大鼓なり ㊁ 三つの浮洲あり ㊂ 動なり動搖して安まちざるをいふ、一說に病むと訓ず ㊃ 今人の常めるがごとくならざるをいふ

○鐘を鼓すること欽欽として、瑟を鼓し琴を鼓す。笙磬音を同じうす。以て雅し以て南し、以て籥して僭れず。

㊀ 聲音の人心を樂しむるをいふ ㊁ 笠は吹くもの、磬は叩くもの、共に樂器也 ㊂ 調子の善く合ふこと ㊃

楚楚者茨。言抽二其棘一自レ昔何爲。我蓺二黍稷一。我黍與與。我稷翼翼。我倉既盈。我庾維億。以爲二酒食一。以饗以祀。以妥以侑。以介二景福一。

濟濟蹌蹌。絜二爾牛羊一。以往烝嘗。或剝或亨。或肆或將。祝祭二于祊一。祀事孔明。先祖是皇。神保是格。報以二介福一。萬壽無レ疆。

執レ爨踖踖。爲レ俎孔碩。或燔或炙。君婦莫莫。爲レ豆孔庶。爲レ賓爲レ客。獻酬交錯。禮儀卒度。笑語卒獲。神保是格。報以二介福一。萬壽攸レ酢。

我孔熯矣。式禮莫レ愆。工祝致告。徂賚二孝孫一。苾芬孝祀。

二雅(大雅小雅)と二南(召南周南)とをいふ　㊀ こまぶえ、羽と籥とをとりて舞ふこと

楚茨

是れ公卿の田祿あるもの農事を力めて以て宗廟を奉ずることを述べたる詩也。或は云ふ、是れ幽王を刺れる詩也と。

楚楚たる者は茨、言に其棘を抽く。昔より何爲れぞ、我に黍稷を藝ゑしむる。我黍與與たり、我稷翼翼たり。我倉既に盈ち、我庾維れ億。以て酒食を爲り、以て饗し以て祀り、以て妥んじ以て侑め、以て景福を介にす。

○濟濟蹌蹌として、爾が牛羊を絜くし、以て往いて烝嘗す。或は剝し或は亨し、或は肆ね或は將め、祝して祊に祭る。祀事孔だ明に、先祖是れ皇なり。神保是れ饗け、孝孫慶あり、報ゆるに介福を以てし、萬壽疆無し。

㊀ しげりこみたる貌　㊁ 蓺藝なりはまびしと訓ず　㊂ とげの事　㊃ 盛にしげるをいふ　㊄ 同上　㊅ 外積(そとづみ)の事　㊆ 十萬なり　㊇ 神に獻ずる也　㊈ 尸を安坐せしむること　㊉ 司祝之を勸むるをいふ

㊀ 儀容あるをいふ　㊁ 同上、或は前書を以て容貌のとゝのふ義とし、後書を以て行歩のとゝのふ義とす　㊂ 烝は冬の祭嘗は秋の祭　㊃ 牛羊豕の牲を割きて骨體を分つを剝といひ、之を鼎ににるを亨といふ　㊄ 之を俎にのせて神前につらぬるを肆といひ、別に肴をとゝのへたるものをすゝめさゝぐるを將といふ　㊅ 祠宮なり　㊆ 廟門の内なり　㊇ 備はること　㊈ 尸(かたしろ)の嘉饌にして巫を以て神を降すの稱也　㊉ 祭を主る人を指す

○爨を執ることと踖踖たり、俎を爲ることと孔だ碩なり。或は燔き或は炙り、君婦莫莫として豆を爲ることと孔だ庶し。賓と爲り客と爲り、獻酬交錯して、禮儀卒く度あり。笑語卒く獲、神保是れ格る。報ゆるに介福を以てす、萬壽攸ゆる。

㊀ 竈也、煮たきするを云ふ　㊁ 敬めるさま　㊂ 牲體を載する器なり　㊃ 主婦なり　㊄ いさぎよくしづかに敬みの至れるをいふ　㊅ 木製の祭器の上に盛ること　㊆ さしたりかへしたりして杯のやりとりすること　㊇ 宜しき所を得るをいふ　㊈ 其羹ずる所として萬福の福を下すをいふ

○我孔だ熯しぬ、式禮愆つことなし。工祝告を致し、徂いて孝孫に賚ふ。苾芬たる孝祀、神、飲食を嗜む。爾に百福を卜へ、幾の如く式の如し。既に齊

神嗜飲食。卜爾百福。如幾如式。既齊既稷。既匡既敕。永錫爾極。時萬時億。

禮儀既備。鐘鼓既戒。孝孫徂位。工祝致告。神具醉止。皇尸載起。鼓鐘送尸。神保聿歸。諸宰君婦。廢徹不遲。諸父兄弟。備言燕私。

樂具入奏。以綏後祿。爾殽既將。莫怨具慶。既醉既飽。小大稽首。神嗜飲食。卜爾萬壽。無疆。子子孫孫。勿替引之。

へ既に稷く、既に匡しく既に敕む。永く爾に極を錫ふ、時れ萬時れ億。

㊀ 力を盡すをいふ ㊁ 作法儀儀をいふ ㊂ 祠官なり ㊃ 神託を受くること ㊄ かんばしきこと ㊅ 孝心を以て祭祀すること ㊆ 神たしなみて飲食を受くるをいふ ㊇ 期と同じ ㊈ 法式のこと ㊉ 亂れざるをいふ ㊊ 怠らざるをいふ ㊋ 邪ならざるをいふ ㊌ 悔ちざるをいふ ㊍ 繁榮の至極をいふ ㊎ 其福の無數を意味す

○禮儀既に備り、鐘鼓既に戒め、孝孫位に徂き、工祝告を致す。神具に醉ひ、皇尸載ち起ち、鐘を鼓して尸を送る。神保聿に歸る、諸宰君婦、廢徹遲からず。諸父兄弟、備に言に燕私す。

㊀ 堂下西面の位を指す ㊁ かたしろを尊びて皇尸と稱す ㊂ 尸、胸を出づるときこゝに尸を送る歟あり ㊃ 家宰を指す一人にあらず故に諸といふ ㊄ 供饌を撤去すること ㊅ 挨きを以て敬と爲せばなり ㊆ 同姓の者一統を指す ㊇ 之と共に寄飲して十分に私恩をつくすをいふ

○樂具入つて奏し、以て後祿を綏んず。爾の殽既に將み、怨むこと莫くして具に慶ぶ。既に醉ひ既に飽き、小大稽首す。神、飲食を嗜んで、君をして萬壽ならしむ。孔だ惠ひ孔だ時あり、維れ其れ之を盡せり。子子孫孫、替つること勿うして之を引うせよ。

㊀ 祭時の樂皆入りて廢に奏すること ㊁ 後日の福祿を安んずること ㊂ 長幼を指す ㊃ 拜禮すること ㊄ 其だ禮に順ひ、又其だ其時を得るをいふ ㊅ 歌へて盡さゞる所なきをいふ ㊆ 之を續することなく永久に之をつゞくるをいふ

信南山

是れ亦農事を力め祭祀を致すことを述べたる詩也。

信なるかな彼の南山、維れ禹之を甸む。畇畇たる原隰、曾孫之を田づくる。我疆し我理し、其畝を南東にす。

㊀ 終南山なり ㊁ 土地をきりひらきたる貌 ㊂ 高地と低地とをいふ ㊃ 成王を指す ㊄ 境界を定め地理を分つこと ㊅ 其水勢もしくは地勢に順つて其うねを或は開にし我に東にするをいふ

○上天同雲あり、雨雪雰雰たり。之を益すに霡霂を以てす。既に優かに既に渥く、

雪雰雰。益レ之以二霡霂一。既優既渥。既霑既足。生二我百穀一。疆場翼翼。黍稷彧彧。曾孫之穡。以爲二酒食一。畀二我尸賓一。壽考萬年。中田有レ廬。疆場有レ瓜。是剝是菹。獻二之皇祖一。曾孫壽考。受二天之祜一。祭以二清酒一。從以二騂牡一。享二于祖考一。執二其鸞刀一。以啓二其毛一。取二其血膋一。

既に霑ひ既に足り、我が百穀を生ず。

一 雪ぐもの事其一色なるをいふ 二 ちら〳〵と雪のふるをいふ 三 小雨なり 四 うるはひの十分なるをいふ

○疆場翼翼たり、黍稷彧彧たり、曾孫の穡なり。以て酒食を爲りて、我が尸と賓とに畀ふれば、壽考萬年なり。

一 田地のさかひ目をいふ 二 正しくとゝのへるさま 三 收穫物の茂盛なるをいふ

○中田に廬あり、疆場に瓜あり、是れ剝し是れ菹し。之を皇祖に獻ずれば、曾孫壽考にして、天の祜を受く。

一 田中なり 二 收穫時などに設ける假りいはなり 三 瓜の皮をむくこと 四 酢にひたすこと 五 幸福なり

○祭るに淸酒を以てし、從ふるに騂牡を以てして、祖考に享す。其鸞刀を執つて、以て其毛を啓き、其血膋を取る。

一 鬱鬯の酒を指す、祭の初めに之を地にそゝぐ也 二 之につゐて赤毛の牡牛をいけにえに供ふること 三 牛耳の旁の毛をぬきとるをいふ 四 腸の間にある脂を膋といふ

是烝是享。苾苾芬芬。祀事孔明。先祖是皇。報以二介福一。萬壽無レ疆。

倬彼甫田。歲取二十千一。我取二其陳一。食二我農人一。自レ古有年。今適二南畝一。或耘或耔。黍稷薿薿。攸レ介攸レ止。烝二我髦士一。

先祖と亡父となり 四 祭ること 五 鈴のついたる鳳刀也 六 牛耳の旁の毛をぬきとるをいふ 七 腸の間にある脂を膋といふ

甫田

是れ亦農を力め祭を奉ずることを述べたる詩也

○是に烝し是に享し、苾苾芬芬たり、祀事孔だ明なり。先祖是れ皇なれば、報ゆるに介福を以てして、萬壽疆無し。

一 かんばしきをいふ

倬たる彼の甫田、歲ごとに十千を取る。我、其陳を取り、我農人を食ふ。古より有年なり。今南畝に適く。或は耘し或は耔す、黍稷薿薿たり。介なる攸、止まる攸、我髦士を烝む。

一 明なる貌 二 大なる田をいふ 三 一萬畝の稅を謂ふ 四 祭を主るもの自ら稱す 五 古米をいふ 六 豐年の事 七 草をきりとるを耘といひ本に土をかふを耔といふ 八 盛に茂るさま 九 土地の廣く大にして休息すべき處をいふ 十 民の俊秀にして士たる資格あるものを進むること

以三我齊明。與二我犧羊一。以社以方。我田既臧。農夫之慶。琴瑟擊レ鼓。以御二田祖一。以祈二甘雨一。以介二我稷黍一。以穀二我士女一。曾孫來止。以二其婦子一。饁二彼南畝一。田畯至喜。攘二其左右一。嘗二其旨否一。禾易長レ畝。終善且有。曾孫不レ怒。農夫克敏。曾孫之稼。如レ茨如レ梁。曾孫之庾。如レ坻如レ京。乃求二千斯倉一。乃求二萬斯箱一。黍稷稻粱。農夫之慶。報以二介福一。萬壽無レ疆。

○我が齊明と、我が犧羊とを以て、以て社し以て方す。我田既に臧きは、農夫の慶なり。琴瑟し鼓を擊ち、以て田祖を御へ、以て甘雨を祈り、以て我稷黍を介にし、以て我士女を穀はん。

一 齊は粢なり、齊明は卽ち明粢也、明粢とは穀の事也 二 純色の羊なり 三 后土を祭ること 四 四方の神を祭ること 五 田祖の神なり 六 五穀をうるはし養ふ雨なり 七 穀を善となして說くも亦可なり

○曾孫來る、其婦子を以にす。彼の南畝に饁し、田畯至りて喜ぶ。其左右を攘りて、其旨否を嘗む。禾易まりて畝を長ふ、終に善く且つ有り。曾孫怒らず、農夫克く敏し。

一 糧を運ぶこと 二 田をさ卽ち田を見廻る役人なり 三 左右にある食物をとること 四 うまきや否やなめ試みること 五 稻を見れば耘耔よく治まりて畝を終ふるまで百尾の一の如くなるをいふ 六 善くみのりて收穫すこぶる多きをいふ 七 百姓等が穀穫によく働くをいふ

○曾孫の稼、茨の如く粱の如し。曾孫の庾、坻の如く京の如し。乃ち千斯の倉を求め、乃ち萬斯の箱を求む。稷黍稻粱は、農夫の慶なり。報ゆるに介福を以てし、萬壽疆り無し。

一 高處より見れば屋根のかやの如く、低處より見れば磯のそりたるが如きをいふ 二 湖の如く丘の如きをいふ 三 斯は語助也 四 車の上の物を載する處をいふ、こゝにては單に車の義とす

大田

是れ農夫の詩也、其上を頌美して前篇の意に答ふる者也。或は云ふ、是れ幽王を刺れる者なりと

大田稼多し、既に種し既に戒す。既に備り乃ち事するに、我覃耜を以てす。俶めて南畝に載あり、厥百穀を播す。既に庭く且つ碩に、曾孫是れ若ふ。

一 農具をそなふること 二 農事に取りかゝること 三 利(と)き鋤(すき)の事 四 苗の直く且つ大なるをいふ

○既に方し既に皁し、既に堅く既に好く、稂あらず、莠あらず。其螟螣と、其蟊

大田多レ稼。既種既戒。既備乃事。以二我覃耜一。俶載南畝。播二厥百穀一。既庭且碩。曾孫是若。既方既皁。既

堅既好。不レ稂不レ莠。去三其螟螣。及二其蟊賊一。無レ害二我田穉一。田祖有レ神。秉畀二炎火一。

渰有二萋萋一。興レ雨祁祁。雨二我公田一。遂及二我私一。彼有二不レ穫穉一。此有二不レ斂穧一。彼有二遺秉一。此有二滯穗一。伊寡婦之利。

曾孫來止。以二其婦子一。饁二彼南畝一。田畯至喜。來方禋祀。以三其騂黑一。與二其黍稷一。以享以祀。以介二景福一。

賊とを去り、我田穉を害ふこと無かれ。田祖神あり、秉りて炎火に畀へき。

一 稻の莖の初めて出來たるをいふ　二 實の未だ固まらずして白汁の出づるをいふ　三 ちからしねの事　四 はぐさの事　五 しんさり蟲と卷まき蟲也　六 根きりむしと節きりむしと也　七 田中のわか苗をいふ　八 神農を指す　九 やき殺すをいふ

渰として萋萋たるあり、雨を興すこと祁祁たり。我公田に雨ふり、遂に我私に及ぼす。彼に穫らざる穉あり、此に斂めざる穧あり。彼に遺れる秉あり、此に滯せる穗あり、伊れ寡婦の利なり。

一 雲起りて盛なる貌　二 徐にふる貌　三 私田なり　四 若苗なり　五 稻なり　六 束なり　七 やもめの利得なり

○曾孫來る、其婦子と以にし、彼の南畝の饁す。田畯至りて喜び、來りて方禋祀す。其騂黑と、其黍稷とを以て、以て享し、以て祀し、以て景福を介にす。

一 四方の神を至誠をこめて祭ること　二 赤黑の牲也

小雅　北山之什　瞻彼洛矣　裳裳者華

瞻彼洛矣

是れ天子、諸侯を會し武事を講ずるとき、諸侯、天子を美むるの詩也。或は云ふ、是れ幽王を刺れる也と

彼の洛を瞻れば、維れ水泱泱たり。君子至れり、福祿茨むが如し。韎韐奕たるあり、以て六師を作す。

一 水の名　二 深く廣き貌なり　三 茜にて染めたる韋(なめしがは)の膝おほひ也　四 赤きさま　五 天子の軍を指す

○彼の洛を瞻れば、維れ水泱泱たり。君子至れり、鞞埤珌あり。君子萬年、其家室を保つ。

一 刀の室(さや)の飾をいふ　二 刀のこじりの飾をいふ

○彼の洛を瞻れば、維れ水泱泱たり。君子至れり、福祿既に同まる。君子萬年、其家邦を保つ。

保二其家邦一。

裳裳者華。其葉湑兮。我覯二之子一。我心寫兮。是以有レ譽處兮。

裳裳者華。芸其黃矣。我覯二之子一。維其有レ章矣。維其有レ章矣。是以有レ慶矣。

裳裳者華。或黃或白。我覯二之子一。乘二其四駱一。六轡沃若。

裳裳者華

是れ天子、諸侯を美むる詩也。或は云ふ、此れ幽王を刺れる詩なりと

○裳裳たる者は華、其葉湑たり。我、之子を覯れば、我心寫す。是を以て譽ありて處んず。

㊀ 堂堂といふが如し、光り明なる貌 ㊁ 盛なる貌 ㊂ 天子自ら稱す ㊃ 諸侯を指す ㊄ 其儕に先方の心に映寫すること

○裳裳たる者は華、芸として其れ黃なり。我、之子を覯れば、維れ其れ章あり、是を以て慶あり。

㊀ 黃色の盛なる貌 ㊁ 德の顯はるゝをいふ

○裳裳たる者は華、或は黃に或は白なり。我、之子を覯て、其四駱に乘る。其四駱に乘二其四駱一。六轡沃若たり。

㊀ 四頭のかはちげ馬をいふ ㊁ 其の調さはきがやはらかなるをいふ

○之を左にし之を左にするも、君子之を宜しうす。之を右にし之を右にするも、君子之を有す。維れ其れ之を有す、是を以て之に似たり。

㊀ 諸侯たり ㊁ 皆之ありてきはまりつくることなきをいふ

北山之什十篇四十六章

桑扈之什二之七

桑扈

是幽王を刺るの詩也

交交たる桑扈、鶯たる其羽あり。君子樂胥たり、天の祜を受く。

㊀ 飛んで往來するさま ㊁ 鳥也、今のむくどりの類 ㊂ あやあるさま ㊃ 諸侯を指す ㊄ たのしさこと

交交桑扈。有二鶯其羽一。君子樂胥。受二天之

結。

交交桑扈。有二鶯其領一。君子樂胥。萬邦之屏。
之屏之翰。百辟爲レ憲。不レ戢不レ難。受レ福不レ那。
兕觥其觩。旨酒思柔。彼交匪レ敖。萬福來求。

をいふ、胥はことばのたすけ也 ㊀ さいはひの事

○交交たる桑扈、鶯たる其領あり。君子樂胥たり、萬邦の屏。
㊁ 頸のこと ㊂ 蔽なりかきねなり、かきねの家の周圍を蔽ふ如く邦國のまもりとなるをいふ

○之れ屏之れ翰、百辟憲と爲す。戢めざらんや難しまざらんや、福を受くること那からざらんや。
㊃ かさの兩端の本木をいふ ㊄ 辟は君のこと、諸侯を指す ㊅ 法となすこと ㊆ 身を斂めて引きしりぞくをいふ ㊇ 事をかろ〳〵しくせずして慎むをいふ ㊈ 多と同じ

○兕觥其れ觩たり、旨酒思に柔なり。彼の交敖るに匪ず、萬福來り求む。
㊉ 野牛の角にて作りしさかづき所謂罰酒の事 ㊋ 角のさきの曲れるさま ㊌ 美酒なり ㊍ 傲と同じ、傲慢なるをいふ ㊎ 向ふの方より反つて求め來る、いひかふれば求めざるに萬福の來るをいふ

鴛鴦

鴛鴦于飛。畢レ之羅レ之。君子萬年。福祿宜レ之。

鴛鴦在レ梁。戢二其左翼一。君子萬年。宜二其遐福一。

乘馬在レ廐。摧レ之秣レ之。君子萬年。福祿艾レ之。

乘馬在レ廐。秣レ之摧レ之。君子萬年。福祿綏レ之。

是れ諸侯、桑扈に答ふる所の詩也、或は以て幽王を刺れる者と爲す

○鴛鴦の飛ぶ、之を畢し之を羅す。君子萬年、福祿之を宜しうす。
㊀ をしどりの事 ㊁ かぶせてとる網の事 ㊂ 張りてとる網の事 ㊃ 天子を指す ㊄ 具合好く福祿を受くるをいふ

○鴛鴦梁に在り、其左翼を戢む。君子萬年、其遐福に宜し。
㊀ やなの事 ㊁ 左のつばさだけすぼめて居ること、飛ぶ鳥の用心也 ㊂ 永遠の幸福をいふ

○乘馬廐に在り、之を摧し之を秣す。君子萬年、福祿之を艾ふ。
㊀ 事なければ草のみを與ふるをいふ ㊁ 事あれば穀を與ふるをいふ ㊂ 或は老ゆと訓じ、福祿を以て其身を終ふと說く

○乘馬廐に在り、之に秣し之に摧す。君子萬年、福祿之を綏んず。
㊀ 福祿身にあつまりて安心するをいふ

有レ頍者弁。實維伊何。爾酒既旨。爾殽既嘉。豈伊異人。兄弟匪レ他。蔦與二女蘿一。施二于松柏一。未レ見二君子一。憂心奕奕。既見二君子一。庶幾說懌。

有レ頍者弁。實維何期。爾酒既旨。爾殽既時。豈伊異人。兄弟具來。蔦與二女蘿一。施二于松上一。未レ見二君子一。憂心柄柄。既見二君子一。庶幾有レ臧。

有レ頍者弁。實維伊何。爾酒既旨。爾殽既阜。豈伊異人。兄弟甥舅。如二彼雨雪一。先集維霰。死喪無レ日。無二幾相見一。樂二酒今夕一。君子維宴。

問關車之舝兮。思二孌季女一逝兮。匪レ飢匪レ渴。德音來括。雖レ無二好友一。式燕且喜。

頍弁

是れ兄弟親戚を燕する詩也。或は云ふ、此れ諸侯、幽王を刺れる詩也と

○頍たる有る者は弁、實に維れ伊れ何ぞ。爾の酒既に旨く、爾が殽既に嘉し。豈に伊れ異人ならんや、兄弟にして他に匪ず。蔦と女蘿と、松柏に施へり。未だ君子を見ざれば、憂心奕奕たり。既に君子を見れば、庶幾はくは悅び懌ばん。

㊀ 冠の貌或は首をあぐるさまといふ、弁は皮の冠なり ㊁ 何の爲にかぶるぞと問を起すなり ㊂ 他人にあらざるをいふ ㊃ やどり木なりはやと訓ず、俗につたの字に之を充つ ㊄ 兎絲のこと、ねなしかづらをいふ ㊅ ひの木の一種或は云ふこのてがしはなりと ㊆ 心うれへて謂まちざること

○頍たる有る者は弁、實に維れ何ぞ。爾の酒既に旨く、爾の殽既に時し。豈に伊れ異人ならんや。兄弟具に來る、蔦と女蘿と、松上に施へり。未だ君子を見ざれば、憂心柄柄たり、既に君子を見れば、庶幾はくは臧きことあらん。

㊀ 時にかなひて宜しきをいふ ㊁ うれひの一杯になるさま

○頍たる有る者は弁、實に維れ首に在り。爾の酒既に旨く、爾の殽既に阜なり。豈に伊れ異人ならんや、兄弟甥舅なり。彼の雨雪の如き、先づ集るは維れ霰。死喪は日無く、幾くも相見る無けん。酒を今夕に樂む、君子維れ宴す。

㊀ 頭の上にいたるくをいふ ㊁ 岡の如く深山なるをいふ ㊂ 姉妹の子を甥(をひ)といひ、母の兄弟を舅(をぢ)といふ ㊃ 降雨と云ふが如し ㊄ 死亡の餘日なきをいふ ㊅ 長く相見るのかたきをいふ

車舝

是れ新昏を燕樂する詩也。或は云ふ、此れ大夫、幽王を刺りて作れる也と

○間關として車之れ舝ち、孌たる季女を思うて逝く。飢に匪ず渴に匪ず、德音來り括はん。好友無しと雖も、式て燕し且つ喜ばん。

㊀ 車のくさびを打つ聲なり ㊁ うるはしきさま ㊂ 少女なり ㊃ 飢渴するが如くなるを云ふ ㊄ 合間以て來り會ふをいふ ㊅ 宴と同じ

依彼平林。有集維鷮。辰彼碩女。令德來教。式燕且譽。好爾無射。

雖無旨酒。式飲庶幾。雖無嘉殽。式食庶幾。雖無德與女。式歌且舞。

陟彼高岡。析其柞薪。析其柞薪。其葉湑兮。鮮我覯爾。我心寫兮。

高山仰止。景行行止。四牡騑騑。六轡如琴。覯爾新昏。以慰我心。

○依たる彼の平林、集まること有るは維れ鷮たり。辰に彼の碩女、令德來り教へん。式て燕し且つ譽あり、爾を好みして射ふこと無し。

一 樹木の茂れる貌　二 平地の森林をいふ　三 鳥名、やまどりと訓ず　四 碩は大なり、女子の德をほめていふ　五 旅行をいふ

○旨酒無しと雖も、式れ飲まんことを庶幾ふ。嘉殽無しと雖も、式れ食はんことを庶幾ふ。德の女と與にするなしと雖も、式つて歌ひ且つ舞はん。

一 汝と與にならぶ德なきをいふ

○彼の高岡に陟りて、其柞薪を析く。其柞薪を析くは、其葉湑たればなり。鮮に我、爾を覯ば、我心寫さん。

一 とぢの木のたきゞをいふ　二 葉の盛にしげる貌　三 たまさかにといふが如し、或はよきかなと訓むもあり　四 我心をつくり其儘に君の心に映寫せんとなり

○高山は仰ぎ、景行は行く。四牡騑騑として、六轡琴の如し。爾が新昏を覯て、以て我心を慰めん。

一 大道なり　二 馬の能く行くさま　三 調子の善く合ふをいふ

青蠅

是れ讒人の讒言を信ずるを刺れる詩也

營營青蠅。止于樊。豈弟君子。無信讒言。

營營青蠅。止于棘。讒人罔極。交亂四國。

營營青蠅。止于榛。讒人罔極。構我二人。

○營營たる青蠅、樊に止まる、豈弟の君子、讒言を信ずること無かれ。

一 あちらこちらに飛びかはす形容　二 あをばへをいふ　三 かき也　四 樂しく安らけきさま　五 王を指す

○營營たる青蠅、棘に止まる。讒人極まり罔く、交〻四國を亂る。

一 四方の國國を亂ちすこと

○營營たる青蠅、榛に止まる。讒人極まり罔く、我二人を構す。

一 二人の間に禍を構へて相爭はしむるをいふ

賓之初筵。左右秩秩。籩豆楚楚。殽核維旅。酒既和旨。飲酒孔偕。鐘鼓既設。舉醻逸逸。大侯既抗。弓矢斯張。射夫既同。獻爾發功。發彼有的。以祈爾爵。

籥舞笙鼓。樂

賓之初筵

是れ衛の武公飲酒の過を悔いて作れる詩也

賓の初筵には、左右秩秩たり。籩豆楚たるあり、殽核維れ旅す。酒既に和旨に、酒を飲むこと孔だ偕し。鐘鼓既に設けて、醻を舉ぐること逸逸たり。大侯既に抗け、弓矢斯に張る。射夫既に同じく、爾の發功を獻ず。彼の有的に發ちて、以て爾の爵を祈む。

一 燕射禮のむしろに初めてつくをいふ、君主となりて羣臣を賓とする也 二 次第ある義 三 つちなれるさま 四 殽は豆にもる煎鹽の類をいふ核は遠にもる桃梅の類をいふ 五 陳列すること 六 とゝのひうるさまをいふ 七 一樣にそろふこと 八 樂器なり 九 返杯なり 一〇 賓主獻酬の次第あるをいふ 一一 君の侯をいふ、侯とは射の的(まと)をつくる幕也 一二 多勢の射手をいふ 一三 發ちたる矢の的に中りし功を奏上すること 一四 射師ちたるものは射あてざるものに罰杯をのましむるをいふ 一五 有はつけ字也たゞ的の事也

○籥舞笙鼓、樂既に和奏す。烈祖に烝衎して、以て百禮を洽す。百禮既に至る、既和奏。烝衎烈祖。以洽百禮。百禮既至。有壬有林。錫爾純嘏。子孫其湛。其湛曰樂。各奏爾能。賓載手仇。室人入又。酌彼康爵。以奏爾時。

賓之初筵。溫溫其恭。其未醉止。威儀反反。曰既醉止。威儀幡幡。舍爾其坐。遷屢舞僊僊。其未醉止。威儀抑抑。曰既醉止。威儀怭怭。是曰既醉。不知其秩。

一 笙と大鼓との鳴物をいふ 二 調子を合せて音樂を奏すること 三 功業ある先祖なり 四 音樂を寄遇して祖靈をなぐさむるをいふ 五 盛儀皆備るをいふ 六 壬は大なり林は盛なり、禮の盛大なるをいふ、或は壬を卿大夫と爲し林を國君と爲す 七 主祭者を指す 八 大福なり 九 神之に賜ふをいふ 一〇 室中にて事を行ふ佐食の人を指す 一一 讀んで斟(かう)と爲す、くむ也、手づから酌むをいふ 一二 室中にて事を行ふ佐食の人を指す 一三 復と同じ 一四 酒器を康爵といふ蓋は酒は形體を安んずるものなれば也 一五 四時の祭を行ふこと、一說には時節の物を供ずとあり

○賓の初筵には、溫溫として其れ恭し。其の未だ醉はざる、威儀反反たり、曰に既に醉ひ、威儀幡幡たり。其坐を舍てて遷り、屢〻舞うて僊僊たり。其の未だ醉はざる、威儀抑抑たり。曰に既に醉ふ、威儀怭怭たり。是れ曰に既に醉ふ、其の秩を知らず。

止。威儀抑抑。曰既醉止。威儀怭怭。是曰既醉。不知其秩。

賓既醉止。載號載呶。亂我籩豆。屢舞僊僊。是曰既醉。不知其郵。側弁之俄。屢舞傞傞。既醉而出。並受其福。醉而不出。是謂伐德。飲酒孔嘉。維其令儀。

凡此飲酒。或醉或否。既立之監。或佐之史。彼醉不臧。不醉反恥。式勿從謂。無俾大怠。匪言勿言。匪由勿語。由醉之言。俾出童羖。三爵不識。矧敢多又。

魚在在藻。有頒其首。王在在鎬。豈樂飲酒。

魚在在藻。有莘其尾。王在

(一) 態度のもだやかなるをいふ (二) 觀を顧みて寛むさま (三) 初の態度と打つて變りて作法を亂るをいふ (四) 勝手に自席を離るゝこと (五) 跳り上りて舞ふさま (六) ひか〳〵目にしてつゝしみ居ること (七) なれ〳〵しく人を侮るまでにしどろもどろなるをいふ (八) 平常の次第を忘るゝをいふ

○賓既に醉ふ、載ち號び載ち呶し。我籩豆を亂り、屢〻舞ふ、僊僊たり。是れ曰に既に醉ふ、其郵を知らず。側弁の俄たる、屢〻舞うて傞傞たり。既に醉うて出づれば、並に其福を受く。醉うて出でざれば、是を德を伐ふと謂ふ。酒を飲んで孔だ嘉きは、維れ其の令儀なり。

(一) 身體がきかずたび〳〵倒れさうになるをいふ (二) 郵は尤と同じとが也、即ち過失を記憶せざるをいふ (三) 頭にかぶれる皮弁の傾けるさま (四) 止めどのなきことをいふ (五) 賓主共にといふ意 (六) 其名譽を傷づくること (七) 威儀作法の正しくし亂れざること

○凡そ此の酒を飲む、或は醉ひ或は否ず。既に之が監を立て、或は之が史を佐とす。彼の醉ふもの臧からず、醉はざるもの反つて恥づ、式つて從つて謂ふこと勿かれ、太だ怠らしむること無かれ。言に匪ざるを言ふこと勿かれ、由に匪ざるを語ること勿かれ、醉の言に由はば、童羖を出さしめん。三爵すら識らず、矧んや敢へて多く又するをや。

(一) 監督者を置くこと (二) 其輔佐として、更に書記を置くこと (三) 其に就いて忠告がましきことをさせざるをいふ (四) 言ふべき事にあらざれば言ふことなかれとなり (五) 其爲す所從ふべかちざるものあらば決して之を人に告ぐることなかれとなり (六) 角なき羊なり、其詞として羊の角を生ぜしめんと也 (七) さかづき三杯のこと

魚藻

是れ天子、諸侯を燕して、諸侯、天子を美むる詩也。或は云ふ、是れ幽王を刺れる也と

魚在り藻に在り、頒たる其首あり。王在り鎬に在り、豈樂して酒を飲む。

(一) 水草、も也 (二) 首の大なるさま (三) 鎬京をさす (四) 愉快なること

○魚在り藻に在り、莘たる其尾あり。王在り鎬に在り、酒を飲んで樂豈す。

在レ鎬。飲レ酒樂豈。

魚在在レ藻。依二于其蒲一。王在在レ鎬。有二那其居一。

采レ菽。采レ菽。筐レ之。君子來朝。何錫二予之一。雖レ無レ予レ之。路車乗馬。又何予レ之。玄袞及黼。

(一) 尾の長きさま

○魚在り藻に在り、其蒲に依る。王在り鎬に在り、那たる其居あり。

(一) 水草、がま也　依るとは、よりそふこと是れ幽王の褒姒を愛するに譬ふる也　(二) 安樂なる場所ありとの意

采菽

是れ天子、魚藻の詩に答ふる所也。或は云ふ、幽王を刺れる詩也と

○菽を采り菽を采る、之を筐にし之を筥にす。君子來り朝す、何をか之に錫予せん。之に予ふること無しと雖も、路車乗馬あり。又何をか之に予へん、玄袞及び黼なり。

(一) 大豆なり　(二) 諸侯を指す　(三) 錫はたまふと訓ず　(四) 別に與ふものなきをいふ　(五) 大車なり同姓には金路とて黄金にて鞁を飾とす異姓には象路とて象牙にて飾とす　(六) 四頭の馬なり　(七) 附け加へて與ふること　(八) 玄衣に卷龍を畫きたるもの　(九) 斧の形を袞に織ひたるもの

觱沸檻泉。言采二其芹一。君子來朝。言觀二其旂一。其旂淠淠。鸞聲嘒嘒。載驂載駟。君子所レ居。

赤芾在レ股。邪幅在レ下。彼交匪レ紓。天子所レ予。樂只君子。天子命レ之。樂只君子。福祿申レ之。

維柞之枝。其葉蓬蓬。樂只君子。殿二天子一。

○觱沸たる檻泉、言に其芹を采る。君子來り朝す、言に其旂を觀る。其旂淠淠たり。鸞聲嘒嘒たり。載ち驂し載ち駟す、君子の居る所なり。

(一) 泉のわき出づるさま　(二) 下より流上に出づる泉をいふ　(三) 車上に建てたる旗をいふ　(四) 旅のひちめくさま　(五) 鈴の聲の和きさま　(六) 兩側の馬　(七) 四馬のこと　(八) 最初に旗を見、次に鈴を聞き、最後に馬の數を知る、君子のいよ〳〵近づき至るを詠じたる也

○赤芾股に在り、邪幅下に在り、彼の交り紓からず、天子の予ふる所なり。樂しき君子は、天子之に命ず。樂しき君子は、福祿之を申ぬ。

(一) 赤色のなめしがはの膝ゐはひなり　(二) むかばきの事、今の脚絆の如く足にまくもの也、邪は斜の意　(三) 諸侯を指す　(四) 天子に交際(賓に事ふるなり)するに少しの怠なく能く恭敬を盡すをいふ　(五) 天子の諸侯に物を賜ふは此の道理によると也

○維れ柞の枝、其葉蓬蓬たり。樂しき君子は、天子の邦に殿む。樂しき君子は、萬福の同る攸。平平たる左右も、亦是れ率ひ從ふ。

之邦。樂只君子。萬福攸同。平平左右。亦是率從。
汎汎楊舟。紼纚之。樂只君子。天子葵之。樂只君子。福祿膍之。優哉游哉。亦是戾矣。

驛驛角弓。翩其反矣。兄弟昏姻。無胥遠矣。

㊀ 琫はつげといひ琫ははゝそといひ其稱一ならず ㊁ 盛に茂れるさま ㊂ 朝廷を指す ㊃ よくわかちをつけて取り綏ること ㊄ 諸侯の臣を指す

○汎汎たる楊舟は、紼もて之を纚維す。樂しき君子は、天子之を葵る。樂しき君子は、福祿之を膍うす。優なる哉游なる哉、亦是れ戾れり。

㊀ 浮きながら流るゝさま ㊁ 楊舟(柳の種類にして枝の垂れざるもの)にて作れる舟 ㊂ 大綱なり ㊃ つなぎとむること ㊄ 諸侯の才德を集るをいふ ㊅ 厚く福祿を與ふるをいふ ㊆ ゆつたりと落ちつくさま ㊇ 來り從ふをいふ

角弓

是れ幽王が九族を親まずして、讒佞を好み、家族をして相怨ましむるを刺れる詩なり

○騂騂たる角弓、翩として其れ反れり。兄弟昏姻、胥ひ遠かること無かれ。

㊀ 長さといつて大きといひ騂剛といひ皆調和したるさまをいふ ㊁ 獸角にてかざりたる弓 ㊂ ひらりと反りかへること、矢を發ちたる時の狀なり ㊃ 兄弟は同姓の族をいひ、婚姻は異姓の族をいふ

爾之遠矣。民胥然矣。爾之教矣。民胥傚矣。
此令兄弟。綽綽有裕。不令兄弟。交相爲瘉。
民之無良。相怨一方。受爵不讓。至于已斯亡。
老馬反爲駒。不顧其後。如食宜饇。如酌孔取。
毋教猱升木。

○爾の遠かる、民胥ひ然り。爾の教ふる、民胥傚ふ。

㊀ 王を指す ㊁ 人民も亦王を學ぶをいふ

○此の令き兄弟、綽綽として裕なるあり。令からざる兄弟、交〻瘉を相爲す。

㊀ ゆるやかにゆとりあるさま ㊁ 互にゆんだうをかけあふをいふ

○民の良無き、一方に相怨む。爵を受けて讓らざれば、已斯れ亡ぶるに至る。

㊀ 良心なきをいふ ㊁ 爵位の事 ㊂ たかぶること

○老馬反つて駒と爲し、其後を顧みず。食うて宜しく饇くべきが如く、酌んで孔だ取るが如し。

㊀ 血氣なき老馬が自ら血氣ある子馬とうぬぼれて爵位を貪らんとすること ㊁ 其後難の事などを顧みざるをいふ

○猱に木に升るを教ふること毋かれ。塗を塗に附するが如し。君子徽猷あら

如二蝥蝥一附二于君子一有二微猷一。小人與屬。

雨雪瀌瀌。見レ晛曰消。莫二肯下遺一。式居婁驕。

雨雪浮浮。見レ晛曰流。如レ蠶如レ髦。我是用憂。

ば、小人與に屬かん。

㊀ 教ふべからざるを教ふるに比す ㊁ 群道なり

○雨雪瀌瀌たるも、晛を見れば曰に消ゆ。肯へて下し遺つること莫く、式つて居て婁〻驕らしむ。

㊀ 雪の盛に降るさま ㊁ 日光なり日氣なり ㊂ 小人をみとしさげて之を排棄せざること ㊃ 隱と同じいふ ㊄ ますます驕傲の心を增長せしむるをいふ

○雨雪浮浮たるも、晛を見れば曰に流る。蠶の如く髦の如し、我是を用つて憂ふ。

㊀ 雪の飛び散るさま ㊁ 雨のえびすなり ㊂ 西のえびすの別名なり、其の禮儀なく互に相害ふを借り用ふ

是れ諸侯、王室の暴虐を以て朝するを欲せざるを作れる詩也

菀柳

有二菀者一柳。不レ尙レ息焉。上帝甚蹈。無二自暱一焉。俾二予靖一之。後予極焉。

有二菀者一柳。不レ尙レ愒焉。上帝甚蹈。無二自瘵一焉。俾二予靖一之。後予邁焉。

有レ鳥高飛。亦傳二于天一。彼人之心。于レ何其臻。曷予靖レ之。居以凶矜。

菀たる者柳あり、息ふことを尙ばざらんや。上帝甚だ蹈たり、自ら暱くこと無し。予をして之を靖んぜしめば、後には予を極めん。

㊀ こんもりと茂りたるさま ㊁ 其所に休息するを願ふ意 ㊂ こゝにては王の事也 ㊃ 朱注は神の字の誤とし威靈長るべしの義に說けり、毛傳には動とあり王の暴虐の狀近づき難ふべからざるをいふ ㊄ 我勝手の限りをつくして反つて何等かの欲望を我に求むるに至らんと也

○菀たる者柳あり、愒ふことを尙ばざらんや。上帝甚だ蹈たり、自ら瘵むこと無し。予をして之を靖んぜしめば、後には予に邁さん。

㊀ 休息すること ㊁ 過分の求を爲すこと

○鳥あり高く飛んで、亦天に傳れり。彼人の心、何くに其れ臻らん。曷ぞ予之を靖んぜん。居ながら以て凶矜せん。

㊀ 王を指す ㊁ 貪婪の厭まる所なきをいふ ㊂ 禍災にかゝりてあはれむべき身とならんの意

桑扈之什十篇四十三章

彼都人士。狐裘黃黃。其容不改。出言有章。行歸于周。萬民所望。

彼都人士。臺笠緇撮。彼君子女。綢直如髮。我不見兮。我心不說。

都人士之什二之八

都人士

是れ周人、衣服常なきを歎じて作れる詩也

彼の都人士、狐裘黃黃たり、其容改めず、言を出して章あり。行いて周に歸せば、萬民の望む所ならん。

㊀ 王城の内に住める人を指す、士は男子の通稱也 ㊁ 體容の常ありて亂れざるをいふ ㊂ 言語の正しくして賢しかちざるをいふ ㊃ 今もし宗周のわかしに立ち返りなばの意

○彼の都人士、臺笠緇撮にす。彼の君子の女、綢直髮の如し。我見ざれば、我心說ばず。

㊀ すげの笠なり ㊁ 黑き布にて作れる小冠なり ㊂ 貴婦人を指す ㊃ 心の緻密にして行の正直なるをいふ

彼都人士。充耳琇實。彼君子女。謂之尹吉。我不見兮。我心苑結。

彼都人士。垂帶而厲。彼君子女。卷髮如蠆。我不見兮。言從之邁。匪伊垂之。帶則有餘。匪伊卷之。髮則有旟。我不見兮。云何盱矣。

○彼の都人士、充耳琇實にす。彼の君子の女、之を尹吉と謂ふ。我見ざれば、心我苑結す。

㊀ 冠に垂れたる耳かねの事 ㊁ 玉に似たる美石を琇といふ、之にて作りて耳の邊(ふさぎ)と爲す也 ㊂ 尹氏と結氏とをいふ、其の周の舊家にして禮法あるを以て也 ㊃ ふさぎわすれざるをいふ

○彼の都人士、帶を垂れて厲たり。彼の君子の女、卷髮蠆の如し。我見ざれども、言に之に從つて邁かん。

㊀ 帶を垂るゝ貌 ㊁ 髮のまかりあがれることさそりの尾の如きをいふ

○伊れ之を垂れたるに匪ず、帶則ち餘あり。伊れ之を卷くに匪ず、髮則ち旟る。ことあり。我見ざれば、云に何ぞ盱まん。

㊀ 揚起也ふきあがることをいふ

采綠

是れ婦人其君子を思ふことを詩ぜる詩也

終朝采綠。不盈一匊。予髮曲局。薄言歸沐。

終朝采藍。不盈一襜。五日爲期。六日不詹。

之子于狩。言韔其弓。之子于釣。言綸之繩。

其釣維何。維魴及鱮。維魴及鱮。薄言觀者。

○終朝綠を采る、一匊に盈たず。予が髮曲局す、薄か言に歸り沐せん。

㊀ 旦より食時まで　㊁ 兩手にてすくひ拾ふを匊といふ　㊂ 亂れまがるさま　㊃ ちよつと歸りて髮を洗はんとなり

○終朝藍を采る、一襜に盈たず。五日期と爲し、六日詹えず。

㊀ 藍の事　㊁ 着物のつまをかゝげてそこに入れること　㊂ 期限と爲すこと　㊃ 見えざること歸り來らざるをいふ

○之子于に狩せば、言に其弓を韔にせん。之子于に釣せば、言に之に繩を綸め

ん。

㊀ 君子を指す　㊁ 弓を入ぐろに入れて狩に從ふをいふ　㊂ 釣り糸をよること

○其釣るもの維れ何ぞ、維れ魴及び鱮なり。維れ魴及び鱮、薄か言に觀ん者な

り。

㊀ 魚名、和訓不明　㊁ 同上　㊂ 是等の魚が我が釣りて見たしと思ふをいふ

芃芃黍苗。陰雨膏之。悠悠南行。召伯勞之。

我任我輦。我車我牛。我行既集。蓋云歸哉。

我徒我御。我師我旅。我行既集。蓋云歸處。

肅肅謝功。召伯營之。烈烈征師。召伯成之。

黍苗

是れ徒役の爲に南行するものゝ作也。或は云ふ、幽王を刺れる也と

○芃芃たる黍苗、陰雨之を膏す。悠悠たる南行、召伯之を勞ふ。

㊀ 長く伸びて大なる貌　㊁ 遥かに遠き形容　㊂ 南方へ征役すること　㊃ 召公奭の子穆公虎を指す

○我が任我が輦、我が車我が牛。我が行既に集らば、蓋し云に歸らんか。

㊀ 荷を負ふ者　㊁ 車を挽くもの　㊂ 大車を翔して引くもの　㊃ 行役の功を成すこと

○我が徒我が御、我が師我が旅。我が行既に集らば、蓋し云に歸處せん。

㊀ かち走の人　㊁ 車にのる人　㊂ 二千五百人なり　㊃ 五百人なり、ひきつるゝ人の多きを意味す

○肅肅たる謝功、召伯之を營む。烈烈たる征師、召伯之を成す。

㊀ 嚴かに正しき貌　㊁ 謝は邑の名即ち征役の目的地なり　㊂ 威武ある貌　㊃ 成功をいふ

之。原隰既平。泉流既清。召伯有成。王心則寧。

隰桑有阿。其葉有難。既見君子。其樂如何。

隰桑有阿。其葉有沃。既見君子。云何不樂。

隰桑有阿。其葉有幽。既見君子。德音孔膠。

○原隰既に平ぎ、泉流既に清めり。召伯成ることあり、王の心則ち寧し。

㊀ 高地と低地となり ㊁ 土功の既に成るをいふ ㊂ 治水の既に成るをいふ

隰桑

是れ君子を見るを喜ぶ詩也。或は云ふ、是れ幽王を刺れる詩也と

隰桑阿たることあり。其葉難たることあり。既に君子を見る、其樂如何ん。

㊀ 低地に生ずる桑の木 ㊁ うるはしきさま ㊂ 盛んなるさま

○隰桑阿たることあり、其葉沃たることあり、既に君子を見る、云に何ぞ樂まざらん。

㊀ やはらかに光澤あるさま

○隰桑阿たることあり、其葉幽たることあり。既に君子を見る、德音孔だ膠し。

㊀ 色の黑きをいふ ㊁ 德にもとづく言語命令をいふ ㊂ 之を守ること固く決して破らざるをいふ

心乎愛矣。遐不謂矣。中心藏之。何日忘之。

白華菅兮。白茅束兮。之子之遠。俾我獨兮。

英英白雲。露彼菅茅。天步艱難。之子不猶。

滮池北流。浸彼稻田。嘯歌傷懷。念彼碩人。

○心に愛す、遐んぞ謂ひざらん。中心之を藏む、何の日か之を忘れん。

㊀ 或と同字として心に之をよみすと說くも亦可なり

白華

是れ申后自作の詩也。或は云ふ、是れ周人幽王の后を代へざるを刺れる詩也と

白華の菅となる、白茅を束ぬ。之子之れ遠かり、我をして獨ならしむ。

㊀ 草の名かやの類也 ㊁ 水にひたし皮をとりてなはとすれば之を菅（かや）といふ ㊂ 白きちがやを以て束ぬるをいふ、貴き者を賤き者もて之を拘束する義に取る ㊃ 王を指す

○英英たる白雲、彼の菅茅に露おく。天步艱難なるも、之子猶らず。

㊀ かがくして明なる貌 ㊁ 是時運といふが如し ㊂ 思ひ量ること

○滮池北に流れ、彼の稻田を浸す。嘯歌して傷み懷ひ、彼の碩人を念ふ。

㊀ 流れ出づる池の水を云ふ ㊁ うそぶき又歌ふこと ㊂ 大人即ち幽王を指す、或は褒姒と爲す

樵二彼桑薪一。卬烘二于煁一。維彼碩人。實勞二我心一。
鼓二鐘于宮一。聲聞二于外一。念レ子懆懆。視レ我邁邁。
有レ鶯在レ梁。有レ鶴在レ林。維彼碩人。實勞二我心一。
鴛鴦在レ梁。戢二其左翼一。之子無レ良。二三其德。
有二扁斯石一。履レ之卑兮。之子之遠。俾二我疧一兮。

○彼の桑薪を樵りて、卬、煁に烘く。維れ彼の碩人、實に我心を勞す。

㊀ 代りて采ること ㊁ 竈と同じ

○鐘を宮に鼓す、聲、外に聞ゆ。子を念うて懆懆たるも、我を視て邁邁たり。

㊀ 憂ふる貌 ㊁ 顧みざる貌

○鶯あり梁に在り、鶴あり林に在り。維れ彼の碩人、實に我心を勞す。

㊀ 鳥名、鶴に似て大なり和名ゐはとりと訓ず ㊁ やなぜ

○鴛鴦梁に在り、其左翼を戢む。之子良なし、其德を二三にす。

㊀ 良心なきをいふ ㊁ 二つにも三つにも德の使ひ分けをすること、操守なきをいふ

○扁たる斯石あり、之を履めば卑し。之子之れ遠かり、我をして疧ましむ。

㊀ ひくき貌とあり平たきこと也 ㊁ 苦痛なり

緜蠻黃鳥。止二于丘阿一。道之云遠。我勞如何。飲レ之食レ之。教レ之誨レ之。命二彼後車一。謂二之載レ之。
緜蠻黃鳥。止二于丘隅一。豈敢レ憚レ行。畏レ不レ能レ趨。飲レ之食レ之。教レ之誨レ之。命二彼後車一。謂二之載レ之。
緜蠻黃鳥。止二

緜蠻

是れ微賤勞苦する者の託する所あるを思ひ、鳥言を爲して以て自ら比する也

○緜蠻たる黃鳥、丘阿に止まる。道の云に遠き、我が勞如何。之に飲ましめ之に食はしめ、之に教へ之に誨へ、彼の後車に命じて、之に之を載せよと謂はん。

㊀ 鳥の鳴く聲の長の續くさまをいふ ㊁ をかの曲りこむ處 ㊂ 副車也、そへぐるまをいふ

○緜蠻たる黃鳥、丘隅に止まる。豈敢へて行を憚らんや。趨ること能はざるを畏る。之に飲ましめ之に食はしめ、之に教へ之に誨へ、彼の後車に命じて、之に之を載せよと謂ふ。

㊀ をかのすみなり ㊁ 決して徒行を畏れざるをいふ

○緜蠻たる黃鳥、丘側に止まる。豈に敢へて行を憚らんや、極ること能はざる

于丘側。豈敢憚行。畏不能極。飲之食之。教之誨之。命彼後車。謂之載之。

を畏る。之に飲ましめ之に食はしめ、之に教へ之に誨へ、彼の後車に命じて、之に之を載せよと謂はん。

㊀ 岡のかたはらをいふ

瓠葉

是れ燕飲の詩なり。或は云ふ、此れ大夫、幽王を刺れる詩也と

幡幡たる瓠葉も、之を采り之を亨る。君子酒あり、酌んで言に之を嘗む。

㊁ 夕顔の葉のひろく厚なるさま　㊂ 夕顔の葉なり

○兎の斯の首あり、之を燔き之を炮り之を燔く。君子酒あり、酌んで言に之を獻ず。

㊀ 毛のまゝにやくをいふ　㊁ 火に入れてやくをいふ　㊂ 酒を先づ酌みて飲みこれを客にさすをいふ

○兎の斯の首あり、之を燔き之を炙る。君子酒あり、酌んで言に之を酢ゆ。

㊀ 肉を串にさして遠火にかくること　㊁ 客のみはして之を主人に返杯すること

之。有兎斯首。燔之炮之。君子有酒。酌言醻之。

幡幡瓠葉。采之亨之。君子有酒。酌言嘗之。有兎斯首。炮之燔之。君子有酒。酌言獻之。有兎斯首。燔之炙之。君子有酒。酌言酢之。

漸漸之石。維其高矣。山川悠遠。維其勞矣。武人東征。不遑朝矣。

漸漸之石。維其卒矣。山川悠遠。曷其沒矣。武人東征。不遑出矣。

○兎の斯の首あり、之を燔き之を炮る。君子酒あり、酌んで言に之を醻ゆ。

㊀ 客の返杯せしを更に一回之をさすを言ふ

漸漸之石

是れ將帥出征の苦に堪へずして作れる者也。或は云ふ、此れ大夫時々聞んで作れりと

漸漸の石、維れ其れ高し、山川悠遠、維れ其れ勞す。武人東征して、朝に遑あらず。

㊀ 高峻なる貌　㊁ 將帥を指す　㊂ 一朝も暇なきをいふ

○漸漸の石、維れ其れ卒たり。山川悠遠、曷ぞ其れ沒きん。武人東征して、出づるに遑あらず。

㊀ 崒と同じ、山頂のけはしき貌、或はかのまゝに卒ると讀み、山巓に登り盡したる義と爲す　㊁ 陸深く入り込むのみにて出づることを謀る暇なきをいふ

有ㇾ豕白蹢。烝涉ㇾ波矣。月離ニ于畢一。俾ニ滂沱一矣。武人東征。不ㇾ遑ㇾ他矣。

○豕あり白蹢なり、烝〻波を涉る。月、畢に離り、滂沱たらしむ。武人東征して、他に遑あらず。

㊀ 白きひづめなり ㊁ 群を爲して水を渡ること是れ降雨の兆とす ㊂ 二十八宿の一也星の名、月の畢にやどるは亦雨の兆とす ㊃ 大雨をいふ ㊄ 他事を思ふに暇あらざるをいふ

苕之華

是れ周の詩人、王室の衰微に遭ひ、其心の憂悲を詠ぜる者也。或は云ふ、此れ大夫時を閔む詩也と

苕之華。芸其黄矣。心之憂矣。維其傷矣。

苕之華。其葉青青。知ニ我如ㇾ此。不ㇾ如ㇾ無ㇾ生。

○苕の華、芸として其れ黄なり。心の憂あり、維れ其れ傷む。

㊀ 陵苕なり和名のうぐんかづらと訓ず ㊁ 黄色の盛なるをいふ

○苕の華、其葉青青たり。我が此の如くなるを知らば、生なきに如かず。

㊀ 盛なる貌 ㊁ 我が此の如くなるを知らば何の樂かあらんとの意 ㊂ 生の樂なきを知らば早く死するに如かずとなり

○牂羊墳首なり、三星罶に在り。人、以て食ふ可きも、以て飽く可きこと鮮し。

牂羊墳首。三星在ㇾ罶。人可ニ以食一。鮮ㇾ可ニ以飽一。

何草不ㇾ黄。何日不ㇾ行。何人不ニ將。經ニ營四方一。

何草不ㇾ玄。何人不ㇾ矜。哀我征夫。獨爲ㇾ匪ㇾ民。

㊀ 牝羊なり ㊁ 大なる頭なり、瘠せたる時の狀をいふ ㊂ 大火心星のこと ㊃ 魚をとる設備の處即ちうへをいふ、星の影のみ見えて魚の影の見えざるをいふ ㊄ 食うて飢に充たすのみなるをいふ ㊅ 到底腹一杯食ふ餘地なきをいふ

何草不黄

是れ幽王の時、四夷交も侵し中國背反するを閔める詩也

何れの草か黄ならざらん、何れの日か行かざらん。何れの人か將いて、四方を經營せざらん。

㊀ 今は十月、草として黄ばみ枯れざるなきをいふ ㊁ 我は征人一日として行かざるなきをいふ ㊂ はかりいとなむこと即ち四方を治むるをいふ

○何れの草か玄からざらん、何れの人か矜ならざらん。哀しいかな我が征夫、獨り民に匪ずと爲す。

㊀ 憐なき者をいふ ㊁ 我々は征夫ばかりが人間にあらずと思ふをいふ、悲慘の極也

匪レ兕匪レ虎。率二
彼曠野一。哀我
征夫。朝夕不レ
暇。

有二芃者狐一。率二
彼幽草一。有二棧
之車一。行二彼周
道一。

○兕に匪ず、虎に匪ず、彼の曠野に率ふ。哀しいかな我が征夫、朝夕暇あらず。

㊀ 野牛なり　㊁ 何もなき廣野をいふ

○芃たる者狐あり、彼の幽草に率ふ。棧の車あり、彼の周道を行く。

㊀ 尾の長き貌　㊁ 草深き中に在るをいふ　㊂ 棧の車とは役夫のひく車也　㊃ 大道をいふ

都人士之什十篇四十三章

大雅　三

文王之什三之一

文王

是れ周公、文王の德を述べ、以て成王を戒めんと）作れる詩也

文王上に在り、於、天に昭なり。周は舊邦なりと雖も、其命維れ新なり。
有周顯ならざらんや。帝命時あらざらんや。文王陟り降りて、帝の左右に在り。

㊀ 文王沒すといへども神靈天に在りて長へに照臨するをいふ　㊁ 殷の時代の后稷より遠願するを以ていふ　㊂ 天命文王の身に及びて王業を成すをいふ　㊃ 有はつけ字なり周德の顯著なるをいふ　㊄ 上帝其時に應じて命を下すをいふ　㊅ 一たび升り一たび降りつねに上帝の左右にあるをいふ

○亹亹たる文王、令聞已まず。周に陳き錫へり、侯れ文王の孫子。文王の孫子は本支百世なり。凡そ周の士、顯ならざらんや亦世にす。

文王在レ上。於
昭二于天一。周雖二
舊邦一。其命維
新。有周不レ顯。
帝命不レ時。文
王陟降。在二帝
左右一。

亹亹文王。令
聞不レ已。陳二錫
哉周一。侯文王

孫子。文王孫子。本支百世。凡周之士。不ㇾ顯亦世。

世之不ㇾ顯。厥猶翼翼。思皇多士。生ニ此王國ニ。王國克生。維周之楨。濟濟多士。文王以寧。

穆穆文王。於緝熙敬止。假哉天命。有ニ商孫子ニ。商之孫子。其麗不ㇾ億。上帝既命。侯于ㇾ周服。侯服ニ于周ニ。天命靡ㇾ常。殷士膚敏。祼ニ將于京ニ。厥作ニ祼將ニ。常服黼冔。王之藎臣。無ㇾ念ニ爾祖ニ。

無ㇾ念ニ爾祖ニ。聿修ニ厥德ニ。永言配ㇾ命。自求ニ多福ニ。殷之未ㇾ喪ㇾ師。克配ニ上帝ニ。宜ㇾ鑒ニ于殷ニ。駿命不ㇾ易。

命之不ㇾ易。無ㇾ遏ニ爾躬ニ。宣ニ昭義問ニ。有虞ㇾ殷自ㇾ天。上天之

(一) 勉強して倦まざるをいふ (二) よきはまれなり (三) 其餘譯をしき施すこと (四) 本は宗子なり、支は末子なり、子々孫々まで天子と爲るをいふ (五) 男子の通稱卽ち周の臣を指す (六) 世世顯德を修め保ちて周と運命を共にするをいふ

○世之れ顯ならざらんや、厥の猶翼翼たり。思に皇しき多士、此王國に生ず。王國克く生ず。維れ周の楨なり。濟濟たる多士、文王以て寧し。

(一) うやうやしく敬める貌 (二) 美なる哉この衆多の士よと呼びかけたる也 (三) 文王の德厚く此の衆多の士を生ずるをいふ (四) 楨は幹にして牆の兩邊の木木なり、周家の重鎭と爲るをいふ (五) 德の盛なるさを形容す、朱註の如く多き貌と見ては少し物足らぬ感あり

○穆穆たる文王、於緝熙にして敬して止まる。假なる哉天命、商の孫子を有つ。商の孫子、其麗億のみならず。上帝既に命じて、侯れ周に服せしむ。

(一) 深遠なる貌 (二) 絕えず光明を持すること (三) 天命の大なるを讚美すること (四) 殷人の子孫を皆臣民とすること (五) 億は十萬なり、十萬に止まらざるをいふ

○侯れ周に服す、天命は常靡し。殷士膚敏なる、祼に祼將す。厥の祼將を作すは、常に黼冔を服す。王の藎臣、爾が祖を念ふこと無からんや。

(一) 善なれば則ち之に就き惡なれば則ち之を去るをいふ (二) 善美にして且つ敏捷なるをいふ (三) 周の京師なり (四) 來りて祭祀を助け鬱鬯の酒を地に灌ぐを謂ふ (五) 斧の形の繡ひつけられたる裳をいふ冔は殷の冠の名なり (六) 成王を指す (七) 忠愛の誠心を君に進むるものをいふ

○爾の祖を念ふこと無からんや、聿に厥德を修む。永く言に命に配し、自ら多福を求む。殷の未だ師を喪はざるや、克く上帝に配せり。宜しく殷に鑒みるべし、駿命易からず。

(一) 聿修と駿しての〻をまむと續くも亦可也 (二) 天命に配合すること (三) 師は衆也、民衆の離叛せざる以前を指す (四) 殷の歷史を手本とすること (五) 天の大命の下るは容易ならざるをいふ

○命の易からざる、爾の躬に遏つこと無かれ。義問を宣昭し、有た殷を鑒りて天に自れ、上天の載は、聲も無く臭も無し。文王に儀刑せば、萬邦孚を作さん。

載。無聲無臭。儀刑文王。萬邦作孚。

明明在下。赫赫在上。天難忱斯。不易維王。天位殷適。使不挾四方。

摯仲氏任。自彼殷商。來嫁于周。曰嬪于

㊀ 汝の身を以て天命を絕つことなかれと也 ㊁ 聞は聞也、譽き譽をいふ ㊂ ひろく天下に明にすること ㊃ 又と同じ ㊄ 殷の與り亡ぶ所以を考ふること ㊅ 天命に從つて行動すること ㊆ 聲の聞くべきものなきをいふ ㊇ 臭のかぐべきものなきをいふ、總べて之を言へば上天の事は人智の得て度るべからざるもと也 ㊈ 文王を模範として之に則とるをいふ ㊉ 萬邦の臣民は皆其感化を受けて一人として不信のものなかちんとす

大明

是れ亦周公、成王を戒むる詩也

明明として下に在り、赫赫として上に在り。天は忱とし難し、易からざるは維れ王なり。天位殷適、四方を挾たざらしむ。

㊀ 明德の下に明なるをいふ ㊁ 天命の上にかゞやくをいふ ㊂ 天命は常なく去就一定しがたきをいふ ㊃ 王者と爲る亦易からざるをいふ ㊄ 天子の位を指す ㊅ 殷の適嗣當(よつぎ)を指す ㊆ 四方を保有すること能はざらしむるをいふ

○摯の仲、氏は任、彼の殷商より、來つて周に嫁し、曰に京に嬪たり、乃ち王季と、維れ德を之れ行へり。大任身めることあり、此文王を生めり。

京。乃及二王季一。維德之行。大任有身。生二此文王一。

維此文王。小心翼翼。昭事二上帝一。聿懷二多福一。厥德不回。以受二方國一。天監在下。有命既集。文王初載。天作二之合一。在二洽之陽一。在二渭之涘一。文王嘉止。大邦有子。

大邦有子。俔二天之妹一。文定二厥祥一。親迎于渭。造舟爲梁。

㊀ 岡名 ㊁ 仲女の義 ㊂ 任氏の姓 ㊃ 商は殷の諸侯なり ㊄ 婦なり、王季の配と爲るをいふ ㊅ 大といふは之を尊びて也

○維れ此の文王、小心翼翼たり。昭に上帝に事へ、聿に多福を懷す。厥德回ならず、以て方國を受く。

㊀ 心を引き締めて放さざること ㊁ うやうやしく敬めるさま ㊂ 四方來附の國を受けて之を所有するをいふ

○天監下に在り、命あり既に集る。文王の初載、天之が合を作す。洽の陽に在り、渭の涘に在り。文王嘉す、大邦子あるを。

㊀ 天は常に下を照覽すること ㊁ 初年なり ㊂ 冥々の中に天は其配偶を定むるをいふ ㊃ 水の名、共に大姒の生れし處を指す ㊄ 幸の國を指す ㊅ 大姒の事なり

○大邦子あり、天の妹に俔ふ。文、厥祥を定め、渭に親迎す。舟を造りて梁と爲す、顯ならざらんや其光。

㊀ 禮又を以て吉日を定め、納幣の禮を成すを云ふ ㊁ 結婚の儀を慕ぐること ㊂ 舟橋を作ること、其の記念

不顯其光。
有命自天。命此文王于周。于京。纘女維莘。長子維行。篤生武王。保右命爾。燮伐大商。
殷商之旅。其會如林。矢于牧野。維予侯興。上帝臨女。無貳爾心。
牧野洋洋。檀車煌煌。駟騵彭彭。維師尚父。時維鷹揚。涼彼武王。肆伐大商。會朝清明。

事業也　四 其德の光輝ある、著しく人に目立つことを讃美したる也

○命あり天よりし、此文王に命ず。周に京に、女を纘ぐは維れ莘。長子維れ行き、篤く武王を生み、保右して爾に命じ、大商を燮伐す。

一 大任の事を繼ぐをいふ　二 長女なり　三 天、厚恵を垂るゝをいふ、前には文王を生じ、今又武王を生ずる是也　四 之を保護し之を補佐すること　五 天意に和して殷を伐つをいふ

○殷商の旅、其會まること林の如し。牧野に矢ねて、維れ予侯れ興れり。上帝女に臨めり、爾の心を貳にすること無かれ。

一 兵衆卽ち軍隊なり　二 立木の集合の如く密則を爲さざるをいふ　三 陣を立つること　四 周室の興起するをいふ

○牧野洋洋として、檀車煌煌に、駟騵彭彭たり。維れ師尚父、時れ維れ鷹揚し、彼の武王を涼く、大商を肆伐し、會朝清明なり。

一 四頭の腹白の栗毛馬をいふ　二 たくましく盛なる貌　三 大公望を指す　四 鷹の飛揚して壓たんとするさまをいふ　五 殷の宗の義をとりてたすくと謂す　六 ふるい出征す

清明。
緜緜瓜瓞。民之初生。自土沮漆。古公亶父。陶復陶穴。未有家室。
古公亶父。來朝走馬。率西水滸。至于岐下。爰及姜女。聿來胥宇。

意　一 會朝の朝なり　二 穢を除き穢を洗うて天下清明となるをいふ

緜

是れ亦周公、成王を戒むる詩也

緜緜たる瓜瓞あり。民の初めて生ずる、沮漆に土せし自りす。古公亶父、陶復陶穴し、未だ家室あらず。

一 繼えざる貌　二 うりをいふ、大を瓜といひ小を瓞といふ　三 周人なり　四 二水の名　五 文王の祖のはじめの號也、先公といふが如し、後に王號を追りて大王と稱す、亶父は名又は字なりといふ　六 陶はせと物をやくかまど也、其かまどを上下に重ねてつくる故に復といふ　七 はちあなを陶竈の如くにすること、豳の地は西戎に近くして寒し故に民俗の居る所此の如し　八 普通の家屋のこと

○古公亶父、來つて朝に馬を走らし、西水の滸に率ひ、岐の下に至る。爰に姜女と、聿に來りて胥宇る。

一 沮漆の事　二 山の名　三 齊の女、太王の妃なり　四 居を作りて住むこと

周原膴膴。堇荼如飴。爰始爰謀。爰契我龜。曰止曰時。築室于茲。

迺慰迺止。迺左迺右。迺疆迺理。迺宣迺畝。自西徂東。周爰執事。

乃召司空。乃召司徒。俾立室家。其繩則直。縮版以載。作廟翼翼。

○周原膴膴たり、堇荼飴の如し。爰に始め爰に謀り、爰に我龜を契く。曰く止まれ曰く時にと、室を茲に築く。

一 周の平原を指す　二 肥えてうるはしき貌　三 堇はすみれ、荼はにがな也　四 龜の甲をやきて吉凶をトすること　五 龜卜の辭にして此に止まれといふ意　六 同上

○迺ち慰んじ迺ち止き、迺ち左し迺ち右す。迺ち疆し迺ち理め、迺ち宣き迺ち畝にす。西より東に徂くまで、周く爰に事を執る。

一 人民を安定せしむること　二 都市を作りて公宮を中央に民居を東西につらぬること　三 田地の境界を立つること　四 田地を分配しうねみぞをつくること　五 西水より岐山までの間をいふ　六 もれなく事をとりをさむること

○乃ち司空を召し、乃ち司徒を召す、室家を立てしむ、其繩則ち直し。版を縮ねて以て載す、廟を作ること翼翼たり。

一 造作をつかさどる官人なり　二 夫役をつかさどる官人なり　三 墨繩にて檢地をして土地の高低を測り定むること　四 繩を以て板に結びつくるを縮ぬといふ、以て數すとは下より一板一板をはれば次節に版を引きあげ段段につぎて職せ上ぐることをいふ　五 嚴かに正しき貌

乏を捄ること陾陾たり、之を度ぐること薨薨たり。之を築くこと登登たり、削ること屢して、馮馮たり。百堵皆興り、鼛鼓も勝へず。

一 多き貌　二 運びくる土を板の中になげこむこと　三 大勢の聲也　四 杵を互につきかたむるとき相應ずる聲なり　五 鎛などに一壇の面をしば〳〵削りならす時の聲を形容していふ　六 是れ宮室を治むるをいふ　七 事を樂み功を勸むるときは大鼓の拍子も及びがたしと也

○迺ち皐門を立つ、皐門伉たることあり。迺ち應門を立つ、應門將將たり。迺ち冢土を立つ、戎醜の行く攸。

一 城郭の外門をいふ　二 高き貌　三 宮室の正門なり　四 嚴正なる貌　五 冢は大なり、土は社壇也、卽ち大社の事　六 戎は兵也、醜は衆也、國家もし軍旅の大事を起すときは先づ大社を祭りて後に出づる也故にいふ

○肆に厥慍を殄たず、亦厥問を隕さず。柞棫拔けて、行道兌り、混夷駾り

捄之陾陾。度之薨薨。築之登登。削屢馮馮。百堵皆興。鼛鼓弗勝。

迺立皐門。皐門有伉。迺立應門。應門將將。迺立冢土。戎醜攸行。

肆不殄厥慍。亦不隕厥問。柞棫拔矣。行

周原膴膴。堇荼如飴。爰始爰謀。爰契我龜。曰止曰時。築室于茲。

迺慰迺止。迺左迺右。迺疆迺理。迺宣迺畝。自西徂東。周爰執事。

乃召司空。乃召司徒。俾立室家。其繩則直。縮版以載。作廟翼翼。

○周原膴膴たり、堇荼飴の如し。爰に始め爰に謀り、爰に我龜を契く。曰く止まれ曰く時にと、室を茲に築く。

一 周の平原を指す　二 堇はすみれ、荼はにがな也　三 龜の甲をやきて吉凶を卜すること　四 龜卜の辭にして此に止まれといふ意　五 同上

○迺ち慰んじ迺ち止き、迺ち左し迺ち右す。迺ち疆し迺ち理め、迺ち宣き迺ち畝にす。西より東に徂くまで、周く爰に事を執る。

一 人民を安定せしむること　二 都市を作りて公宮を中央に民居を東西につちぬること　三 田地の境界を立つること　四 田地を分配しうねみぞをつくること　五 西水より岐山までの間をいふ　六 もれなく事をとりをさむること

○乃ち司空を召し、乃ち司徒を召す、室家を立てしむ、其繩則ち直し。版を縮ねて以て載す、廟を作ること翼翼たり。

一 造作をつかさどる官人なり　二 夫役をつかさどる官人なり　三 墨縄にて檢地をして土地の高低を測り定むること　四 繩を以て板に結びつくるを縮ねといふ、以て載すとは下より一板一板をはれば次第に板を引きあげ段段につぎて載せ上ぐることをいふ　五 嚴かに正しき貌

捄之陾陾。度之薨薨。築之登登。削屢馮馮。百堵皆興。鼛鼓弗勝。

迺立皐門。皐門有伉。迺立應門。應門將將。迺立冢土。戎醜攸行。

肆不殄厥愠。亦不陨厥問。柞棫拔矣。行

○之を捄ること陾陾たり、之を度ぐること薨薨たり。之を築くこと登登たり、削ること屢して、馮馮たり。百堵皆興り、鼛鼓も勝へず。

一 多き貌　二 運びくる土を板の中になげこむこと　三 大勢の聲也　四 杵を互につきかたむるとき相應ずる聲なり　五 鍬などにて壁の面をしばしば飾りならす時の聲を形容していふ　六 是れ宮室を治むるをいふ　七 事を樂み功を勤むるさまは大鼓の拍子も及びがたしと也

○迺ち皐門を立つ、皐門伉たることあり。迺ち應門を立つ、應門將將たり。迺ち冢土を立つ、戎醜の行く攸。

一 城郭の外門をいふ　二 高き貌　三 宮室の正門なり　四 嚴正なる貌　五 冢は大なり、土は社壇也、即ち大社の事　六 戎は兵也、醜は衆也、國家もし軍旅の大事を起すときは先づ大社を祭りて後に出づる也故にいふ

○肆に厥愠を殄たず、亦厥問を陨さず。柞棫拔けて、行道兌り、混夷駾りて、維れ其れ啄り。

道兌矣混夷駾矣。維其喙矣。

虞芮質厥成。文王蹶厥生。予曰有疏附。予曰有先後。予曰有奔奏。予曰有禦侮。

○混夷の怒を絶つこと能はざるをいふ　㊁ 興業のはまれを失はざるをいふ　㊂ くぬぎとならの木をいふ、此の樹木の間に道路をきり通すこと　㊃ 混夷のそばすがにげまどうて物につきあたりて到頭いきづきやすむをいふ

○虞芮、厥成を質し、文王厥生を蹶す。予曰く疏附あり、予曰く先後あり、予曰く奔奏あり、予曰く禦侮あり。

㊀ 二小國の名、成はたひらぎと訓じ是非の裁判を乞ふこと　㊁ 周室興起の勢力を引起せしをいふ　㊂ 詩人自ら稱して四等の臣の才德を一々擬議する也　㊃ 疎遠の民を率ゐて上に親み附かしむる臣をいふ　㊄ 先に立ち後に在り或は導びき或は進むる臣をいふ　㊅ 奏は走と同じ、君德を下に布き民をして奔走して命を聞かしむる臣をいふ　㊆ 敵の[illegible]ノきて勝を千里の外に決する臣をいふ

棫樸

是れ文王の德く人を官にする德を美めたる詩也

○芃芃たる棫樸、之を薪し之を烝す。濟濟たる辟王、左右之に趣く。

㊀ 樹木の盛に茂れるさま　㊁ たちの木の群立ちて根と枝のこみあひたるをいふ　㊂ 薪にして之を燎ひたきすること　㊃ かたまのうるはしきをいふ　㊄ 辟は君也、君王とは文王を指す　㊅ 右より左よりあちこちに從ふをいふ

○濟濟たる辟王、左右璋を奉ぐ。璋を奉ぐること峩峩たり、髦士の宜しき攸。

㊀ 左右に在る人主のたまをさゝげること　㊁ 盛に大なる貌　㊂ 衆にすぐれて秀でたる士をいふ

○淠たる彼の涇の舟、烝徒之を楫す。周王于に邁きて、六師之に及ぶ。

㊀ 舟のゆく貌　㊁ 衆徒といふが如し　㊂ 六軍の衆あとより追ひつくをいふ

○倬たる彼の雲漢、章を天に爲す。周王壽考、遐ぞ人を作さざらん。

㊀ 大なる貌　㊁ 雲間に見ゆる天の河なり　㊂ 文章が明かに天にあらはるゝをいふ　㊃ 人心を鼓舞すること

○追琢して其れ章あるは、金玉其れ相なればなり。勉勉たる我王、四方を綱紀す。

㊀ ほりものにすること　㊁ 相は體質なり　㊂ 勉めて已まざる貌　㊃ しぬくゝりして能く之を治むること

旱麓

是れ文王の德を詠じたる詩也

瞻二彼旱麓一。榛楛濟濟。豈弟君子。干レ祿豈弟。
瑟彼玉瓚。黃流在レ中。豈弟君子。福祿攸レ降。
鳶飛戾レ天。魚躍レ于レ淵。豈弟君子。遐不レ作レ人。
清酒既載。騂牡既備。以享以祀。以介二景福一。
瑟彼柞棫。民所レ燎矣。豈弟君子。神所レ勞矣。

經

彼の旱麓を瞻れば、榛楛濟濟たり。豈弟の君子、祿を干めて豈弟たり。

㊀ 山の名、其ふもと也　㊁ はしばみとくまやなぎと二木也　㊂ 多き貌　㊃ たのしくやすらけき貌

○瑟たる彼の玉瓚、黃流中に在り。豈弟の君子、福祿の降る攸。

㊀ きめのこまやかなる貌　㊁ 玉製の瓚なり瓚は鬱鬯の酒をもるもの也　㊂ 卽ち鬱鬯の酒也

○鳶飛んで天に戾り、魚、淵に躍る。豈弟の君子、遐ぞ人を作さざらんや。

○清酒既に載せ、騂牡既に備はり、以て享し以て祀り、以て景福を介にす。

㊀ 赤色の牲なり

○瑟たる彼の柞棫は、民の燎く所なり。豈弟の君子は、神の勞する所なり。

㊀ とぢの木とならの木となり　㊁ いたはりねぎらふをいふ

莫莫葛藟。施二于條枚一。豈弟君子。求レ福不レ回。

思齊大任。文王之母。思媚二周姜一。京室之婦。大姒嗣二徽音一。則百斯男。
惠二于宗公一。神罔二時怨一。神罔二時恫一。刑二于寡妻一。至二于兄弟一。以御二于家邦一。

○莫莫たる葛藟は、條枚に施へり。豈弟の君子は、福を求めて回ならず。

㊀ 盛なる貌　㊁ くヅかづちなり　㊂ えだとみきとをいふ

思齊

是れ亦文王の德德を歌へる者也

○思に齊める大任は、文王の母なり。思に周姜に媚まれて、京室の婦たり。大姒、徽音を嗣ぎて、則ち百斯の男あり。

㊀ おごそかにつゝしみ深きさま　㊁ 大王の妃大姜を指す　㊂ 王室なり　㊃ 文王の世なり　㊄ 美德ののこれるその名譽を受けつぐこと　㊅ 斯は附字にて其數の多きをいふ

○宗公に惠ひ、神、時れ怨むこと罔く、神、時れ恫むこと罔し。寡妻に刑り、兄弟に至り、以て家邦を御む。

㊀ 宗廟の先公なり　㊁ 有ること少き妻として賢夫人の義に辱くあり、又德寡き妻の義に辱くあり、人の妻を解すれは前說を當れりとし、己の妻を解するには後說を可なりとす、身に體儀を修めて妻の手本となり、そゝより

雝雝在宮。肅肅在廟。不顯亦臨。無射亦保。

肆戎疾不殄。烈假不瑕。不聞亦式。不諫亦入。

肆成人有德。小子有造。古之人無斁。譽髦斯士。

兄弟に及び遠に國家に及ぶ也

○雝雝として宮に在り、肅肅として廟に在り。顯ならざるも亦臨み、射ふこと無きも亦保る。

一 やはらかなる貌 二 ゐどそかにつゝしむ貌 三 祖廟の處を指す 四 我上に臨む者あるが如く身を慎むをいふ 五 厭惡する處を指す 六 常に守る所あるをいふ

○肆に、戎疾の殄えざるも、烈假瑕げず。聞かざるも亦式り、諫めざるも亦入る。

一 大疾なり 二 光臨の大なる少しもかけざるをいふ 三 未だ聞かざることも自ら法度あるをいふ 四 諫むるものなしといへどもおのづから善に入るをいふ

○肆に、成人德あり、小子造すあり。古の人斁ふなし、斯士を譽髦にす。

一 二十歳以上をいふ 二 童子なり 三 文王を指す 四 名譽ある俊才にしたつるをいふ

皇矣上帝。臨下有赫。監觀四方。求民之莫。維此二國。其政不獲。維彼四國。爰究爰度。上帝耆之。憎其式廓。乃眷西顧。此維與宅。

作之屏之。其菑其翳。修之平之。其灌其栵。啓之辟之。其檉其椐。攘

皇矣

是れ周德を美めたる詩也

皇なるかな、上帝、下に臨んで赫たることあり。四方を監觀して、民の莫を求む。維れ此の二國、其政獲ず。維れ彼の四國、爰に究め爰に度る。上帝之を耆し、其式廓を憎し、乃ち眷を西を顧みて、此れ維れ宅を與ふ。

一 盛德のかゞやくこと 二 人民の安定をもとむること 三 夏商二國なり 四 其道を失ふこと 五 四方の國を指す 六 諸說あり、意分明ならず今強ひて說けば上帝其意を取ること也 七 其規模を擴張して大に造す所あるとゝ欲するをいふ、憎は增と同義とす 八 岐周の地を指す 九 文王の居るべき宅地をいふ

○之を作し之を屏つ、其菑其翳。之を修め之を平ぐ、其灌其栵。之を啓き之を辟く、其檉其椐。之を攘ひ之を剔る、其檿其柘。帝、明德を選して、串夷路に載つ。天、厥配を立て、命を受くること既に固し。

之劉之。其檿其柘。帝遷明德。串夷載路。天立厥配。受命既固。

帝省其山。柞棫斯拔。松柏斯兌。帝作邦作對。自大伯王季。維此王季。因心則友。則友其兄。則篤其慶。載錫之光。受祿無喪。奄有四方。維此王季。帝度其心。貊其德音。其德克明。克類。克長克君。王此大邦。克順克比。比于文王。其德靡悔。既受帝祉。施于孫子。

帝謂文王。無然畔援。無然歆羨。誕先登于岸。密人不悉。敢距大邦。侵阮徂共。王赫斯怒。爰整其旅。以按徂旅。以篤于周祜。以對于天下。

依其在京。侵自阮疆。陟我

(一)之を掘り起すこと　(二)之を取り除くこと　(三)立ち枯れたる木とたふれし木とをいふ　(四)手を入れて疎密宜しきを得しむること　(五)むらだてる木と立ちならべる木とをいふ　(六)刈りこむこと　(七)むろの木とへみの木とをいふ　(八)切り排ふこと　(九)山桑と野桑とをいふ　(一〇)明德の人卽ち文王を指す　(一一)湯男の事多く選れ去るを路に載つといふ　(一二)文王の配卽ち大姒を指す　(一三)命を受くること堅固にして王業既に成るをいへる也

○帝、其山を省み、柞棫斯に拔け、松柏斯に兌る。帝、邦を作し對を作す、大伯王季よりす。維れ此王季、因心にして則ち友に、則ち其兄に友なり。則ち其慶を篤うし、載ち之に光を錫ふ。祿を受けて喪ふことなく、四方を奄有す。

(一)山林の間に道路の通ずるをいふ　(二)對は當也、此國に當るべきものを擇んで其君と爲すをいふ　(三)大王の長つ也　(四)大王の少子なり　(五)勉强を待たざること　(六)兄弟相親きをいふ　(七)大伯を指す　(八)周室の慶福を增進せしむること　(九)其兄に與ふるに德に讓るの光を以てせしをいふ　(一〇)天祿を得ること　(一一)惡のうちに天下を有するに至るをいふ

○維れ此の王季、帝、其心を度らしめ。其德音を貊にし、其德克く明なり。克く明に克く類ち、克く長じ克く君とす。此の大邦に王とし、克く順ひ克く比む。文王に比り、其德悔ゆることなし。既に帝祉を受けて、孫子に施す。

(一)物を度りて宜しきを得しむをいふ　(二)德のはまれを清靜ならしむること　(三)能く是非を察するをいふ　(四)能く善惡を分つをいふ　(五)教へて倦まざるをいふ　(六)信實必制をいふ　(七)整和能く服するをいふ　(八)上下相親むをいふ　(九)上帝の福をいふ

○帝、文王に謂ふ、然く畔援することなかれ。然く歆羨することなかれ。誕に先づ岸に登れ。密人恭しからず、敢へて大邦を距ぎ、阮を侵して共に徂く。王赫として斯に怒り、爰に其旅を整へ、以て徂く旅を按め、以て周の祜を篤うし、以て天下に對ふ。

(一)畔はもむく也、援はすくふ也、此を舍てゝ彼を取るをいふ　(二)うらやむこと　(三)道の極至にいたるをいふ　(四)密須氏を指す　(五)國の名　(六)同上　(七)周の師なり　(八)密軍の共に往く者を指す　(九)制止すること　(一〇)天下の人心に應ずるをいふ

○依として其れ京に在り、侵すこと阮の疆より。我が高岡に陟つて、我が陵

高岡。無レ矢二我陵。我阿。無レ飲二我泉。我池。度二其鮮原。居二岐之陽。在二渭之將。萬邦之方。下民之王。

帝謂二文王。予懷二明德。不レ大二聲色。不レ長二夏革。不レ識不レ知。順二帝之則。帝謂二文王。詢二爾仇方。同二爾兄弟。以三爾臨衝。以伐二崇墉。臨衝閑閑。崇墉言言。執レ訊連連。攸レ馘安安。是類是禡。是致是附。四方以無レ侮。臨衝茀茀。崇墉仡仡。是伐是肆。是絕是忽。四方以無レ拂。

經

に矢ぬることなし。我陵我阿、我泉に飲むこと無し。我泉我池、其鮮原を度り、岐の陽に在り、渭の將に在り。萬邦の方へる、下民の王なり。

㊀ 安んずる貌　㊁ 陣を立つること　㊂ 大なる陵（をか）なり　㊃ 善き平原の地をいふ　㊄ かたはらなり　㊅ 萬國の人心の歸向する所、即ち天下の大君を仰ぐ所なるをいふ

○帝、文王に謂ふ、予、明德を懷ふ。聲と色とを大にせず、夏と革とを長うせず、識らず知らず、帝の則に順ふ。帝、文王に謂ふ、爾の仇方を詢ひ、爾の兄弟と同じく、爾の鉤援と、爾の臨衝とを以て、以て崇墉を伐て。

㊀ 文王の明德也　㊁ 號令と威權とをいふ　㊂ 奇弱と輕革とをいふ　㊃ 上帝の法則即ち天理をいふ　㊄ 仇讎の國をいふ　㊅ 與國なり　㊆ 城にひかけ上るもの雲梯の如きをいふ　㊇ 臨車と衝車と也、前者は上に在りて下に臨み、後者は旁より衝突す皆攻城の具也　㊈ 崇國の城をいふ

○臨衝閑閑たり、崇墉言言たり。訊を執ふること連連たり、馘する攸安安たり。是に類し是に禡し、是に致し是に附けて、四方以て侮ること無し。臨衝茀茀たり、崇墉仡仡たり、是に伐ち是に肆ち、是に絕ち是に忽して、四方以て拂ること無し。

靈臺

是れ周民が文王の樂を樂しむことを述べたる者也

靈臺を經始す、之を經り之を營む。庶民之を攻め、日ならずして之を成す。經始亟にすること勿かれ。庶民子來す。

㊀ 文王の作る所なり　㊁ 大づもりをして建築を始めること　㊂ 地盤を測定し標を立て造營に取りかゝること　㊃ 一般の人民を指す　㊄ 十分力を盡して手固くこしらふること　㊅ 幾日もかゝらぬをいふ　㊆ 急ぐに及ばずと注意を與ふること　㊇ 人の子が我が父の事に赴くが如きをいふ

王在二靈囿一。麀鹿攸レ伏。麀鹿濯濯。白鳥翯翯。王在二靈沼一。於牣魚躍。

虡業維樅。賈鼓維鏞。於論二鼓鐘一。於樂二辟廱一。

於論二鼓鐘一。於樂二辟廱一。鼉鼓逢逢。矇瞍奏レ公。

○王、靈囿に在す、麀鹿の伏す攸。麀鹿濯濯たり、白鳥翯翯たり。王、靈沼に在す、於、牣ちて魚躍る。

㊀ 靈臺の下にある囿の名なり、囿とは鳥獸を囲ひふく所也 ㊁ 麀は牝鹿なり ㊂ 肥えうるはへる貌 ㊃ いさぎよく白貌 ㊄ 靈囿の中にある沼の名なり ㊅ 魚が沼一杯ふえて踊ね躍るをいふ

○虡業維れ樅、賈鼓維れ鏞。於、鼓鐘を論で、於、辟廱を樂む。

㊀ 木を兩旁にたて、樂器を懸くる者を虡といひ、其上の横木を樅といひ、樅の上に板をきざみて飾りとするを業といふ ㊁ 崇牙ともいひ樂器を懸る所に采色の飾あるものをいふ ㊂ 大鼓なり ㊃ 大鐘の名なり ㊄ 次第順序を正す ㊅ 文王の學宮の名

○於、鼓鐘を論で、於、辟廱を樂む。鼉鼓逢逢として、矇瞍公を奏む。

㊀ われに皮にて蔽りたる大鼓をいふ ㊁ 聲の相和するさま ㊂ 瞽者（めしひ）也、古は樂師は皆瞽者を以て之に當らしめたり ㊃ 樂の事を奏上するをいふ

下武

是れ武王の德を美めたる詩也

下武維周。世有二哲王一。三后在レ天。王配二于京一。

王配二于京一。世德作求。永言配レ命。成二王之孚一。

成二王之孚一。下土之式。永言孝思。孝思維則。

媚二茲一人一。應侯順德。永言孝思。昭哉嗣レ服。

○下武ける維れ周、世、哲王あり。三后天に在り、王、京に配す。

㊀ 下の義詳ならず蔽は以て後となして後人と釋き或は以て文の誤と爲して文王の釋くもし投人と釋けば下の繼續の意と見るべく又もし文王と釋けば下の武は武王の意と見るべし ㊁ 大王、王季、文王を指す ㊃ 武王を指す ㊄ 鎬京の事、王の德三后に配して鎬京に在りとの意

○王の京に配するは、世德作求すればなり。永く言に命に配す、王の孚を成す。

㊀ 三后代々の德を其身に引きたちて求め得たるが爲なりと也 ㊁ 天命に配合して天人一致となるわけ也 ㊂ 王者の信を天下に發揚するをいふ

○王の孚を成すは、下土之れ式る。永く言に孝を思ふ、孝を思ふ維れ則にす。

㊀ 天下の土地に居る人民は皆武王を手本とすること ㊁ 人民の武王を手本とするは其孝道に原づくなり、武王の孝道を以て手本として之に則るをいふ

○茲の一人を媚み、應ずるに侯れ順德をす。永く言に孝を思ふ、昭なる哉服を嗣ぐこと。

㊀ 武王を指す ㊁ 順德を以て天王の志に應ずるをいふ ㊂ 服は事也、先王の事を承け繼ぐの著明なるを賛美

昭茲來許。繩二其祖武一。於二萬斯年一。受二天之祜一。受二天之祜一。四方來賀。於二萬斯年一。不二遐有一佐。

文王有聲。遹駿有聲。遹求二厥寧一。遹觀二厥成一。文王烝哉。

文王受命。有二

する也

○昭なるかな來許、其祖武を繩がば、萬斯年に於て、天の祜を受けん。

㊀ 後世なり ㊁ 祖先の跡を繼ぐをいふ

○天の祜を受けて、四方來り賀せば、萬斯年に於て、遐ぞ佐あらざらん。

㊀ 胡賀の事

文王有聲

是れ文王命を受け武王之を繼ぐを述べたる詩也

文王聲あり、遹に駿に聲あり。遹に厥寧を求め、遹に厥成を觀る。文王は烝なる哉。

㊀ よきはまれをいふ ㊁ 人民の安寧なり ㊂ 其成功をいふ ㊃ 眞に大者なるかなと讃美する也

○文王命を受けて、此の武功あり。既に崇を伐つて、邑を豐に作る。文王は烝な

此武功一既伐二于崇一作二邑一于豐一。文王烝哉。

築レ城伊減。作レ豐伊匹。匪レ棘二其欲一。遹追來孝。王后烝哉。

王公伊濯。維豐之垣。四方攸同。王后維翰。王后烝哉。

豐水東注。維禹之績。四方攸同。皇王維辟。皇王烝哉。

る哉。

㊀ 國の名 ㊁ 都邑なり

○城を築きて伊れ減し、豐を作りて伊れ匹す。其欲を棘にするに匪ず、遹に追ひ來りて孝す。王后烝なる哉。

㊀ 城のはりみぞを以て限りとすること ㊁ 匹敵なり、つりあふをいふ ㊂ 終に其欲に從ふをいふ ㊃ 先王の德を追念して其孝心を行ふが爲なるをいふ

○王公伊れ濯たり、維れ豐の垣。四方の同る攸、王后維れ翰たり。王后は烝なる哉。

㊀ 王の事功をいふ ㊁ 著明なること ㊂ 垣の兩端の本末をいふ

○豐水東に注ぐ、維れ禹の績。四方の同る攸、皇王維れ辟たり。皇王は烝なる哉。

㊀ 天下を有つの號なり、武王を指す

鎬京辟廱。自西自東。自南自北。無思不服。皇王烝哉。

考卜維王。宅是鎬京。維龜正之。武王成之。武王烝哉。

豐水有芑。武王豈不仕。詒厥孫謀。以燕翼子。武王烝哉。

○鎬京辟廱、西より東より、南より北より、思うて服せざるは無し。皇王は烝なる哉。

㊀ 心服するをいふ

○卜を考ふるは維れ王、是の鎬京に宅る。維れ龜之を正め、武王之を成す。武王は烝なる哉。

㊀ 疑を決する爲に龜卜に問ふをいふ ㊁ 卜兆に吉を得て之を決定すること

○豐水に芑あり、武王豈に仕とせざらんや。厥孫謀を詒して、以て翼子を燕んず。武王は烝なる哉。

㊀ 草名、ちさと訓ず ㊁ 子孫世を治むる謀也 ㊂ 事を敬ゆる子卽ち成王を指す ㊃ 安なり、心を安んぜしむるをいふ

厥初生民。時維姜嫄。生民如何。克禋克祀。以弗無子。履帝武敏歆。攸介攸止。載震載夙。載生載育。時維后稷。

誕彌厥月。先

生民之什三之二

生民

是れ周公、后稷を嫄んで其天に配するを述べたる詩也

厥初め民を生む、時れ維れ姜嫄。民を生む如何ん、克く禋し克く祀し、以て子無きに弗へり。帝の武敏を履む、歆いて介なる攸止まる攸。載ち震み載ち夙み、載ち生み載ち育ふ、時れ維れ后稷なり。

㊀ 民は人なり周人を指す ㊁ 姜は姓、有邰氏の女なり、名に嫄、高辛氏の妃たり ㊂ 精潔を以て祭るをいふ ㊃ 久しく子なかりしを以て子有るやうにと祈り求むることをいふ ㊄ 上帝なり ㊅ 是麟の大指の跡をいふ ㊆ 心に震動する處あるをいふ ㊇ 野の大に師ひて休息すべき處を指す ㊈ 懷妊すること ㊉ 滿月にいたり屋どもりしてつゝしめるをいふ ㊊ 周の先祖の名

○誕に厥月を彌へて、先づ生れしは達の如し。坼せず副せず、蓄無く害なし。以

生如レ遺。不レ坼不レ副。無レ菑無レ害。以赫二厥靈一。上帝不レ寧。不レ康二禋祀一。居然生レ子。

誕寘二之隘巷一。牛羊腓二字之一。誕寘二之平林一。會レ伐二平林一。誕寘二之寒冰一。鳥覆二翼之一。鳥乃去矣。后稷呱矣。實覃實訏。厥聲載レ路。

誕實匍匐。克岐克嶷。以就二口食一。蓺二之荏菽一。荏菽旆旆。禾役穟穟。麻麥幪幪。瓜瓞唪唪。

誕后稷之穡。有二相之道一。茀二厥豐草一。種二之黃茂一。實方實苞。實種實褎。實發實秀。實堅實好。實穎實栗。即二有邰家室一。

誕降二嘉種一。維秬維秠。維穈維芑。恆二之秬秠。維穈維芑。恆二之秬秠。維穈維芑。恆二之秬秠。是穫之。是任之。是負之。以歸肇祀。

て厥靈を赫はす。上帝寧んぜざらんや。禋祀を康んぜざらんや、居然として子を生めり。

㊀ 或はあはいにと訓ず ㊁ 懷姙十ケ月の期を終ると ㊂ 小羊なり、羊の生るゝが如く其産の易きをいへる也 ㊃ 坼も副も裂の義なり（母體を傷けざるを云ふ ㊄ 育は災なり前者の意を反復するまでなり ㊅ 靈異（ふしぎ）を顯すをいふ ㊆ 心を安んずるをいふ ㊇ 樂んで受くるをいふ ㊈ 難じつと居ながら安閑として子を生めるをいふ

○誕に之を隘巷に寘く、牛羊之を腓字す。誕に之を平林に寘く、平林を伐るに會ふ。誕に之を寒冰に寘く、鳥、之を覆翼す。鳥乃ち去る。后稷呱く。實に覃く實に訏に、厥聲路に載つ。

㊀ せまき小路をいふ ㊁ 棄つること ㊂ かばうて育てること ㊃ 平地の森林なり ㊄ 羽がひにすると、片羽を下に片羽を上にしてそだつるをいふ ㊅ 成長して大きくなること ㊆ 其聲の大なるを形容する也

○誕に實に匍匐す、克く岐克く嶷。以て口食に就き、之が荏菽を蓺う。荏菽旆旆として、禾役穟穟たり。麻麥幪幪として、瓜瓞唪唪たり。

㊀ はらばひゆくこと ㊁ 形體の大にして氣象の秀でたる狀なり ㊂ 自ら能く食すること ㊃ 大豆なり ㊄ 枝のたちあがる樣をいふ ㊅ 黍稷稻粱をすべて禾といふ、役は列なり列なり續くをいふ ㊆ 苗のうるはしき貌 ㊇ 實の多き貌 ㊈ みつしりと茂り合ふ形容 ㊉ うり也 ㊊ 實の多き貌

○誕に后稷の穡、相くるの道あり。厥の豐草を茀めて、之に黃茂を種う。實に方實に苞、實に種實に褎。實に發實に秀、實に堅實に好。實に穎實に栗、有邰の家室に即く。

㊀ 稼穡を掌るをいふ ㊁ 人力の助を盡すこと或は天の助けを得ると爲す ㊂ しげれる草を切り掃ふこと ㊃ 嘉穀なり ㊄ 種を水にひたしてもみの稍々ふくれたるをいふ ㊅ 芽のふかんとして未だ甲をわらざること ㊆ 甲既にわれて莠を出づるをいふ ㊇ 其苗のやうやくのぶをいふ ㊈ 苗の十分に成長するをいふ ㊉ 穗の出づるをいふ ㊊ 實のかたまるをいふ ㊋ 味のうまくなるをいふ ㊌ 穗の次にして下に垂れ傾くをいふ ㊍ 麻の よく揃ひしひなのなきをいふ ㊎ 有は附字、邰の國をいふ、姜嫄の本國なり、后稷を此に封じて家室をたてゝ居らしむるをいふ

○誕に嘉種を降す、維れ秬維れ秠。維れ穈維れ芑、之が秬秠を恆くし、是に穫り是に畝にし、之が穈芑を恆くし、是に任ひ是に負ひ、以て歸り肇めて祀る。

秬。是穫是畝。恆之秬秠。是穮是褒。以歸肇祀。

誕我祀如何。或舂或揄。或簸或蹂。釋之叟叟。烝之浮浮。載謀載惟。取蕭祭脂。取羝以軷。載燔載烈。以興嗣歲。

卬盛于豆。于豆于登。其香始升。上帝居歆。胡臭亶聞。后稷肇祀。庶無罪悔。以迄于今。

敦彼行葦。牛羊勿踐履。方苞方體。維葉泥泥。戚戚兄弟。莫遠具爾。或肆之筵。或授之几。

肆筵設席。授几有緝御。或獻或酢。洗爵奠斝。醓醢以薦。或燔或炙。

(一)黑きびなり (二)一つのさやに二つの實のあることゆゑに多きをいふ (三)あはの苗なり (四)あはの白きものなり (五)あまねく蒔きつくること (六)既に穀したる後は之を刈り取りて之をうねの上にあくること (七)肩に荷ひ背に負ふこと (八)后稷始めて國主となりて祭祀を行ふをいふ

○誕に我祀如何ん、或は舂つき或は揄し、或は簸ひ或は蹂む。之を釋くこと叟叟たり、之を烝すこと浮浮たり。載ち謀り載ち惟ひ、蕭を取り脂を祭り、羝を取りて以て軷す。載ち燔き載ち烈りて、以て歳を興嗣す。

(一)白よりかき出すをいふ (二)糠(ぬか)をふるふことをいふ (三)稻などをふみて殼をおとすこと (四)米を水にてとぐこと (五)米をとぐ聲也 (六)炊くこと (七)ぶつ〳〵と吹き出づる形容 (八)其祭祀の日取又は其儀を行ふ人などをはかること (九)慎戒して種々準備をとゝのふること (十)道祖神を祭ること (十一)肉を火につけてやくこと (十二)胙ざしにしてやくこと (十三)以上の如くにして來年の祭を興して本年の祭を嗣がんとする也

○卬、豆に盛る、豆に登に、其香始めて升り、上帝居んじ歆く。胡ぞ臭の亶に聞こえたる時なる、后稷肇めて祀りてより、庶はくは罪悔なからんと、以て今に迄る。

(一)祭器の名 (二)供物の氣を食ふこと (三)臭は供物の發する氣なり、卽ち祭祀の時を謂るをいふ也 (四)罪は天にとがめらるゝをいひ、悔はみづから我心にくゆるをいふ

行葦

是れ祭畢りて父兄會飲を爲する詩也。或は云ふ、此れ周家の忠厚なる、仁恕木に及ぶを詠ずる者也

敦たる彼の行葦、牛羊踐み履むこと勿し。方に苞し方に體す、維れ葉泥泥たり。戚戚たる兄弟、遠かること莫うして具に爾し、或は之に筵を肆ね、或は之に几を授けん。

(一)あつまれる形容 (二)道の傍に生ずるあしの事 (三)芽ぐみていまだひらかざるさまをいふ (四)既に萠を出でゝ形を成せるをいふ (五)やはらかにうるはへる貌 (六)したしきさま (七)爾と同義、近の義 (八)之を座せしむるをいふ (九)之を倚りかゝらしむるをいふ、此の如くにして兄弟親愛の情を發露する也

○筵を肆ね、席を設け、几を授くるに緝御あり。或は獻り或は酢い、爵を洗ひ斝を奠く。醓醢以て薦め、或は燔き或は炙り、嘉殽脾臄、或は歌ひ或は咢うつ。

嘉殽脾臠。或歌或咢。

敦弓既堅。四鍭既鈞。舍矢既均。序賓以賢。敦弓既句。既挾二四鍭。四鍑如樹。序賓以不侮。

曾孫維主。酒醴維醹。酌以大斗。以新二黃耇。黃耇台背。以引以翼。壽考維祺。以介二景福。

㊀是等の役をつぎからつぎへと漏を缺かざる侍者其人あるをいふ　㊁賓主杯をさしかへしすること　㊂さす前に之をあらひ、受けて杯を下におくこと　㊃脾はよこし也、臠は口びるの肉也　㊄鑑はしゝびしはの事、俗にいふ鹽辛也、醢は鹽辛の汁多き者也

○敦弓既に堅く、四鍭既に鈞し。矢を舍つこと既に均しく、賓を序づるに賢を以てす。敦弓既に句ち、既に四鍭を挾めり、四鍑樹てるが如く、賓を序づるに侮らざるを以てす。

㊀えがきて飾れる弓の事　㊁四つの矢をいふ　㊂能く中てたるものを賢者として賓の上位に居うるをいふ　㊃矢頃にひき滿つること

○曾孫維れ主、酒醴維れ醹し。酌むに大斗を以てし、以て黃耇を祈む。黃耇台背にして、以て引き以て翼く。壽考にして維れ祺く、以て景福を介にす。

㊀祭に主たる人の稱號なり　㊁甘酒の濃厚なるもの　㊂大なる柄杓也　㊃黃髮の老人となるまで壽命を保たんことを求むる也　㊄台は鮐、ふぐの事、背の色のふぐの皮のまだらげたるが如くなるをいふ　㊅詩より引いてたすくること　㊆またよりかばひてたすくる事

既醉以酒。既飽以德。君子萬年。介二爾景福。

既醉以酒。爾殽既將。君子萬年。介二爾昭明。

昭明有融。高朗令終。令終有俶。公尸嘉

既醉

是れ父兄、行祭に答ふる詩也

○既に醉ふに酒を以てし、既に飽くに德を以てす。君子は萬年、爾の景福を介にせん。

㊀酒の驅走にて既に醉ひたるのみならず、恩恵恩澤にまで既に十分に飽滿せりとなり　㊁王を指す　㊂王を指す

○既に醉ふに酒を以てし、爾の殽既に將ふ。君子は萬年、爾の昭明を介にせん。

㊀牲體をいふ　㊁さゝげもちて進むること　㊂光大といふほどの意是は德にかけて說くべし

○昭明融なることあり。高朗にして終を令くす。終を令くするに俶あり、公尸嘉告す。

告。

其告維何。籩豆靜嘉。朋友攸攝。攝以威儀。

威儀孔時。君子有孝子。孝子不匱。永錫爾類。

其類維何。室家之壼。君子萬年。永錫祚胤。

其胤維何。天被爾祿。君子萬年。景命有僕。

其僕維何。釐爾女士。釐爾女士。從以孫子。

鳧鷖在涇。公尸來燕來寧。爾酒既清。爾殽既馨。公尸燕飲。福祿來成。

鳧鷖在沙。公尸來燕來宜。爾酒既多。爾殽既嘉。公尸燕飲。福祿來爲。

○其告ぐる維れ何ぞ、籩豆靜嘉なり。朋友の攝くる攸、攝くるに威儀を以てす。

㊀ 明の盛なるをいふ ㊁ 高く朗(はがらか)なるをいふ、是も亦德にかけて說くべし ㊂ 永久に其禮を保つこと ㊃ 其始も亦善くすべきをいふ ㊄ 君の尸(かたしろ)をいふ ㊅ よく人に告ぐること

○威儀孔だ時なり、君子、孝子あり。孝子匱しからず、永く爾に類を錫ふ。

㊀ 清潔にしてうるはしきをいふ ㊁ 賓客の祭を助くる者を指す ㊂ 皆儀容正しく神の意にかなふをいふ ㊃ 時の宜しきに適ふをいふ ㊄ 主人の嗣子を指す、嗣子が祭祀の終りに供物をあぐることをいふ ㊅ 誠のつきざるをいふ ㊆ 類は善なり即ち幸福を謂ふ、或は族類の義と爲し、感化の力能く孝子の族類を天下に廣わる

○其類維れ何ぞ、室家の壼なり。君子は萬年、永く祚胤を錫ふ。

㊀ 宮中の巷をいふ、深邃にして嚴肅なる義也 ㊁ 福祿と子孫と也

○其胤維れ何ぞ、天、爾に祿を被らしむ。君子は萬年、景命僕くことあり。

㊀ 子孫あらしめんとするには先づ天祿を汝に與ふべしと也 ㊁ 大命なり天の大命を云ふ、天の大命が附屬して離れざる義とす

○其僕維れ何ぞ、爾に女士を釐ふ。爾に女士を釐へて、從ふに孫子を以てす。

㊀ 女子にして士の行あるものを指す謙辭を生じて之が妃たちしむるをいふ也 ㊁ 又之に附くるに子孫を以てすといふ意

鳧鷖

是れ祭の明日、尸を賓する燕歌也

鳧鷖涇に在り、公尸來り燕し來り寧んず。爾が酒既に清く、爾が殽既に馨し。公尸燕飲し、福祿來り成す。

㊀ けりとかもめとをいふ ㊁ 君のかたしろと爲れるもの ㊂ 宴會の事なり ㊃ 福祿あのづかち來りて圓滿に成就するをいふ

○鳧鷖沙に在り、公尸來り燕し來り宜し。爾が酒既に多く、爾が殽既に嘉し。公尸燕飲し、福祿來り爲く。

㊀ 昨日の尸を今日の賓として甚だ相ひかなへるをいふ ㊁ 主人を助くるをいふ

鳧鷖在渚。公尸來燕來處。爾酒既清。爾殽伊脯。公尸燕飲。福祿來下。

鳧鷖在潀。公尸來燕來宗。既燕于宗。福祿攸降。公尸燕飲。福祿來崇。

鳧鷖在亹。公尸來止熏熏。旨酒欣欣。燔炙芬芬。公尸燕飲。無有後艱。

○鳧鷖渚に在り、公尸來り燕じ來り處る。爾が酒既に清み、爾が殽伊れ脯。公尸燕飲し、福祿來り下る。

一 水口の高き處をいふ　二 安んずる意　三 渡すこと　四 肉をさきてほしたるもの　五 天より降るをいふ

○鳧鷖潀に在り、公尸來り燕し來り宗し。既に宗に燕せり、福祿の降る攸。公尸燕飲し、福祿來り崇し。

一 水の流合ふ處なり　二 尸を賓にして之を祭る意　三 宗廟の事　四 いやましにつもること

○鳧鷖亹に在り、公尸來り止りて熏熏たり。旨酒欣欣たり、燔炙芬芬たる。公尸燕飲し、後艱あること無し。

一 本、谷間を流れて兩岸立ちて門の如き處をいふ　二 やはらぎ悅べる貌　三 酒のうまくして樂しき形容　四 牲體のやきあぶりたるもの　五 かんばしき臭のすること　六 後々まで何等のなやみなきをいふ

假樂

假樂君子。顯顯令德。宜民宜人。受祿于天。保右命之。自天申之。

干祿百福。子孫千億。穆穆皇皇。宜君宜王。不愆不忘。率由舊章。

威儀抑抑。德音秩秩。無怨無惡。率由羣匹。受福無疆。四方之綱。之子之光。之子之命。不解于位。民之攸塈。

是れ公尸の鳧鷖に答ふる詩也。或は云ふ、是れ成王を戒むる君恨と

假樂の君子、顯顯たる令德。民に宜しく人に宜しく、祿を天に受く。保右して之に命じ、天より之を申ぬ。

一 假は嘉と同じ、うるはしく樂しめるさまをいふ　二 王を指す　三 いちじるしき美德の事　四 庶民を指す　五 在位の者を指す　六 安全に之を輔佐すること　七 天命じて天子と爲すをいふ　八 くりかへし打ち重ねて已まざるをいふ

○祿を干めて百福、子孫千億なり。穆穆皇皇として、君に宜しく王に宜し。愆たず忘れず、舊章に率ひ由る。

一 敬しめる貌　二 天子を指す　三 大なる貌諸侯を指す　四 羣子は天子と爲り、庶子は諸侯と爲るをいふ　五 先王の嘉樂刑政をいふ

○威儀抑抑たり、德音秩秩たり、怨み無く惡み無く、羣匹に率ひ由る。福を受くること疆り無し、四方の綱なり。

匹。受レ福無レ疆。四方之綱。

之綱之紀。燕及二朋友一。百辟卿士。媚二于天子一。不レ解二于位一。民之攸レ塈。

篤公劉。匪レ居匪レ康。迺場迺疆。迺積迺倉。迺裹二餱糧一。于レ橐于レ囊。思二輯

㊀ きびしく透間のなき網 ㊁ 常ありてかはらざる網 ㊂ 匹は類也、群類とは衆賢をいふ ㊃ 四方の人民を統べをさむる大綱をいふ

○之れ綱之れ紀、燕朋友に及ぶ。百辟卿士、天子を媚み、位に解らずして、民の塈ふ攸たれ。

㊄ 人君四方の綱紀と爲るをいふ ㊅ 嬖幸の事 ㊆ 諸臣と共に之を樂しむをいふ ㊇ 百官也 ㊈ 位に在りてよく其職を奉行すること ㊉ 上勞すれば下逸するを常とす、人民等のたのみて休息する所の君となれとこひねがふ章也

公劉

是れ召の康公が公劉の事を詠じて以て成王を戒めたる詩也

篤いかな公劉、居んぜず康んぜず。迺ち場し迺ち疆し、迺ち積し迺ち倉し、迺ち餱糧を裹む、槖に囊に。輯げて用つて光にせんことを思ひ、弓矢斯に張り。干戈戚揚、爰に方めて行を啓く。

用光一弓矢斯張。干戈戚揚。爰方啓レ行。

篤公劉。于胥二斯原一。既庶既繁。既順迺宜。而無二永嘆一。陟則在レ巘。復降在レ原。何以舟レ之。維玉及瑤。鞞琫容刀。

篤公劉。逝二彼百泉一。瞻二彼溥原一。迺陟二南岡一。

㊀ 民を愛すること篤き人よと公劉を賞したる也 ㊁ 后稷の曾孫也、公は號劉は名、一說に公は爵なりと、其說にも歟說あり ㊂ 安居せざること ㊃ 安逸せざること ㊄ 場も疆も田地の境なり農作に心を用ふるをいふ ㊅ そとつみにも倉の中にも糧食の貯蓄あるをいふ ㊆ 槖はしいひ也、糧は熟りたる穀物なり ㊇ ふくろの事、底なきを槖といひ、ふくろあるを囊といふ ㊈ やはちぎ綱しましわこと ㊉ 國威をかゞやかすこと ㊊ 干はほこなり、戈はえだあるほこなり、戚はをのなり、揚はまさかり也。皆武具也 ㊋ 道をひらき出でて國の地にうつりゆくをいふ

○篤いかな公劉、于に斯原を胥る。既に庶に既に繁に、既に順んじ迺ち宜く、而して永く嘆くことなし。陟れば則ち巘に在り、復降りて原に在り。何を以てか之を舟ぶる。維れ玉及び瑤と、鞞琫容刀と。

㊌ 國の平原なり ㊍ 人數の繁く多きをいふ ㊎ おとなしく心を落ちつけ、こゝかしこにゝの居ずわるをいふ ㊏ 山頂なり ㊐ 帶ぶることなり ㊑ 玉なり卽ち佩玉をいふ ㊒ 鞞は刀のさや也、琫はさや口のかざり也、容刀は佩劍也、儀容の爲に佩ぶる故にしか呼ぶ也

○篤いかな公劉、彼の百泉に逝いて、彼の溥原を瞻る。迺ち南岡に陟り、乃ち京を觀る。京師の野に、時に處るべきに處り、時に旅を廬し、時に言ふべきを

乃觀于京。京師之野。于時處處。于時廬旅。于時言言。于時語語。

篤公劉。于京斯依。蹌蹌濟濟。俾筵俾几。既登乃依。乃造其曹。執豕于牢。酌之用匏。食之飲之。君之宗之。

篤公劉。既溥既長。既景迺岡。相其陰陽。觀其流泉。其軍三單。度其隰原。徹田爲糧。度其夕陽。豳居允荒。

言ひ、時に語るべきを語る。

㊀ 多くの川流を檢分するをいふ ㊁ 廣大なる原野を檢分するをいふ ㊂ 高き岡なり ㊃ 居室を作りて處らをいふ ㊄ 蜃辰をやどらしむるをいふ

○篤いかな公劉、京に斯れ依る。(一)蹌蹌濟濟として、筵せしめ几せしむ。既に登り乃に依り、乃ち其曹に造る。(二)豕を牢に執へ、之を酌むに匏を用ひ、之に食ましめ之に飲ましめ、之を君とし之を宗とす。(七)

㊀ よりたのみ、心を安んじて住居すること ㊁ 群臣の威儀のとゝのへるさまをいふ ㊂ 筵にむしろ也、几は ものしまづき也 ㊃ 牛羊を牧する處をいふ ㊄ をりの事 ㊅ ひさごを酒酌む用にすること ㊆ 族人之を尊んで主となすをいふ

○篤いかな公劉、既に溥く既に長し、既に景し迺ち岡し、其陰陽を相、其流泉を觀る。其軍三單、其隰原を度る。(七)田を徹し糧と爲し、其夕陽を度りて、豳に荒なり。(一〇)

㊀ 開墾の田地の廣く且つ長きをいふ ㊁ かどを割りて方角を定むること ㊂ 高きに登りて地形を見渡すをいふ ㊃ 土地の向背盛衰の模樣を觀ること ㊄ 灌漑に用ふべき流水の利をしらべること ㊅ 丁年の男子を以て三軍だけの組織を立つること ㊆ 高地と低地とを測量すること ㊇ 一井の田を九百畝とす、八家、各百畝を私用し、力を通じて公田百畝を作る是を徹法と曰ふ ㊈ 山の西手を度りて之を盛むるをいふ ㊉ 豳人の居益々大なるをいふ

○篤いかな公劉、豳に斯れ館す。渭を涉りて亂を爲り、厲を取り鍛を取る。基を止めて迺ち理め、爰に衆く爰に有り。其皇澗を夾み、其過澗に遡る。(一〇)止旅迺ち密に、芮鞫に之れ即かしむ。(一一)

㊀ やかたなり、居室を作ること ㊁ 川の名 ㊂ 河流を橫ぎる渡し舟をいふ ㊃ 厲は砥石(といし)なり、鍛は鐵なり ㊄ 新都の基礎既に定まること ㊅ 田野を整理すること ㊆ 人多く財足るをいふ ㊇ 澗の名 ㊈ 澗の名、民居の二澗の兩岸或は上流まで已及ぶをいふ ㊉ 居住の民衆いよ〳〵綱密なるをいふ ㊊ 芮水の外にまで推しひろげるをいふ

泂酌

是れ召の康公、成王を戒むる詩也

觀其流泉。其軍三單。度其隰原。徹田爲糧。度其夕陽。豳居允荒。

篤公劉。于豳斯館。涉渭爲亂。取厲取鍛。止基迺理。爰衆爰有。夾其皇澗。遡其過澗。止旅迺密。芮鞫之即。

洞酌二彼行潦一。挹レ彼注レ玆。可二以饎饋一。豈弟君子。民之父母。

洞酌二彼行潦一。挹レ彼注レ玆。可二以濯レ罍一。豈弟君子。民之攸レ歸。

洞酌二彼行潦一。挹レ彼注レ玆。可二以濯漑一。豈弟君子。民之攸レ塈。

洞く彼の行潦を酌み、彼に挹んで玆に注ぎ、以て饎饋とすべし。豈弟の君子は、民の父母なり。

㊀ 道に流るゝ雨水なり ㊁ 大器の中に酌み入れてすみたるものを又くんで之を小器の中につぎこむをいふ ㊂ 鬼神を祭り王公に進むべきをいふ、皆はむしたる米に水をそゝぎて再びふむをいふ饋とは酒食の事也 ㊃ 樂しくやすらかなる貌

○洞く彼の行潦を酌み、彼に挹み玆に注ぎ、以て罍を濯ぐ可し。豈弟の君子は、民の歸する攸なり。

㊀ 酒の樽なり ㊁ 歸衣備服するをいふ

○洞く彼の行潦を酌み、彼を挹み玆に注ぎ、以て濯漑すべし。豈弟の君子は、民の塈ふ攸なり。

㊀ そゝぎかけて洗ふこと ㊁ 人民のよりたのみて休息とする所をいふ

卷阿

有二卷者阿一。鳳凰自レ南。豈弟君子。來游來歌。以矢二其音一。

伴奐爾游矣。優游爾休矣。豈弟君子。俾下爾彌二爾性一。似二先公一酋上矣。

爾土宇昄章。亦孔之厚矣。豈弟君子。俾下爾彌二爾性一。百神爾主上矣。

掲れ亦召康公が成王を戒むる詩也

卷たる者阿あり、鳳凰南より。豈弟の君子、來り游び來り歌ひ、以て其音を矢ぶ。

㊀ まがりたる大岡をいふ ㊁ 鳳のこと ㊂ 王を指す ㊃ 聲音をのべつちねて歌ひ以て王の意を感發せんとするをいふ

○伴奐として爾游び、優游として爾休ふ。豈弟の君子、爾をして爾の性を彌ふるまで、先公に似て酋らしめん。

㊀ 優游閑暇の意、ゆつたりとひまある貌 ㊁ 生命なり ㊂ 先君の始を善くして終を善くしたるが如くなちしめんと也

○爾が土宇昄に章に、亦孔だ厚し。豈弟の君子、爾をして爾の性を彌ふるまで、百神爾の主たらしめん。

㊀ 猶天下といふが如し、大に明記厚しといふは版圖の廣大を意味する也 ㊁ 百神其自身の主となちしむるをい

上、天子は百神の依り主とする所なればなり

○爾、命を受くること長し。(一)茀祿爾に康し。豈弟の君子、爾をして爾の性を彌ふるまで、純嘏爾に常ならしめん。

㊀ 福なり ㊁ 大福なり

爾受レ命長矣。茀祿爾康矣。豈弟君子。俾下爾彌二爾性一。純嘏爾常上矣。

○馮あり翼あり、孝あり(二)徳あり、以て(三)ち(四)き以て翼く。豈弟の君子、四方則と爲す。

㊀ たよりとなるべき者をいふ ㊁ たすけとなるべき者をいふ ㊂ 能く親に事ふる者をいふ ㊃ 行の善なるものをいふ ㊄ 前より之を導びく也 ㊅ 左右より之を助くる也

有レ馮有レ翼。有レ孝有レ德。以引以翼。豈弟君子。四方爲レ則。

○顒顒卬卬として、圭の如く璋の如く、令聞令望あり。豈弟の君子、四方綱と爲す。

㊀ 尊嚴なる貌、一說に卬卬を盛なる貌とす ㊁ 美なる貌

顒顒卬卬。如レ圭如レ璋。令聞令望。豈弟君子。四方爲レ綱。

○鳳凰(一)于に飛ぶ、翽翽たる其羽。亦(二)爰止に集る、藹藹として王、吉士(三)多し、維れ君子の使、天子に媚まる。

㊀ 鷖鳥なり、雌を鳳といひ雄を凰といふ ㊁ 飛ぶ時の羽の音をいふ ㊂ 其の止まる處に集まること ㊃ 衆多なる貌 ㊄ 美士なり ㊅ 天子の使ふ所なるをいふ ㊆ 天子の寵愛を蒙るをいふ

鳳凰于飛。翽翽其羽。亦爰止。藹藹王多吉士。維君子使。媚于天子。

○鳳凰(一)于に飛ぶ、翽翽たる其羽。亦天に傳る。藹藹として王、吉人多し。維れ君子の命、庶人に媚まる。

㊀ 天子の命令して使ふ所なるをいふ ㊁ 一般の人民に親愛せらるゝをいふ

鳳凰于飛。翽翽其羽。亦傳于天。藹藹王多吉人。維君子命。媚于庶人。

○鳳凰鳴く、彼の高岡に于いてす。梧桐生ず、彼の朝陽に于いてす。(一)菶菶萋萋たり、雝雝喈喈たり。

㊀ 山の東を謂ふ ㊁ 梧桐の盛にしげれるさまをいふ ㊂ 鳳凰の聲を合せてやはらかに鳴くをいふ、蓋し君臣遭遇の盛を詠ぜるもの也

鳳凰鳴矣。于彼高岡。梧桐生矣。于彼朝陽。菶菶萋萋。雝雝喈喈。

○君子の車、既に庶く且つ多し。君子の馬、既に閑ひ且つ馳す。(一)詩を矢ぶること

君子之車。既

庶且多。君子之馬。既閑且馳。矢レ詩不レ多。維以遂歌。

民亦勞止。汔可二小康一。惠二此中國一。以綏二四方一。無レ縱二詭隨一。以謹二無良一。式遏二寇虐一。憯不レ畏レ明。柔レ遠能レ邇。以定二我王一。

多からざれども、維れ以て遂に歌ふ。

㊀ 賢者の既に多しといへども猶賢者あるを免れず宜しくこの車馬を以てあまねく、求むべしとの意を含む ㊁ 詩の辭をたらざることの多からず我意の十分に盡さゞるものあるをいふ

民勞

是れ同列相戒むる詞也。或は云ふ、此れ召の穆公、厲王を刺る者也と

民も亦勞す、汔んど小康すべし。此の中國を惠み、以て四方を綏んぜよ。詭隨を縱すこと無く、以て無良を謹しめよ。式つて寇虐して、憯て明を畏れざるを遏めよ。遠を柔んじ邇を能くして、以て我王を定めよ。

㊀ 疲勞すること ㊁ 一時的平和をいふ ㊂ 京師を指す ㊃ 諸侯を指す ㊄ 是非を顧みずして妄りに人に隨ふこと ㊅ 不善と同じ ㊆ 人を敵として暴虐にふるまふこと ㊇ 天の明命を畏れざるものをいふ ㊈ 遠方のものは之をなづけ近方のものは之を圍ちすこと ㊉ 以て王室をして萬古不動の地に立たしめんと願ひ求むる也

民亦勞止。汔可二小休一。惠二此中國一。以爲二民逑一。無レ縱二詭隨一。以謹二憯怓一。式遏二寇虐一。無レ俾二民憂一。無レ寒二爾勞一。以爲二王休一。

民亦勞止。汔可二小息一。惠二此京師一。以綏二四國一。無レ縱二詭隨一。以謹二罔極一。式遏二寇虐一。無レ俾レ作レ慝。敬二慎威儀一。以近二有德一。

民亦勞止。汔可二小惕一。惠二此中國一。俾二民憂

○民も亦勞す、汔んど小休すべし。此の中國を惠み、以て民逑を爲せ。詭隨を縱すこと無く、以て憯怓を謹んめよ。式つて寇虐を遏め、民をして憂へ俾むること無かれ。爾の勞を棄つること無く、以て王の休を爲せ。

㊀ 一時的安息なり ㊁ 人民の離れんとする心をよせて一味とするをいふ ㊂ 巧言利口を以て君聽をわづらはすものをいふ ㊃ 汝の前功を捨ててふることなかれと也 ㊄ 王の休美の德を成就せしめんと也

○民も亦勞す、汔んど小息すべし。此の京師を惠み、以て四國を綏んぜよ。詭隨を縱すことなく、以て罔極を謹しめん。式つて寇虐を遏め、慝を作さ俾むること無かれ。威儀を敬み愼みて、以て有德に近づけよ。

㊀ 極惡無道のものをいふ

○民も亦勞す、汔んど小惕すべし。此の中國を惠み、民の憂をして泄さ俾めよ。詭隨を縱すことなく、以て鴟鴞を謹しめよ。式つて寇虐を遏め、正をして敗れ

泄。無縱詭隨。以謹醜厲。式遏寇虐。無俾正敗。戎雖小子。而式弘大。

民亦勞止。汔可小安。惠此中國。國無有殘。無縱詭隨。以謹繾綣。式遏寇虐。無俾正反。王欲玉女。是用大諫。

上帝板板。下

俾むること無かれ。戎、小子と雖も、而も式つて弘大なり。

一 小息といふが如し一時いきをつぐをいふ　二 潰散せしむること　三 醜は衆也、諸惡人をいふ　四 正道を破壞せしむることなかれと也　五 少年をいふ　六 其爲す所天下の安危に關すること廣大なるをいふ

○民も亦勞す、汔んど小安すべし。此の中國を惠み、國、殘はるゝこと有ること無かれ。詭隨を縱すこと無く、以て繾綣を謹しめよ。式つて寇虐を遏め、正に反か俾むることなかれ。王、女を玉にせんと欲し、是を用つて大に諫む。

一 むすぼる、義なり、小人、君の心に取り入りて固く結びたるものをいふ　二 正道に違反せしことなかれと也　三 玉の如く之を愛すといふも一說也、玉の如く德を磨くといふも一說也

板

是れ同列相戒むる詞也。或は云ふ、此れ凡伯、厲王を刺れる時なりと

上帝板板たり、下民卒く癉みぬ。話を出すこと然らず、猶を爲すこと遠からず、聖を靡して管管たり、實に實あらず、猶の未だ遠からざる、是を以て大に諫む。

一 反也、常道に反することをいふ　二 理に合はざるをいふ　三 永遠の事を思はざるをいふ　四 眼中聖人なき意　五 我儘勝手の振舞のみにて依り頼むところなきをいふ　六 誠信も表面にて十分に實の入らざること

○天の方に難ませる、然く憲憲たること無かれ。天の方に蹶ける。然く泄泄たること無かれ。辭之れ輯らがば、民之れ洽はん。辭之れ懌ばば、民之れ莫まん。

一 人民を艱難ならしむること　二 よろこばしき說　三 ゆるまりたる說　四 朝廷に於ける衆臣がやはちぎてよろこばしくば天下の民心もものづかち合致して安定すゝを得べしとなり

○我、事を異にすと雖も、爾と同僚たり。我、爾に卽いて謀るも、我に聽くこと囂囂たり、我言維れ服なり、以て笑と爲すこと勿かれ。先民言へることあり、芻蕘に詢ると。

民卒攣。出レ話不レ然。爲レ猶不レ遠。靡レ聖管管。不レ實二於亶一。猶之未レ遠。是用大諫。

天之方難。無二然憲憲一。天之方蹶。無二然泄泄一。辭之輯矣。民之洽矣。辭之懌矣。民之莫矣。

我雖レ異レ事。及レ爾同僚。我卽レ爾謀。聽レ我囂囂。我言維服。勿二以爲一レ笑。先

民有言。詢二于芻蕘一。

天之方虐。無二然謔謔一。老夫灌灌。小子蹻蹻。匪二我言耄一。爾用憂謔。多將二熇熇一。不可二救藥一。

天之方懠。無爲二夸毗一。威儀卒迷。善人載尸。民之方殿屎。則莫二我敢一葉。喪亂蔑資。曾莫惠二我師一。

天之牖民。如壎如篪。如璋如圭。如取如攜。攜無曰益。牖民孔易。民之多辟。無二自立辟一。

价人維藩。大師維垣。大邦維屏。大宗維翰。懷德維寧。宗子維城。無俾二城壞一。無二獨斯畏一。

(一) 職掌の相違すること (二) 同役をいふ (三) 反つて我に問うて得意になり、此方の言を受けつけざるをいふ (四) 我言ふ所は是れ今日の急務なるをいふ (五) 古の賢人なり (六) 薪を采る者

○天の方に虐ぐる、然く謔謔たること無かれ。老夫灌灌たり、小子蹻蹻たり。我言の耄するに匪ず、爾、憂を用つて謔とす。多くば將に熇熇たらんとす、救藥すべからざらん。

(一) 無道の政治を行ふをいふ (二) 調戯笑敖の意にしてをどけ半分、笑半分によざけを様をいふ (三) 詩人自ら稱する辭 (四) ねんごろに誡をつくす貌 (五) 同僚を指す (六) あごりたかぶれる貌 (七) 老耄すること (八) 憂の多くならば火の盛にもゆるが如きに至らんとなり

○天の方に懠る、夸毗を爲すこと無かれ。威儀卒く迷ひ、善人も載ち尸のごとけん。民の方に殿屎する、則ち我を敢へて葉ること莫けん。喪亂蔑資し、曾て我師を惠はしむこと莫けん。

(一) 大言と狂言と也 (二) 威儀作法神亂るゝをいふ (三) 尸は神の代りに位に卽くもの也、いふ所なく爲す所なく唯飲食するのみ (四) によく聲卽ちうめくと也 (五) 民自身の苦をはかり知らざるをいふ (六) 人民の散亂するをいふ (七) 滅亡して嗟歎するをいふ、資は資と同し (八) 我が民衆をすなはち服従せしむる能はざるべしと也

○天の民を牖く、壎の如く篪の如く、璋の如く圭の如く、取るが如く攜ぐるが如し。攜ぐれば益さんと曰ふこと無し、民を牖くこと孔だ易し。民の辟多き、自ら辟を立つること無からん。

(一) 一說に道くと釋く (二) 土製の樂器也、樂聲の相和するが如くするをいふ (三) 竹製の樂器也、同上 (四) しるしの玉のわれば璋となり合すれば圭となるが如きをいふ (五) もきたるものを取りて引きあぐるが如きをいふ (六) ひきあげたる後には自分の力を益さんと曰ふものなし (七) 以上物のいと易きものをならべたる如く民の心を開くこともかたき事にあらずと也

○价人は維れ藩、大師は維れ垣、大邦は維れ屏、大宗は維れ翰。德を懷けば維れ寧し、宗子は維れ城。城をして壞れ俾むること無かれ、獨り斯れ畏るゝこと無かれ。

(一) 大德の人なり (二) 群衆なり (三) 强國なり (四) 强族なり (五) 同神なり

敬二天之怒一。無二敢戲豫一。敬二天之渝一。無二敢馳驅一。昊天曰明。及レ爾出王。昊天曰旦。及レ爾游衍。

○天の怒を敬んで、敢へて戲豫すること無かれ。天の渝はるを敬んで、敢へて馳驅すること無かれ。昊天曰に明なれば、爾と出王す。昊天曰に旦なれば、爾と游衍す。

一 敬み畏るゝこと　二 たはむれ遊びて喜樂にすること　三 天の常ならざるをいふ　四 我儘勝手にかけまはること　五 王は往と通ず、出でて往く所あるをいふ　六 あそびたのしむこと

先民之什十篇六十一章

蕩之什三之三

蕩

是れ召の穆公が周室の大に壞れたるを傷みて作れる詩也

蕩蕩たる上帝、下民の辟たる。疾威なる上帝、其命辟多し。天、烝民を生ず。其命諶ならず。初有らざること靡く、克く終あること鮮し。

蕩蕩上帝。下民之辟。疾威上帝。其命多レ辟。天生二烝民一。其命匪レ諶。靡レ不レ有レ初。鮮二克有レ終。

文王曰咨。咨女殷商。曾是彊禦。曾是掊克。曾是在レ位。曾是在レ服。天降二慆德一。女興是力。

文王曰咨。咨女殷商。而秉二義類一。彊禦多レ懟。流言以對。寇攘式レ內。侯作侯祝。靡レ屆靡究。

文王曰咨。咨

一 廣大なる貌　二 天下の君たるをいふ　三 猶暴虐といふが如し、威勢の甚だ強き君　四 邪辟即ち道に非ざるをいふ　五 衆民なり　六 信ずべからざるものあるをいふ

○文王曰く咨、咨女殷商よ。曾て是れ彊禦、曾て是れ掊克、曾て是れ位に在り、曾て是れ服に在り。天、慆德を降す、女興して是れ力めしむ。

一 彊禦にして善を禁ぐ、暴虐の臣を指す　二 自伐りて人に勝つことを求むる、聚斂の臣を指す　三 朝廷の位に居ること　四 政務の職事に服すること　五 自ら傲りて人を侮る惡德をいふ　六 汝が鼓舞をおこし立てて爲めて之を爲さしむるをいふ

○文王曰く咨、咨女殷商よ。而、義類を秉れ、彊禦は懟多し。流言以て對へ、寇攘內に式ふ。侯れ作し侯れ祝し、屆まり靡く究まり靡し。

一 善人の類をいふ　二 惡盜攘竊の徒を內に用ふること　三 作は詛と讀む、祝も同義、こゝにてはうちみそしる意となす　四 怨謗の極りなきをいふ

○文王曰く咨、咨女殷商よ。女、中國に怠傲し、怨を斂めて以て德と爲す。

女殷商。女無二焦于中國一。斂レ怨以爲レ德。不レ明二爾德一。時無レ背無レ側。爾德不レ明。以無レ陪無レ卿。

文王曰咨。咨女殷商。天不二湎レ爾以レ酒。不義從式。既愆二爾止一。靡レ明靡レ晦。式號式呼。俾二晝作レ夜。

文王曰咨。咨女殷商。如レ蜩如レ螗。如レ沸如レ

爾の德に明にせず、時れ背なく側なし。爾の德明ならず、以て陪なく卿なし。

㊀氣の強き鋭、虐政を爲して暴威を振ふ事なり ㊁人より惡まるゝ如き事を深山やりて反つて自ら威德なりと爲すをいふ ㊂賢者の用ひられざるをいふ ㊃陪は陪貳也、卿は卿士、前後左右公卿の臣皆其官に稱はずあだかも人無きが如くなるをいふ

○文王曰く咨、咨女殷商よ。天、爾を湎するに酒を以てせず、不義從つて式ふ。既に爾の止を愆り、明靡く晦靡し。式つて號び式つて呼び、晝をして夜と作さ俾む。

㊀酒に溺れしむるに非ざるをいふ ㊁唯不義の人にのみついて之を用ひるをいふ ㊂容止卽ち態度をいふ ㊃晝も無く夜もなきこと ㊄酒に醉うては大聲にてどなること、晝間を夜間の如く心得て政事などみもかへりざること

○文王曰く咨、咨女殷商よ。蜩の如く螗の如く、沸くが如く羹の如し。小大喪ぶるに近く、人尙ほ山り行ふ。內、中國に奠り、尊いて鬼方に及ぶ。

羹。小大近レ喪。人尙乎由行。內奠二于中國一。尊及二鬼方一。

文王曰咨。咨女殷商。匪二上帝不レ時。殷不レ用レ舊。雖レ無二老成人一。尙有二典刑一。曾是莫レ聽。大命以傾。

文王曰咨。咨女殷商。人亦有レ言。顚沛之揭。枝葉未レ有レ害。本實先拔。殷鑒不レ遠。在二夏后之世一。

㊀蜩の鳴くが如く天下の亂るゝをいふ ㊁あつものゝたぎれるが如く人心の安からざるをいふ ㊂大小の法度殆んど亡びんとすること ㊃うちみ怒ること ㊄えびすの名

○文王曰く咨、咨女殷商よ。上帝ならざるに匪ず、殷、舊を用ひざればなり。老成人なしと雖も、尙ほ典刑あり。曾て是れ聽くこと莫く、大命以て傾く。

㊀上帝が此の不善の時を爲るにあらずと也 ㊁舊法を守らざるが爲なるをいふ ㊂舊臣をいふ、閱歷多き人は專に老成なれば也 ㊃舊法 ㊄聽いて用ひるをいふ ㊅大命傾覆して救ふべからざるをいふ

○文王曰く咨、咨女殷商よ。人も亦言へることあり、顚沛の揭たる、枝葉未だ害あらず、本實先づ拔す。殷鑒遠からず、夏后の世に在り。

㊀たゝれふすこと ㊁木の根のぬけあがりたるをいふ ㊂未だ枯れざる意 ㊃木の根の實體を指す ㊄殷の鑒は絕也、生氣の盡きたるをいふ ㊅殷の手本は目前に在りと也 ㊆湯と桀とを指す

抑

是れ衛の武公の自ら警むる詩也

抑抑威儀。維德之隅。人亦有言。靡哲不愚。庶人之愚。亦職維疾。哲人之愚。亦維斯戾。

無競維人。四方其訓之。有覺德行。四方順之。訏謨定命。遠猶辰告。敬慎威儀。維民之則。

其在于今。興迷亂于政。顛覆厥德。荒湛于酒。女雖湛樂從。弗念厥紹。罔敷求先王。克共明刑。

肆皇天弗尚。如彼流泉。無淪胥以亡。夙興夜寐。洒掃廷內。維民之章。修爾車馬。弓矢戎兵。用逖蠻方。

質爾人民。謹爾侯度。用戒不虞。慎爾出令。

抑抑たる威儀、維れ德の隅なり。人も亦言へることあり、哲として愚ならざるは、庶人の愚なるは、亦維れ斯れ戾なり。

○競きこと無からんや維れ人、四方其れ之を訓とす。覺たる德行あり、四方之に順ふ。訏に謨りて命を定め、遠く猶して辰を告ぐ。威儀を敬慎す、維れ民の則なり。

○其れ今に在りて、政を迷亂するを興び、厥德を顛覆し、酒に荒湛す。女、湛樂に從ふと雖も、厥紹を念はざらんや。敷く先王を求めて、克く明刑を共ること罔からんや。

○肆に皇天尚ばず、彼の流泉の如く、淪胥して以て亡ぶると無かれ。夙に興き夜に寐ね、廷內を洒掃す。維れ民の章なり。爾の車馬と、弓矢戎兵とを修めよ。用つて戎の作るを戒め、用つて蠻方を逖けよ。

○爾の人民を質し。爾の侯度を謹み、用つて不虞を戒む。爾の話を出すを慎み、爾の威儀を敬み、柔嘉せざるは無し。白圭の玷けたるは、尚ほ磨く可し、

(一)抑抑たる威儀。(二)維れ德の隅なり。(三)人も亦言へることあり。(四)哲として愚ならざるは、庶人の愚なるは、(五)亦職として維れ疾なり。(六)哲人の愚なるは、亦維れ斯れ戾なり。

(一)透間なき樣に慎み守る義　(二)德の端正なる所以なり　(三)本來がもつて生れたる稟氣なり　(四)其常長にもとるをいふ

(一)競きこと無からんや維れ人、(二)四方其れ之を訓とす。(三)覺たる德行あり、(四)四方之に順ふ。(五)訏に謨りて命を定め、(六)遠く猶して辰を告ぐ。(七)威儀を敬慎す、維れ民の則なり。

(一)人より强き者なしの意　(二)故に能く人道を守れば四方皆教訓を受けて之を手本とするをいふ　(三)正くして大なる義なり　(四)一身の職を爲さざるをいふ　(五)號令を定むること　(六)一時の計を爲さざるをいふ　(七)時を告げ知らすこと

(一)其れ今に在りて、(二)政を迷亂するを興び、(三)厥德を顛覆し、(四)酒に荒湛す。(五)女、(六)湛樂に從ふと雖も、(七)厥紹を念はざらんや。(八)敷く先王を求めて、(九)克く明刑を共ること罔からんや。

(一)肆に皇天尚ばず、(二)彼の流泉の如く、(三)淪胥して以て亡ぶると無かれ。(四)夙に興き夜に寐ね、(五)廷內を洒掃す。(六)維れ民の章なり。(七)爾の車馬と、(八)弓矢戎兵とを修めよ。(九)用つて戎の作るを戒め、(十)用つて蠻方を逖けよ。

(一)ひつくりかへすこと　(二)心すさみて酒を樂むこと　(三)祖先より我が受けつぐ所のものを念はざるにはあらずと也　(四)先王の行へる道をたづね求むること　(五)法度を教り守るをいふ

(一)爾の人民を質し。(二)爾の侯度を謹み、(三)用つて不虞を戒む。(四)爾の話を出すを慎み、(五)爾の威儀を敬み、(六)柔嘉せざるは無し。(七)白圭の玷けたるは、(八)尚ほ磨く可し、(九)迷亂于政。顛覆厥德。荒湛于酒。女雖湛樂從。弗念厥紹。罔敷求先王。克共明刑。

(一)肆皇天弗尚。(二)如彼流泉。(三)無淪胥以亡。(四)夙興夜寐。(五)洒掃廷內。(六)維民之章。(七)修爾車馬。(八)弓矢戎兵。(九)用逖蠻方。

(一)質爾人民。(二)謹爾侯度。(三)用戒不虞。(四)慎爾出令。

(一)ひつくりかへすこと　(二)心すさみて酒を樂むこと　(三)祖先より我が受けつぐ所のものを念はざるにはあらずと也　(四)先王の行へる道をたづね求むること　(五)法度を教り守るをいふ

(一)爾の人民を質し。(二)爾の侯度を謹み、(三)用つて不虞を戒む。(四)爾の話を出すを慎み、(五)爾の威儀を敬み、(六)柔嘉せざるは無し。(七)白圭の玷けたるは、(八)尚ほ磨く可し、

(一)迷亂の興る用心を爲さること　(二)えびす共の來り侵すを逐ひ退けよといましめる也

話。敬二爾威儀一。無レ不二柔嘉一。白圭之玷。尚可レ磨也。斯言之玷。不レ可レ爲也。無レ易二由言一。無レ曰レ苟矣。莫レ捫二朕舌一。言不レ可レ逝矣。無二言不レ讎一。無二德不レ報一。惠二于朋友一。庶民小子。子孫繩繩。萬民靡レ不レ承。

視二爾友一君子。輯二柔爾顏一。不二遐有レ愆。相レ在二爾室一。尚不レ愧二于屋漏一。無レ曰不レ顯。莫二予云覯一。神之格思。不レ可レ度思。矧可レ射思。

辟爾爲レ德。俾レ臧俾レ嘉。淑慎二爾止一。不レ愆二于儀一。不レ僭不レ賊。鮮レ不レ爲レ則。投レ我以レ桃。報レ之以レ李。彼童而角。實虹二小子一。荏染柔木。言緡二之絲一。溫溫恭人。維德之

斯言の玷けたるは、爲すべからず。

一 事を成し定めて平らかに纏むるをいふ 二 諸統守る所の法度をいふ 三 意外の悲なり 四 柔順に雜行を爲さざることなきをいふ 五 角のある玉也

○由言を易くすること無かれ、苟もすと曰ふこと無かれ。朕が舌を捫ること莫く、言、逝かしむべからず。言として讎いざることなく、德として報いざることなし。朋友と、庶民小子とに惠へば、子孫繩繩として、萬民承けざること靡けん。

一 由言の由は意味なし於の字に似たり、言語を輕々しく容易に發することなれといふ意 二 かりそめにいひたりなどと適口上を使ふことなかれといふ意 三 我が身に舌をとりかふるものなしの意 四 みだりに言語を放ちやるべからずとなり 五 我人に物いへば人これに答へざるものなきをいふ 六 輩行也 七 子弟をいふ 八 聽えざる說 九 命を承けて服從すること

○爾の君子を友とするを視るに、爾の顏を輯柔し、遐ぞ愆あらざらんや。爾の室に在るを相るに、尚はくは屋漏に愧ぢず。曰ふこと無かれ顯ならずして、予を云に覯ること莫しと。神の格ること、度る可からず、矧んや射ふ可けんや。

一 顏色をとゝのへやはらぐること 二 かくいひて自から心づかひする也 三 屋漏とは室の西北の隅をいふ、人の居ざる處にもよく戒め慎みて恥づかしき事なかちんとするをいふ 四 こゝは人の知らざる處なれば誰も見る者なしといふことなかれと也 五 況んやこなたよりいとひあきて慎まざるを得んやの意

○辟爾德を爲して、臧からしめ嘉からしめよ。淑く爾の止を慎んで、儀に愆たざれ。僭はず賊はずんば、則と爲らざること鮮けん。我に投ずるに桃を以てせば、之に報ゆるに李を以てせん。彼の童にして角ある、實に小子を虹る。

一 武公を指す 二 牛羊の子のいまだ角なきを童といふ 三 武公を指す 四 惡はし亂る意

○荏染たる柔木は、言に之が緡を緡にす。溫溫たる恭人は、維れ德の基なり。其れ維れ哲人、之に話言を告ぐ。順德之れ行ふ、其れ維れ愚人なり。覆りて

基。其維哲人。告二之話言一。順德之行。其維愚人。覆謂二我僭一。民各心有。

於乎小子。未レ知二臧否一。匪二手攜レ之。言示二之事一。匪二面命レ之。言提二其耳一。借曰未レ知。亦既抱レ子。民之靡レ盈。誰夙知而莫成。

昊天孔昭。我生靡樂。視レ爾夢夢。我心慘慘。誨レ爾諄諄。聽我藐藐。匪二用爲レ教。覆用

我を僭と謂ふ、民各〻心あり。

一 やはやかなる貌　二 より合すること以て弓弦と爲すことをいふ　三 おだやかなる貌　四 古の善言也　五 不信なり　六 人心同しからず、賢愚相去るの遠きをいふ也

○於乎小子、未だ臧否を知らず。手之を攜するに匪ず、言に之に事を示す。面之を命ずるに匪ず、言に其耳を提ぐ。借ひ未だ知らずと曰ふとも、亦既に子を抱く。民の盈つる靡き、誰か夙く知りて莫く成らんや。

一 よしあし也　二 自ら足れりとせずして能く教訓を受くるものをいふ

○昊天孔だ昭なるも、我が生樂み靡し。爾を視るに夢夢たり、我心慘慘たり。爾を誨ふること諄諄たり、我に聽くこと藐藐たり。用つて教と爲すに靡ず、覆りて用つて虐と爲す。借ひ未だ知らずと曰ふとも、亦聿に既に耄す。

一 不明なる貌、無智の狀態をいふ　二 いたましく憂ふるさま　三 こまやかにくどくどしき貌　四 物事を確

爲レ虐。借曰未レ知。亦聿既耄。

於乎小子。告二爾舊止一。聽二用我謀一。庶無二大悔一。天方艱難。曰喪二厥國一。取レ譬不レ遠。昊天不レ忒。回二遹其德一。俾二民大棘一。

菀彼桑柔。其下侯旬。捋采其劉。瘼此下民。不レ殄二心憂一。倉兄填兮。倬彼昊天。寧不二

暗になはざりにする形容　六 知つて己を虐待すと思ふ也

○於乎小子、爾に舊きを告ぐ。我謀を聽き用ひば、庶はくは大いなる悔なけん。天方に艱難、曰に厥國を喪はんとす。譬を取ること遠からず、昊天忒はず、其德を回遹し、民をして大に棘ならしむ。

一 舊章なり、先王の辭樂刑政をいふ　二 我の譬を取ること決して遠からざるをいふ　三 天道輪廻の相遠なきを見れば直に之を知ちんと也　四 邪僻にすること　五 人民をして困窮急迫ならしむるをいふ

桑柔

是れ芮伯が厲王を刺れる詩也

菀たる彼の桑柔、其下侯れ旬し。捋り采りて其れ劉ひ、此下民を瘼ましむ。心の憂を殄たず、倉兄として填す。倬たる彼の昊天、寧ぞ我を矜まざる。

一 しげれる貌　二 桑の若木　三 桑の木の陰か何處も皆ひとしきをいふ　四 枝葉を采り盡してしまふこと　五 桑の木の下の人をいふ　六 雨やどりの陰を失うて不便を感ずるをいふ　七 倉悅と同じ、あはれなるさまを